

Arcserve® Unified Data Protection アプライアンス ユーザガイド

バージョン 6.5

arcserve®

リーガル ノーティス

組み込みのヘルプシステムおよび電子的に配布される資料も含めたこのドキュメント(以下「本書」)はお客様への情報提供のみを目的としたもので、Arcserve本ドキュメントは、Arcserveが知的財産権を有する機密情報であり、Arcserveの事前の書面による承諾を受けずに本書の全部または一部を複製、譲渡、変更、開示、修正、複製することはできません。

本ドキュメントで言及されているソフトウェア製品のライセンスを受けたユーザは、社内でユーザおよび従業員が使用する場合に限り、当該ソフトウェアに関連する本ドキュメントのコピーを妥当な部数だけ作成できます。ただし、Arcserveのすべての著作権表示およびその説明を当該複製に添付することを条件とします。

本書を印刷するかまたはコピーを作成する上記の権利は、当該ソフトウェアのライセンスが完全に有効となっている期間内に限定されます。いかなる理由であれ、そのライセンスが終了した場合には、ユーザはArcserveに本書の全部または一部を複製したコピーをArcserveに返却したか、または破棄したことを文書で証明する責任を負います。

準拠法により認められる限り、Arcserveは本書を現状有姿のまま提供し、商品性、お客様の使用目的に対する適合性、他者の権利に対する不侵害についての黙示の保証を含むいかなる保証もしません。また、本システムの使用に起因して、逸失利益、投資損失、業務の中断、営業権の喪失、情報の損失等、いかなる損害(直接損害か間接損害かを問いません)が発生しても、Arcserveはお客様または第三者に対し責任を負いません。Arcserveがかかる損害の発生の可能性について事前に明示に通告されていた場合も同様とします。

本書に記載されたソフトウェア製品は、該当するライセンス契約書に従い使用されるものであり、当該ライセンス契約書はこの通知の条件によっていかなる変更も行われません。

本書の制作者はArcserveです。

「制限された権利」のもとでの提供: アメリカ合衆国政府が使用、複製、開示する場合は、FAR Sections 12.212, 52.227-14 及び 52.227-19(c)(1) 及び (2)、及び、DFARS Section 252.227-7014(b)(3) または、これらの後継の条項に規定される該当する制限に従うものとします。

© 2018 Arcserve (その関連会社および子会社を含む)。All rights reserved. サードパーティの商標または著作権は各所有者の財産です。

Arcserve サポート へのお問い合わせ

Arcserve サポート チームは、技術的な問題を解決する際に役立つ豊富なリソースセットを提供し、重要な製品情報にも容易にアクセスできます。

[テクニカル サポート へのお問い合わせ](#)

Arcserve サポート:

- 弊社の専門家が社内で共有しているのと同じ情報ライブラリに直接アクセス Arcserve サポート できます。このサイトから、弊社のナレッジ ベース(KB)ドキュメントにアクセスできます。ここから、重要な問題やよくあるトラブルについて、製品関連 KB 技術情報を簡単に検索し、検証済みのソリューションを見つけることができます。
- ユーザはライブ チャット リンクを使用して、チームと瞬時にリアルタイムで会話を始めることが Arcserve サポート できます。ライブ チャットでは、製品にアクセスしたまま、懸念事項や質問に対する回答を即座に得ることができます。
- グローバルユーザコミュニティでは、Arcserve 質疑応答、ヒントの共有、ベストプラクティスに関する議論、および同業者との対話に参加できます。
- サポート チケットを開くことができます。オンラインでサポート チケットを開くと、質問の対象製品を専門とする担当者から直接、コールバックを受けられます。
- また、使用している製品に適したその他の有用なリソースにアクセス Arcserve できます。

Arcserve UDP アプライアンスの返品ポリシー

有効な RMA (返品認定) 番号は、製品を Arcserve に返却するために必要です。RMA 番号を取得するには、Arcserve テクニカルサポート部門にお問い合わせください。お客様の担当者の連絡先情報については、arcserve.com/support を参照してください。サポート チームから RMA データの送信先が通知される場合があります。

返品には、10% の返品手数料がかかります。以下は例外となります。1) 注文が間違っ て履行された場合、Arcserve は RMA を受け入れ、全額を返金します。2) 欠陥のあるアイテムが 30 日以内に返品された場合、Arcserve は RMA を受け入れ、全額を返金します。3) ハードウェアに技術的な問題がある場合、解決のための適切な期間を経過した後もサポートによって解決できなければ、Arcserve は RMA を受け入れ、同等の価値のあるハードウェアの交換を提供します。

RMA リクエストに必要な情報：

- 製品のシリアル番号 (アプライアンスの背面に記載があります)
- Arcserve 注文番号
- パートナーの連絡先名
- パートナーの電話番号
- パートナーの電子メールアドレス
- お客様の連絡先名 (可能な場合)
- 電話番号 (可能な場合)
- 電子メールアドレス (可能な場合)
- 問題の説明とすでに実行されたトラブルシューティングの説明。
- 要求された配送サービスおよび出荷先住所。

RMA 番号は、パッケージの外側に明確に記されている必要があります。すべての RMA は、適切な梱包で出荷される必要があります。すべての RMA は、荷物のトラックングおよび保証を提供する信頼できる運送業者を使用して出荷する必要があります。出荷時の破損または RMA の損失はお客様の責任になります。

コンテンツ

第 1 章: アプライアンスのマニュアルについて	9
言語サポート	10
製品ドキュメント	11
第 2 章: Arcserve UDP アプライアンスについて	12
概要	13
Arcserve Unified Data Protection	14
Arcserve UDP エージェント (Linux)	15
Arcserve Replication/High Availability (Arcserve RHA)	16
Arcserve Backup	17
安全に関する注意事項	18
同梱されている内容	19
箱に含まれていない項目	20
利用可能なモデル	21
モデル 7100 - 7300v	22
モデル 7400 - 7600v	24
モデル 8100-8400	27
コントロールおよびインジケータ	29
前面パネル 7100-7300v	30
前面パネル 7400-7600v	33
前面パネル 8100-8200	35
前面パネル 8300-8400	38
背面パネル 7100-7300v	40
背面パネル 7400-7600v	42
背面パネル 8100-8200	44
背面パネル 8300-8400	46
アプライアンスが使用するポート	48
Arcserve UDP	49
Microsoft Windows にインストールされるコンポーネント	50
Linux にインストールされているコンポーネント	52
リモートで UDP Linux により保護されている実稼働ノード	53
Arcserve Backup	54
Linux 用アプライアンスのサポート	55
第 3 章: Arcserve UDP アプライアンスの設置	56

Arcserve Backup r17.5 をインストールする方法	57
8100-8200 シリーズ アプライアンスの設置方法	59
8300-8400 シリーズ アプライアンスの設置方法	60
第 4 章: ネットワーク設定の理解	61
NIC チーミングを設定する方法	62
DHCP サーバを無効化する方法	64
UDP アプライアンスのネットワーク環境設定を理解する方法	65
プリインストールされた Linux バックアップ サーバの IP アドレスを設定する方法	70
負荷分散のために DNS サーバ上でラウンド ロビンを有効にする方法	72
第 5 章: アプライアンス上の Arcserve UDP のアップグレード	74
Arcserve ソフトウェアのアップグレード後にライセンスを適用する方法	75
Arcserve UDP アプライアンス上のアップグレード シーケンス	76
Arcserve UDP コンソールおよび RPS として機能する Arcserve UDP アプライアンスのアップグレード	77
Arcserve UDP RPS としてのみ機能する Arcserve UDP アプライアンスのアップグレード	78
複数の Arcserve UDP アプライアンスが環境で使用されている場合のアップグレード手順	79
Arcserve UDP アプライアンス上の Arcserve UDP Linux エージェントのアップグレード	80
Arcserve UDP アプライアンス上の Arcserve Backup のアップグレード	81
UDP コンソール、RPS、エージェントのアップグレード シーケンス	82
第 6 章: Arcserve UDP アプライアンスの設定	83
UDP アプライアンス用にネットワーク環境を設定する方法	84
UDP アプライアンス ウィザードを使用したプランの作成の概要	89
Arcserve UDP アプライアンスを設定してプランを作成する方法	90
プランへのノードの追加の詳細	99
ホスト名/IP アドレスによるノードの追加	100
Active Directory によるノードの追加	102
vCenter/ESX ノードの追加	104
Hyper-V ノードの追加	106
ゲートウェイとしての UDP アプライアンスの設定	108
環境設定の消去およびアプライアンスファクトリリセットの適用	109
ブート オプションを使用した Arcserve UDP ファクトリリセットの適用	111
アプライアンス上の Arcserve 製品をアクティブ化する方法	115
第 7 章: バックアップ プランの作成	116
Linux ノード用のバックアップ プランの作成	117
テープ デバイスへのバックアップ プランの作成	118

アプライアンス上仮想スタンバイプランの作成	119
第 8 章: Arcserve UDP アプライアンスの修復	120
ハードドライブの取り外しおよび交換	121
第 9 章: 安全に関する注意事項	125
一般的な安全に関する注意事項	126
電気に関する安全のための注意事項	128
FCC コンプライアンス	129
静電気放電(ESD)に関する注意事項	130
第 10 章: IPMI での作業	131
IPMI パスワードを変更する方法	132
IPMI ファームウェアをアップグレードする方法	135
第 11 章: アプライアンス サーバへのアプライアンス拡張シェルフ の接続	137
すべての利用可能なモデルのためのアプライアンスインフィールド拡張	138
同梱されている内容	148
アプライアンスサーバへのアプライアンス拡張シェルフの接続方法	151
Arcserve UDP データストアの変更方法	160
拡張シェルフのデータパスを Arcserve UDP データストアに追加する	161
新しい SSD へのハッシュ デスティネーションの移行	162
Arcserve UDP コンソールからの <data store name> データストア全体の容量の確認 ..	163
Arcserve UDP コンソールからのすべてのプランの再開	164
第 12 章: トラブルシューティング	165
Linux バックアップサーバにコンソールから接続できない	166
別のアプライアンスから UDP アプライアンスをバックアップすると重複するノードがレ ポートされる	167
Linux バックアップサーバがネットワーク DNS サフィックスを取得できない	169
アプライアンスのデフォルトのタイムゾーン	170
ライセンスがある場合でもライセンスエラーになる	171
第 13 章: 推奨事項	172
ネットワーク構成に関する推奨事項	173
Arcserve UDP コンソールの移行に関する推奨事項	176
データを保持しないベアメタル復旧(BMR)に関する推奨事項	178
データを保持するベアメタル復旧(BMR)に関する推奨事項	193
Linux 移行ツールに関する推奨事項	201
アプライアンスイメージ設定ユーティリティツールを設定するための推奨事項	203

Arcserve UDP アプライアンスに事前インストールされている Linux バックアップ サーバに関する推奨事項	206
Arcserve UDP アプライアンスに Linux のバックアップ サーバ自体をバックアップさせるための推奨事項	208
Arcserve UDP アプライアンスからアプライアンスへの移行の推奨事項	212
解決策 1	213
解決策 2	217
ローカルアプライアンス Hyper-V に対する Arcserve UDP Linux インスタント VM ジョブの推奨事項	220
リモートで管理される RPS ヘルプリケート タスクを別のアプライアンスに追加するベスト プラクティス	221
モニタが別のアプライアンスである仮想スタンバイ (VSB) タスクを実行するベスト プラクティス	223
第 14 章: 使用条件	225
putty	226

第 1 章: アプライアンスのマニュアルについて

Arcserve UDP アプライアンス ユーザガイドは、Arcserve UDP アプライアンスを使用する方法の理解に役立ちます。UDP アプライアンスの詳細については、「概要」を参照してください。残りのセクションでは、Arcserve UDP アプライアンスのインストールと使用方法について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

言語サポート	10
製品ドキュメント	11

言語サポート

英語および複数のローカル言語のドキュメントが用意されています。

翻訳済み製品 (ローカライズ済み製品とも言います) とは、製品のユーザインターフェース、オンラインヘルプ、その他のドキュメントのローカル言語サポートに加えて、日付、時刻、通貨、数値に関してローカル言語でのデフォルトの書式設定をサポートする国際化製品です。

このリリースは、以下の言語で使用できます。

- 英語
- 中国語 (簡体字)
- 中国語 (繁体字)
- フランス語
- ドイツ語
- イタリア語
- 日本語
- ポルトガル語 (ブラジル)
- スペイン語

製品ドキュメント

Arcserve UDP 関連のすべてのドキュメントを参照するには、このリンクをクリックして [Arcserve のドキュメント](#) にアクセスしてください。

Arcserve UDP ナレッジ センターは、以下のドキュメントで構成されています。

- **Arcserve UDP ソリューションガイド**

一元管理されたコンソール環境で Arcserve UDP ソリューションを使用するための詳細情報が提供されています。このガイドには、ソリューションをインストールおよび設定する方法、データを保護およびリストアする方法、レポートを取得する方法、Arcserve High Availability を管理する方法などの情報が含まれています。手順には、コンソールの使用を中心に、さまざまな保護プランの使用方法が含まれています。

- **Arcserve UDP リリースノート**

Arcserve Unified Data Protection の主な機能、システム要件、既知の問題、ドキュメントの問題、制限事項などの概要が説明されています。

- **Arcserve UDP Agent for Windows ユーザガイド**

Windows オペレーティングシステムで Arcserve UDP Agent を使用するための詳細情報が提供されています。このガイドには、エージェントをインストールおよび設定する方法、Windows ノードを保護およびリストアする方法などの情報が含まれています。

- **Arcserve UDP Agent for Linux ユーザガイド**

Linux オペレーティングシステムで Arcserve UDP Agent を使用するための詳細情報が提供されています。このガイドには、エージェントをインストールおよび設定する方法、Linux ノードを保護およびリストアする方法などの情報が含まれています。

第 2 章: Arcserve UDP アプライアンスについて

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

概要	13
安全に関する注意事項	18
同梱されている内容	19
箱に含まれていない項目	20
利用可能なモデル	21
コントロールおよびインジケータ	29
アプライアンスが使用するポート	48

概要

Arcserve UDP アプライアンスは、アシュアード リカバリ™を搭載した最初の完全に最もコスト効率の良い保護アプライアンスです。各 Arcserve UDP アプライアンスは、自己完結型の「set and forget(設定後は作業不要)」のバックアップ/復旧ソリューションです。クラウド ネイティブ機能によって構築されており、その極めて容易な導入とユーザビリティが、一連の幅広い機能(ソースベースのグローバルデデュプリケーション、マルチサイトレプリケーション、テープのサポート、自動化されたデータ復旧機能などの)と組み合わせられています。Arcserve UDP アプライアンスは、運用において優れた敏捷性と効率性を実現し、障害復旧作業を大幅に簡略化します。

Arcserve UDP アプライアンスは、最新のハードウェアにプリインストールされている主要な Arcserve Unified Data Protection ソフトウェアと完全に統合されています。アプライアンスは、すべてのユーザに対して、完全な統合データ保護ソリューションを提供し、現在の需要を満たすだけでなく、絶え間なく変化するバックアップ、アーカイブ、惨事復旧(DR)の今後の要件にも対応できます。

以下のソフトウェアは、Arcserve UDP アプライアンスにプリインストールされています。

- Windows オペレーティング システム バージョン 2012 R2 Standard Server または 2016 Standard Server
- Arcserve UDP
- Arcserve UDP エージェント(Linux)
- Arcserve Backup
- Arcserve Replication/High Availability (RHA)

Arcserve UDP の各アプライアンスには、3年間のハードウェア保証が付いています。この保証の詳細については、arcserve.com/udp-appliance-warranty を参照してください。

Arcserve Unified Data Protection

Arcserve UDP ソフトウェアは、複雑な IT 環境を保護する包括的なソリューションです。このソリューションは、Windows、Linux、VMware ESX Server、Microsoft Hyper-V Server など、さまざまな種類のノードに存在するデータを保護します。ローカルマシンまたは復旧ポイントサーバのいずれかへデータをバックアップできます。復旧ポイントサーバは複数のソースからのバックアップが保存される中央サーバです。

サポートされているオペレーティングシステムの詳細については、「[互換性マトリクス](#)」を参照してください。

Arcserve UDP には、以下の機能が用意されています。

- 復旧ポイントサーバ上のデデュプリケーション/非デデュプリケーションデータストアにデータをバックアップ
- Arcserve Backup (アプライアンスに含まれています) との統合を使用して、復旧ポイントをテープにバックアップ
- バックアップデータから仮想スタンバイマシンを作成
- バックアップデータを復旧ポイントサーバおよびリモート復旧ポイントサーバにレプリケート
- バックアップデータをリストアし、ベアメタル復旧 (BMR) を実行
- 選択したデータバックアップファイルをセカンダリバックアップ先へコピー
- 環境内の重要なサーバに対して Arcserve Full System High Availability (HA) を設定および管理

Arcserve UDP は、あるサーバから別の復旧ポイントサーバに復旧ポイントとして保存されるバックアップデータをレプリケートします。バックアップデータから、ソースノードで不具合が発生したときにスタンバイマシンとして機能できる仮想マシンを作成することもできます。スタンバイ仮想マシンを作成するには、復旧ポイントを VMware ESX または Microsoft Hyper-V 仮想マシン形式に変換します。

Arcserve UDP ソリューションは、Arcserve High Availability との統合を提供します。Arcserve High Availability でシナリオを作成した後、これらのシナリオを管理およびモニタし、デスティネーションマシンの追加や削除のような操作を実行できます。

Arcserve UDP エージェント (Linux)

Arcserve UDP エージェント (Linux) は、Linux オペレーティングシステム用に設計されたディスクベースのバックアップ製品です。ビジネス上の重要な情報を保護および復旧する際に、高速で簡単に使用できる、信頼性の高い方法を提供します。Arcserve UDP エージェント (Linux) は、ノード上の変更をブロックレベルでトラッキングし、変更されたブロックのみを増分プロセスでバックアップします。これにより、バックアップの実行頻度を増やすことができ、増分バックアップのサイズ(およびバックアップ時間)が削減されるため、これまでよりも最新のバックアップを利用できるようになります。また、Arcserve UDP エージェント (Linux) を使用して、ファイルやフォルダのリストア、および単一のバックアップからのベアメタル復旧 (BMR) を実行することもできます。バックアップ情報は、バックアップソースノードで、NFS (Network File System) 共有または CIFS (Common Internet File System) 共有に保存できます。

Arcserve UDP エージェント (Linux) の最新のバージョンは、アプライアンス内の仮想マシンにプリインストールされます。この仮想マシンが Linux バックアップサーバになります。Arcserve UDP エージェント (Linux) は、UDP アプライアンス内のデフォルトのインストールパスにインストールされます。

コンソールを開くと、Linux バックアップサーバはすでにコンソールに追加されています。Linux バックアップサーバのネイティブホスト名は *Linux-BackupSvr* です。ただし、コンソールでは、Linux バックアップサーバでは、ポート 8018 環境設定を使用してアプライアンスのホスト名を適用します。Linux バックアップサーバは、ポートの方向制御を通じて NAT の背後で動作します。Linux バックアップサーバでは、ポート 8018 を使用して通信を行い、Arcserve UDP アプライアンス内のデータを転送します。

注: バックアッププランの作成および Linux マシンのリストアに関する詳細については、「Arcserve UDP Agent for Linux ユーザガイド」を参照してください。

Linux バックアップサーバでは、以下のデフォルトのログイン情報が使用されます。

- ユーザー名 - root
- パスワード - Arcserve

注: デフォルトのパスワードは変更することをお勧めします。

Arcserve Replication/High Availability (Arcserve RHA)

Arcserve RHA は、非同期リアルタイムレプリケーション、自動化されたスイッチオーバーおよびスイッチバックに基づくソリューションです。Windows サーバ上の仮想環境にコスト効率の高いビジネス継続性を提供します。サポートされているオペレーティングシステムの詳細については、「[互換性マトリクス](#)」を参照してください。

Arcserve RHA は、データをローカルサーバまたはリモートサーバにレプリケートできるため、サーバのクラッシュやサイトに惨事が発生した場合のデータの回復をサポートします。ハイアベイラビリティのライセンスを所有している場合、ユーザをレプリカサーバに手動または自動で切り替えることができます。

Arcserve Replication/High Availability をインストールして設定する方法の詳細については、[オンラインドキュメント](#)を参照してください。

Arcserve Backup

Arcserve Backup は、多種多様な環境のビジネスニーズに対応する高性能なデータ保護ソリューションです。本製品は、柔軟なバックアップとリストア、容易な管理、幅広いデバイス互換性、そして信頼性を提供します。また、ストレージ要件に応じてデータ保護戦略をカスタマイズできるため、データストレージの機能を最大限に活用できます。さらに、柔軟なユーザインターフェースにより詳細な設定が可能で、あらゆるユーザがその技術的知識のレベルにかかわらず、さまざまなエージェント機能や各種オプションを展開して保守できます。

Arcserve Backup には分散環境向けの包括的なデータ保護機能があり、ウイルスフリーのバックアップおよびリストア操作を実現します。多種多様なオプションとエージェントにより、企業全体でのデータ保護機能が強化され、さまざまな拡張機能 (オンラインホット バックアップや、アプリケーションおよびデータファイルのリストア、拡張デバイスおよびメディアの管理、惨事復旧など) が使用可能になります。

UDP アプライアンスには、テープへのバックアップを実行するために Arcserve Backup との統合機能が含まれています。InstallASBU.bat を実行すると、Arcserve Backup がコンピュータ上の "C:\Program Files (x86)\Arcserve" にインストールされます。UDP アプライアンス内にインストールされるコンポーネントを使用して、Arcserve UDP のデスティネーションをテープにバックアップできます。サポートされているオペレーティングシステムの詳細については、「[互換性マトリクス](#)」を参照してください。

Arcserve Web サイトから Arcserve Backup のフルインストールパッケージをダウンロードして、他のコンポーネントをインストールできます。詳細については、Arcserve Backup オンライン r17.5 の[オンラインドキュメント](#)を参照してください。

Arcserve Backup サーバでは、以下のデフォルトのログイン情報が使用されます。

- ユーザ名 -- caroot
- パスワード -- Arcserve

安全に関する注意事項

安全のため、Arcserve UDP アプライアンスに対して開梱、接続、設置、電源投入などの操作を行う場合は、すべての手順を事前に確認し、指示に従ってください。安全に関する注意事項に従わないと、人身傷害、機器の破損、または誤動作などが発生する可能性があります。

安全に関する注意事項の詳細については、「[安全に関する注意事項\(付録\)](#)」を参照してください。

同梱されている内容

箱には以下の項目が含まれています。

- Arcserve UDP アプライアンス(シリアル番号 のラベルはアプライアンスの背面にあります)
- 電源ケーブル: 1
- ネットワークケーブル: 1 赤、1 青 (それぞれ 3 フィートの長さ)
- IPMI ポート ケーブル: 1 (7 フィートの長さ)
- レール/ラック マウント キット - 2 つの外側レール(クイック インストール)、2 つの内側レール延長、3 つのレールアダプタ(標準のレール マウントのみ)、付属ハードウェア(必要な場合) が含まれています。
- Arcserve フェースプレート
- Microsoft クライアント アクセスライセンス

注: アプライアンスに同梱されている内容をチェックして、足りない項目がないかどうか、および破損がないことを確認します。足りないアイテムまたは破損がある場合は、すべてのパッケージ資材を保持して Arcserve サポートにご連絡ください:

<https://www.arcserve.com/support>。

箱に含まれていない項目

以下の項目は、箱に含まれておらず、アプライアンスの設置および設定に必要な場合があります。

- モニタ
- キーボード
- 外部ストレージ デバイス(必要な場合)

利用可能なモデル

Arcserve UDP 7000 シリーズおよび 8000 シリーズ アプライアンスは、お客様のさまざまなニーズを満たすように設計された多種多様なモデルで提供されています。

- [モデル 7100 - 7300v](#)
- [モデル 7400 - 7600v](#)
- [モデル 8100 - 8400](#)

モデル 7100 - 7300v

Arcserve UDP アプライアンス モデル 7100 - 7300v

Arcserve UDP 7000 シリーズ アプライアンスの仕様					
アプライアンス モデル	7100	7200	7200V	7300	7300V
バックアップストレージ容量					
Raw ストレージ容量 *	3 TB	6 TB	6 TB	9 TB	9 TB
使用可能なバックアップ容量 **	2.8 TB	5.8 TB	5.8 TB	8.8 TB	8.8 TB
保護されている(ソースデータ) 容量 ***	最大 8 TB	最大 17 TB	最大 17 TB	最大 26 TB	最大 26 TB
標準機能					
統合管理コンソール、グローバルデデュープリケーション、ブロックレベルの無限増分バックアップ、圧縮、暗号化、WAN最適化レプリケーション、拡張仮想化のサポート、エージェントレスバックアップ、リモート仮想スタンバイ、テープのサポート、アプリケーション整合性のあるバックアップ、詳細リストア、統合レポート、ダッシュボード。					
アプライアンスの仮想スタンバイ	N/A	N/A	最大 3 つの VM	N/A	最大 3 つの VM
保証および技術的仕様					
フルシステム Depot 保証	3 年間				
物理的なサイズ (H x W x D インチ)	1.7" x 17.2" x 25.6" (1U - 19" ラック マウント レールを提供)				
リモート管理およびネットワークインターフェース	1 x IPMI & 2 x 1 GbE (RJ45)				

ポート					
ハード ディスクの種類および RAID 構成	4 x 1 TB SAS (RAID 5)	4 x 2 TB SAS (RAID 5)	4 x 2 TB SAS (RAID 5)	4 x 3 TB SAS (RAID 5)	4 x 3 TB SAS (RAID 5)
外部テープバックアップ接続 (SAS、SATA、FC)	1 x PASS				
システム RAM 合計	16 GB	16 GB	32 GB	32 GB	48 GB
SSD ドライブ (デデュプリケーション ハッシュテーブル用)	120 GB SSD	120 GB SSD	120 GB SSD	240 GB SSD	240 GB SSD
最大重量 (lbs)	41 lbs				
電源 (単一または冗長)	1 x 600W				
消費電力 (アイドル/ロード/スタートアップ時のワット)	93/116/143	122/164/143	125/167/145	125/167/145	129/188/152
AC 電圧および周波数範囲	100 - 240v				
アンペア定格	7.5 アンペア(最大)				
<p>*1 TB = 1,000,000,000,000 バイト</p> <p>** "V"モデルでは、バックアップに使用可能な容量は、仮想スタンバイ VM のサイズのみで少なくなります。</p> <p>*** 一般的な 3:1 のデデュプリケーションおよび圧縮率を想定して容量を推定しています。バックアップの実際の容量は、データの種類、バックアップの種類、スケジュールなどに基づいて、大幅に変わる可能性があります。</p>					

モデル 7400 - 7600v

Arcserve UDP アプライアンス モデル 7400 - 7600v

Arcserve UDP 7000 シリーズ アプライアンスの仕様						
アプライアンス モデル	7400	7400V	7500	7500V	7600	7600V
バックアップストレージ容量						
Raw ストレージ容量*	16 TB	16 TB	20 TB	20 TB	30 TB	30 TB
使用可能なバックアップ容量**	15.8 TB	15.8 TB	19.8 TB	19.8 TB	29.8 TB	29.8 TB
保護されている (ソースデータ) 容量***	最大 46 TB	最大 46 TB	最大 58 TB	最大 58 TB	最大 90 TB	最大 90 TB
標準機能						
統合管理コンソール、グローバルデデュプリケーション、ブロックレベルの無限増分バックアップ、圧縮、暗号化、WAN最適化レプリケーション、拡張仮想化のサポート、エージェントレスバックアップ、リモート仮想スタンバイ、テープのサポート、アプリケーション整合性のあるバックアップ、詳細リストア、統合レポート、ダッシュボード。						
アプライアンスの仮想スタンバイ	N/A	最大 6 つの VM	N/A	最大 9 つの VM	N/A	最大 12 つの VM
保証および技術的仕様						
フルシステム Depot 保証	3 年間					
物理的なサイズ (H x W x D インチ)	3.5" x 17.2" x 25.6" (2U - 19" ラック マウント レールを提供)					
リモート管理およびネットワーク	1 x IPMI & 2 x 1 GbE (RJ45) および 4 x 1GbE (RJ45) 。 2 x 10 Gb (オプション)					

クインター フェース ポート						
ハードディ スクの種類 および RAID 構成	10 x 2 TB SAS (RAID 6)	10 x 2 TB SAS (RAID 6)	12 x 2 TB SAS (RAID 6)	12 x 2 TB SAS (RAID 6)	12 x 3 TB SAS (RAID 6)	12 x 3 TB SAS (RAID 6)
外部テー プバック アップ接続 (SAS、 SATA、 FC)	1 x PASS					
システム RAM 合計	64 GB	96 GB	64 GB	96 GB	128 GB	192 GB
SSDドライ ブ (デデュープリ ケーション ハッシュ テーブル 用)	240 GB SSD	240 GB SSD	480 GB SSD	480 GB SSD	480 GB SSD	480 GB SSD
最大重量 (lbs)	52 lbs					
電源 (単一または冗長)	2 x 920w					
消費電力 (アイドル/ ロード/ス タートアップ 時のワッ ト)	208/257/ 358	208/257/ 358	208/257/ 358	208/257/ 358	240/296/ 369	240/296/ 369
AC 電圧お よび周波 数範囲	100 - 240v					
アンペア定 格	11 アンペア(最大)					
<p>*1 TB = 1,000,000,000,000 バイト</p> <p>** "V"モデルでは、バックアップに使用可能な容量は、仮想スタンバイVMのサイズの分だけ少なくなります。</p> <p>*** 一般的な 3:1 のデデュープリケーションおよび圧縮率を想定して容量を推定しています。バックアップの実際の容量は、データの種類、バックアップの種類、スケジュールなどに基づ</p>						

いて、大幅に変わる可能性があります。

モデル 8100-8400

Arcserve UDP アプライアンス モデル 8100 - 8400

Arcserve UDP 8000 シリーズ アプライアンスの仕様				
アプライアンスモデル	UDP 8100	UDP 8200	UDP 8300	UDP 8400
ソースバックアップ*	12TB-18TB	24TB-36TB	48TB-128TB	96TB-240TB
システムRAM	32GB	32GB	64GB	128GB
最大RAM**	64GB/96GB/160GB		96GB/128GB/192GB	160GB/192GB/256GB
SSDドライブ	120GB SSD	200GB SSD	480GB SSD	1.2TB SSD
プロセッサ	E5 2609 V4、8 コア、1.7 GHZ	E5 2620 V4、8 コア、2.1 GHZ	E5 2640 V4、10 コア、2.4 GHZ	E5 2650 V4、12 コア、2.2 GHZ
RAIDカード	9361-4i		9361-8i	
RAID構成	BBU 付き Raid-5		BBU 付き Raid-6	
ドライブベイ	4		12	
ドライブ	3x 2TB SAS 12G 4x 2TB SAS 12G	3x 4TB SAS 12G 4x 4TB SAS 12G	6x 4TB SAS 12G 7x 4TB SAS 12G 8x 4TB SAS 12G 9x 4TB SAS 12G 10x 4TB SAS 12G 11x 4TB SAS 12G 12x 4TB SAS 12G	6x 8TB SAS 12G 7x 8TB SAS 12G 8x 8TB SAS 12G 9x 8TB SAS 12G 10x 8TB SAS 12G 11x 8TB SAS 12G 12x 8TB SAS 12G
DIMM/最大	4x 8GB DDR4-2400/ 8		4x 16GB DDR4-2400/ 8	4x 32GB DDR4-2400/ 8

DIMM			
カード	LSI SAS9200-8E		
電源	2 x ホット スワップ冗長 500W AC Platinum	2 x 920W ホット スワップ冗長高効率 AC 電源、Platinum レベル	

* 一般的な 3:1 のデデュプリケーションと圧縮率を想定して容量を推定しています。バックアップの実際の容量は、データの種類、バックアップの種類、バックアップスケジュールなどに基づいて、大幅に変わる可能性があります。

** Arcserve アプライアンスには、アプライアンス上で仮想スタンバイ/インスタント VM の復旧をホストするために、追加の RAM があります。VM のメモリ割り当ては、ゲスト OS のワークロードに基づいてサイズ設定する必要があります。Arcserve では、お客様のニーズに基づいて、標準のアプライアンス構成に RAM を追加するオプションも提供します。

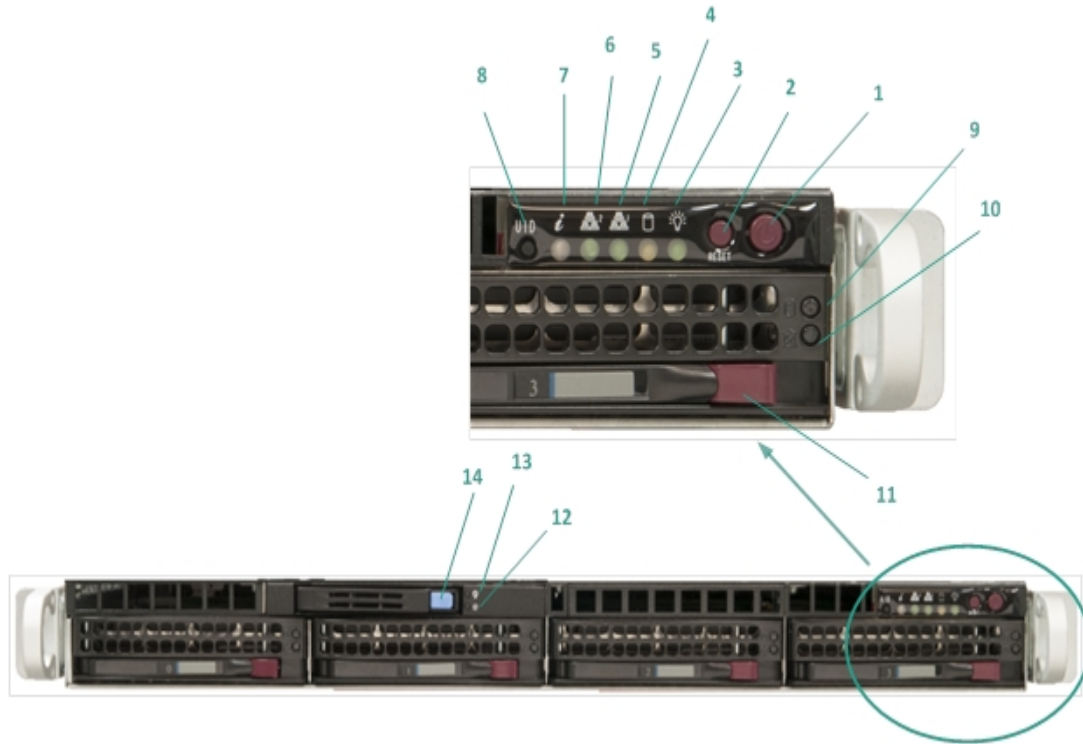
コントロールおよびインジケータ

Arcserve UDP アプライアンスには、前面および背面のパネルと各ドライブ キャリアにいくつかのコントロールとインジケータ(LED) が備わっています。これらのコントロールおよびインジケータによって、さまざまな機能を制御でき、アプライアンスとコンポーネントのステータスをすばやく参照する機能を提供します。

- [前面パネル 7100-7300v](#)
- [前面パネル 7400-7600v](#)
- [前面パネル 8100-8200](#)
- [前面パネル 8300-8400](#)
- [背面パネル 7100-7300v](#)
- [背面パネル 7400-7600v](#)
- [背面パネル 8100-8200](#)
- [背面パネル 8300-8400](#)

前面パネル 7100-7300v

Arcserve UDP アプライアンスの前面パネルには、コントロールパネルボタン、コントロールパネルLED、ドライブキャリアLEDが備わっています。以下の表で、これらの項目について説明します。



番号	コントロール/インジケータ	説明
1	電源ボタン	アプライアンスコンポーネントに対して電源をオンまたはオフにするために使用されます。電源をオフにした場合、主電源はオフになりますが、スタンバイ電源は引き続き供給されます。そのため、アプライアンスの電源を完全にオフにするには、メンテナンスを実行する前に電源ケーブルをコンセントから抜いてください。
2	リセットボタン	アプライアンスを再起動するために使用されます。
3	電源LED	緑色の点灯: アプライアンスの電源に電力が供給されていることを示します。 アプライアンスの稼働中は、通常このLEDが点灯しています。
4	デバイスアクティビティLED	黄色の点滅: 少なくとも1つのハードドライブ上のアクティビティを示します。
5	ネットワーク	黄色の点滅: ネットワーク1 (ETH0ポート) 上のネットワークアク

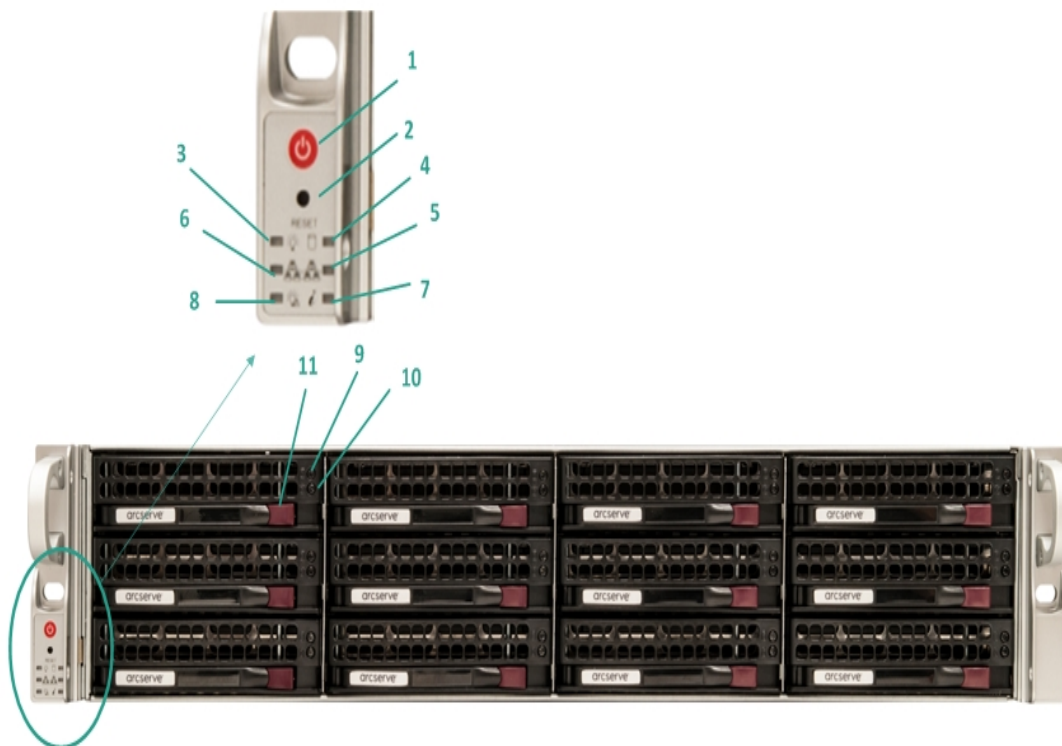
	インターフェイスカード (NIC1) LED	ティビティを示します。
6	ネットワークインターフェイスカード (NIC2) LED	黄色の点滅 : ネットワーク 2 (ETH1 ポート) 上のネットワークアクティビティを示します。
7	情報 LED	<p>赤色の常時点灯: 過熱条件が発生しました。(これはケーブル輻射が原因で発生する可能性があります。)</p> <p>* 赤色の点滅 - 高速 (1 秒): ファンの障害。動作していないファンを確認します。</p> <p>* 赤色の点滅 - 低速 (4 秒): 電源の障害。動作していない電源を確認してください。</p> <p>青色の点灯: ローカル UID がアクティブになりました。この機能を使用して、ラック環境のサーバを特定します。</p> <p>青色の点滅: リモート UID がアクティブになりました。この機能を使用して、リモートの場所からサーバを特定します。</p>
8	ユニット識別子 (UID) ボタン	<p>アプライアンスの前面パネルと背面パネルの両方でユニバーサル情報 (青) をオンまたはオフにするために使用されます。</p> <p>青色の LED がオンである場合、アプライアンスをラック内で簡単に特定できます (前または後ろのいずれか)。</p>
9	ハードドライブ (HDD) LED	緑色の点滅 : 対応するドライブ上のアクティビティを示します。
10	ハードドライブ (HDD) LED	<p>* 赤色の点灯: 対応するハードドライブの障害を示します。</p> <p>Arcserve UDP アプライアンスを使用すると、ハードドライブの 1 つに障害が発生した場合、残りのドライブがすぐに起動し、データは失われずにアプライアンスが引き続き正常に動作します。そのため、複数のハードドライブの障害に関連する問題に対して防御するには、データが失われる可能性を最小限に抑えるためにできる限り早くハードドライブを置き換える必要があります。</p>
11	ハードドライブ (HDD) ラッチ	ハードドライブのロックを解除して取り外すために使用されます。
12	ソリッドステートドライブ (SSD) LED	* 赤色の点灯 : ドライブの障害を示します。
13	ソリッドステートドライブ (SSD) LED	<p>緑色の点灯: ドライブのアクティビティを示します。</p> <p>緑色の点滅: ドライブがアクセス中であることを示します。</p>

14	ソリッドステートドライブ(SSD)ラッチ	SSDドライブのロックを解除して取り外すために使用されます。
----	----------------------	--------------------------------

*赤色が点灯または点滅している場合は、何らかの障害を示します。この問題を迅速に解決するには、弊社サポートサイト(arcserve.com/support)までお問い合わせください。

前面パネル 7400-7600v

Arcserve UDP アプライアンスの前面パネルには、コントロールパネルボタン、コントロールパネルLED、ドライブキャリアLEDが備わっています。以下の表で、これらの項目について説明します。



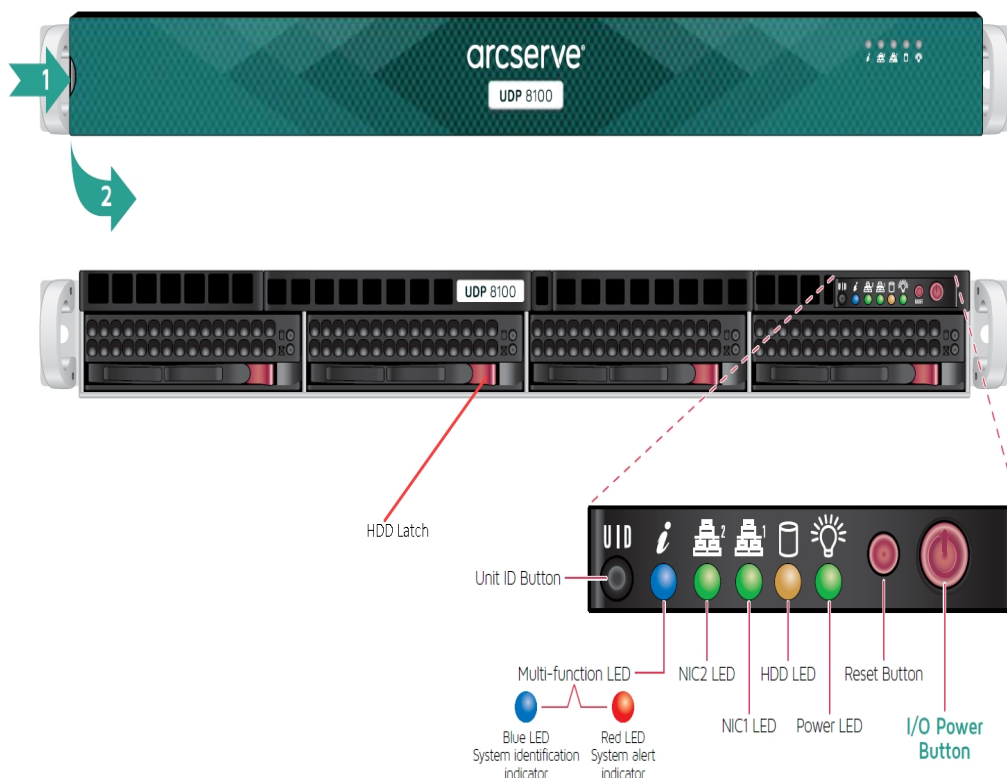
番号	コントロール/インジケータ	説明
1	電源ボタン	アプライアンスコンポーネントに対して電源をオンまたはオフにするために使用されます。電源をオフにした場合、主電源はオフになりますが、スタンバイ電源は引き続き供給されます。そのため、アプライアンスの電源を完全にオフにするには、メンテナンスを実行する前に電源ケーブルをコンセントから抜いてください。
2	リセットボタン	アプライアンスを再起動するために使用されます。
3	電源LED	緑色の点灯: アプライアンスの電源に電力が供給されていることを示します。 アプライアンスの稼働中は、通常このLEDが点灯しています。
4	デバイスアクティビティLED	黄色の点滅: 少なくとも1つのハードドライブ上のアクティビティを示します。

5	ネットワークインターフェースカード (NIC1) LED	黄色の点滅: ネットワーク 1 (ETH0 ポート) 上のネットワークアクティビティを示します。
6	ネットワークインターフェースカード (NIC2) LED	黄色の点滅: ネットワーク 2 (ETH1 ポート) 上のネットワークアクティビティを示します。
7	情報 LED	<p>赤色の常時点灯: 過熱条件が発生しました。(これはケーブル輻輳が原因で発生する可能性があります。)</p> <p>* 赤色の点滅 - 高速(1秒): ファンの障害。動作していないファンを確認します。</p> <p>* 赤色の点滅 - 低速(4秒): 電源の障害。動作していない電源を確認してください。</p> <p>青色の点灯: ローカル UID がアクティブになりました。この機能を使用して、ラック環境のサーバを特定します。</p> <p>青色の点滅: リモート UID がアクティブになりました。この機能を使用して、リモートの場所からサーバを特定します。</p>
8	電源失敗	電源モジュールが失敗したことを示します。
9	ハードドライブ (HDD) LED	緑色の点滅: 対応するドライブ上のアクティビティを示します。
10	ハードドライブ (HDD) LED	<p>* 赤色の点灯: 対応するハードドライブの障害を示します。</p> <p>Arcserve UDP アプライアンスを使用すると、ハードドライブの 1 つに障害が発生した場合、残りのドライブがすぐに起動し、データは失われずにアプライアンスが引き続き正常に動作します。そのため、複数のハードドライブの障害に関連する問題に対して防御するには、データが失われる可能性を最小限に抑えるためにできる限り早くハードドライブを置き換える必要があります。</p>
11	ハードドライブ (HDD) ラッチ	ハードドライブのロックを解除して取り外すために使用されます。

*赤色が点灯または点滅している場合は、何らかの障害を示します。この問題を迅速に解決するには、弊社サポート サイト(arcserve.com/support) までお問い合わせください。

前面パネル 8100-8200

Arcserve UDP 8100-8200 アプライアンスの前面パネルには、コントロールパネルボタン、コントロールパネルLED、ドライブキャリアLEDが備わっています。以下の表で、これらのアイテムについて説明します。



コントロールインジケータ	説明
I/O 電源ボタン	アプライアンスコンポーネントに対して電源をオンまたはオフにするために使用されます。電源をオフにした場合、主電源はオフになりますが、スタンバイ電源は引き続き供給されます。そのため、アプライアンスの電源を完全にオフにするには、メンテナンスを実行する前に電源ケーブルをコンセントから抜いてください。
リセットボタン	アプライアンスを再起動するために使用されます。
電源 LED	緑色の点灯：アプライアンスの電源に電力が供給されていることを示します。アプライアンスの稼働中は、通常このLEDが点灯しています。
HDD LED	黄色の点滅：少なくとも1つのハードドライブ上のアクティビティを示します。
ネットワークインター	黄色の点滅：ネットワーク1 (ETH0ポート) 上のネットワークアクティビティを示します。

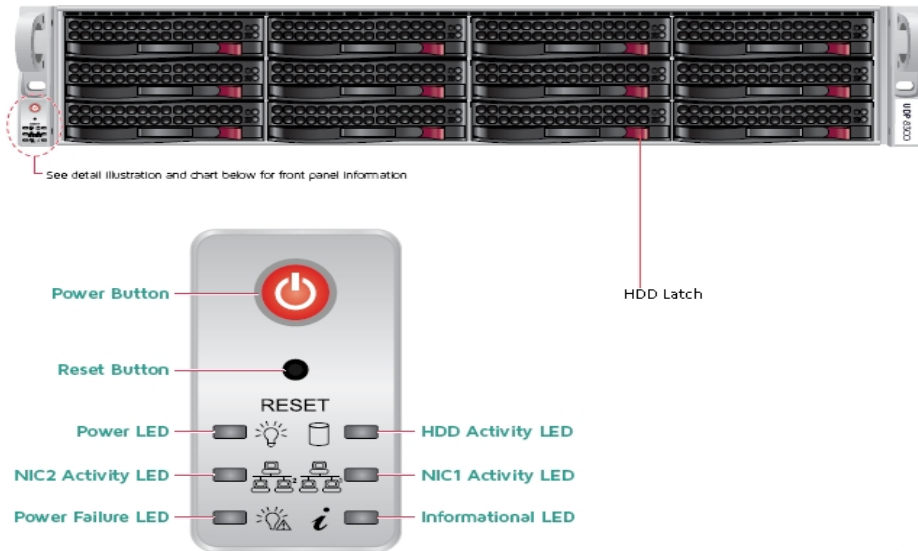
フェースカード(NIC1) LED	
ネットワークインターフェースカード(NIC2) LED	黄色の点滅: ネットワーク 2 (ETH1 ポート) 上のネットワーク アクティビティを示します。
情報 LED	<p>赤色の常時点灯: 過熱条件が発生しました。</p> <p>注: ケーブル輻輳が原因で、この状況が発生する可能性があります。</p> <p>* 赤色の点滅 - 高速 (1 秒): ファン の障害。動作していないファンを確認します。</p> <p>* 赤色の点滅 - 低速 (4 秒): 電源 の障害。動作していない電源を確認してください。</p> <p>青色の点灯: ローカル UID がアクティブです。この機能を使用して、ラック環境のサーバを特定します。</p> <p>青色の点滅: リモート UID がアクティブです。この機能を使用して、リモートの場所からサーバを特定します。</p>
ユニット識別子(UID) ボタン	<p>アプライアンスの前面パネルと背面パネルの両方でユニバーサル情報(青) をオンまたはオフにするために使用されます。</p> <p>青色の LED がオンである場合、アプライアンスをラック内で簡単に特定できます(前または後ろのいずれか) 。</p>
ハードドライブ(HDD) LED	緑色の点滅: 対応するドライブ上のアクティビティを示します。
ハードドライブ(HDD) LED	<p>* 赤色の点灯: 対応するハードドライブの障害を示します。</p> <p>Arcserve UDP アプライアンスを使用すると、ハードドライブの 1 つに障害が発生した場合、残りのドライブがすぐに起動し、データは失われずにアプライアンスが引き続き正常に動作します。そのため、複数のハードドライブの障害に関連する問題に対して防御するには、データが失われる可能性を最小限に抑えるためにできる限り早くハードドライブを置き換える必要があります。</p>
ハードドライブ(HDD) ラッチ	ハードドライブのロックを解除して取り外すために使用されます。
ソリッドステートドライブ(SSD) LED	* 赤色の点灯: ドライブの障害を示します。
ソリッドステートドライブ(SSD) LED	<p>緑色の点灯: ドライブのアクティビティを示します。</p> <p>緑色の点滅: ドライブがアクセス中であることを示します。</p>
ソリッドステートドライブ	SSDドライブのロックを解除して取り外すために使用されます。

ブ(SSD)ラッチ	
-----------	--

*赤色が点灯または点滅している場合は、何らかの障害を示します。この問題を迅速に解決するには、弊社サポート サイト(arcserve.com/support) までお問い合わせください。

前面パネル 8300-8400

Arcserve UDP 8300-8400 アプライアンスの前面パネルには、コントロールパネルボタン、コントロールパネルLED、ドライブキャリアLEDが備わっています。以下の表で、これらのアイテムについて説明します。



This LED alerts the operator of several states, as noted in the chart below.

Status	Description
Continuously on and red	An overheat condition has occurred.(May be due to cable congestion.)
Blinking red (1Hz)	Fan failure, check for Inoperative fan
Blinking red (0.25 Hz)	Power failure, check for a non-operational power supply
Solid Blue	Local UID has been activated. Use this function to locate the server in a rack mount environment.
Blinking Blue	Remote UID is on. Use this function to identify the server from a remote location.

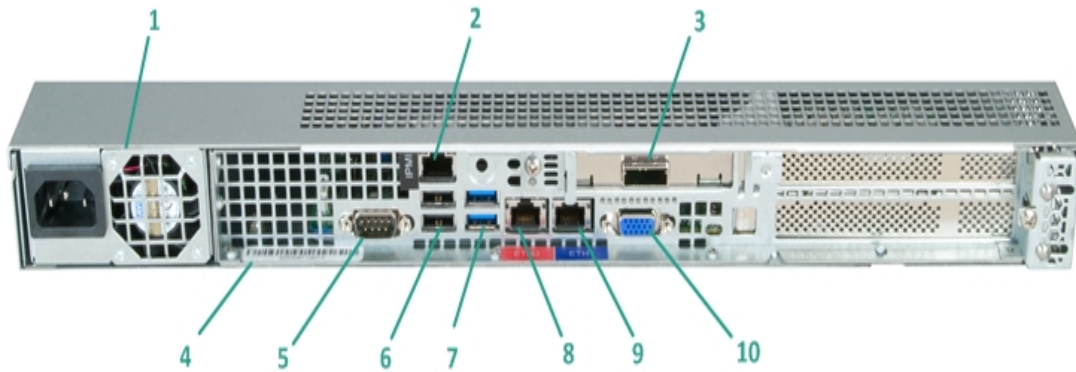
コントロールインジケータ	説明
電源ボタン	アプライアンスコンポーネントに対して電源をオンまたはオフにするために使用されます。電源をオフにした場合、主電源はオフになりますが、スタンバイ電源は引き続き供給されます。そのため、アプライアンスの電源を完全にオフにするには、メンテナンスを実行する前に電源ケーブルをコンセントから抜いてください。
リセットボタン	アプライアンスを再起動するために使用されます。
電源LED	緑色の点灯: アプライアンスの電源に電力が供給されていることを示します。アプライアンスの稼働中は、通常このLEDが点灯しています。
ネットワークインターフェースカード (NIC1)	黄色の点滅: ネットワーク1 (ETH0ポート) 上のネットワークアクティビティを示します。

LED	
ネットワークインターフェースカード (NIC2) LED	黄色の点滅 : ネットワーク 2 (ETH1 ポート) 上のネットワークアクティビティを示します。
情報 LED	<p>赤色の常時点灯: 過熱条件が発生しました。(これはケーブル輻輳が原因で発生する可能性があります。)</p> <p>* 赤色の点滅 - 高速(1秒): ファンの障害。動作していないファンを確認します。</p> <p>* 赤色の点滅 - 低速(4秒): 電源の障害。動作していない電源を確認してください。</p> <p>青色の点灯: ローカル UID がアクティブになりました。この機能を使用して、ラック環境のサーバを特定します。</p> <p>青色の点滅: リモート UID がアクティブになりました。この機能を使用して、リモートの場所からサーバを特定します。</p>
電源異常 LED	電源モジュールが失敗したことを示します。
ハードドライブ(HDD) LED	緑色の点滅 : 対応するドライブ上のアクティビティを示します。
ハードドライブ(HDD) LED	<p>* 赤色の点灯: 対応するハードドライブの障害を示します。</p> <p>Arcserve UDP アプライアンスを使用すると、ハードドライブの1つに障害が発生した場合、残りのドライブがすぐに起動し、データは失われずにアプライアンスが引き続き正常に動作します。そのため、複数のハードドライブの障害に関連する問題に対して防御するには、データが失われる可能性を最小限に抑えるためにできる限り早くハードドライブを置き換える必要があります。</p>
ハードドライブ(HDD) ラッチ	ハードドライブのロックを解除して取り外すために使用されます。

*赤色が点灯または点滅している場合は、何らかの障害を示します。この問題を迅速に解決するには、弊社サポート サイト(arcserve.com/support) までお問い合わせください。

背面パネル 7100-7300v

背面パネルには、アプライアンス用の電源、ケーブル接続、ポートが備わっています。

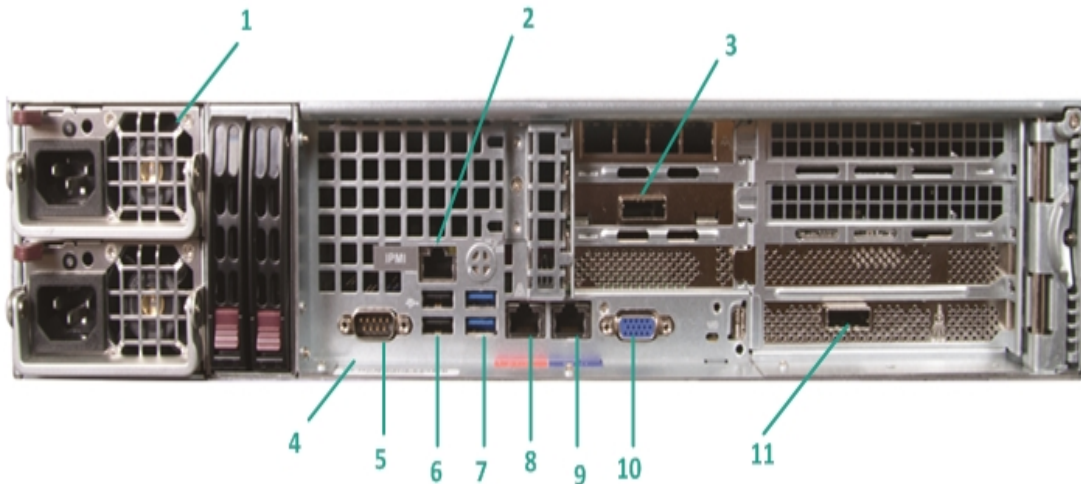


番号	コントロール/インジケータの名前	説明
1	電源	高効率電源をアプライアンスに提供します。 注: 主電源スイッチは、アプライアンスに対する電源の供給または切断に使用されます。このボタンを使用してアプライアンスの主電源をオフにした場合、スタンバイ電源が引き続き供給されます。そのため、アプライアンスの電源を完全にオフにするには、メンテナンスを実行する前に電源ケーブルをコンセントから抜いてください。
2	IPMIポート(リモート管理)	IPMI (インテリジェントプラットフォーム管理インターフェース) ポートを使用すると、温度、電圧、ファン、電源、アプライアンスなどのサーバの物理状態をモニタできます。 注: IPMI アクセス用のデフォルトのユーザ名/パスワードは ADMIN/ARCAADMIN です(大文字と小文字が区別されます)。このパスワードはできる限り早く変更することをお勧めします。IPMI パスワードを変更する方法の詳細については、「 IPMI パスワードを変更する方法 」を参照してください。
3	外部ストレージデバイスのポート(テープドライブの場合はSASポート)	外部ストレージデバイス(ハードドライブ、テープドライブなど)をアプライアンスに接続するために使用されます。これらのポータブル外部ストレージデバイスを使用して、バックアップデータを保存して1つの場所から別の場所に簡単に移動させることができます。

	ト)	
4	シリアル番号のラベル	アプライアンスに割り当てられている一意のシリアル番号。
5	COM1シリアルポート	シリアルデバイス(マウスなど)をアプライアンスに接続するために使用される通信ポート。
6	USB 2.0 (黒)	USB 2.0 タイプのデバイスをアプライアンスに接続するために使用されます。
7	USB 3.0 (青)	USB 3.0 タイプのデバイスをアプライアンスに接続するために使用されます。
8	ネットワークデータ I/O ポート 1	ネットワークデータをアプライアンスから転送するために使用されます。(ネットワーク1の場合は ETH0)
9	ネットワークデータ I/O ポート 2	ネットワークデータをアプライアンスから転送するために使用されます。(ネットワーク2の場合は ETH1)
10	VGA コネクタ	モニタをアプライアンスに接続するために使用されます(必要な場合)。

背面パネル 7400-7600v

背面パネルには、アプライアンス用の電源、ケーブル接続、ポートが備わっています。

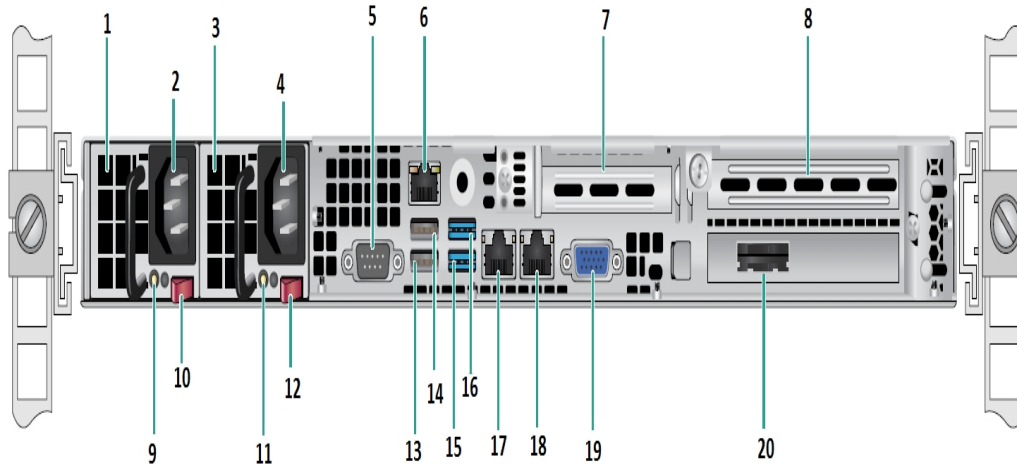


番号	コントロール/インジケータの名前	説明
1	デュアル電源	<p>高効率電源をアプライアンスに提供します。</p> <p>注: 主電源スイッチは、アプライアンスに対する電源の供給または切断に使用されます。デュアル電源の利点は、1つの電源が失敗しても、別の電源を使用できることです。</p> <p>このボタンを使用してアプライアンスの主電源をオフにした場合、スタンバイ電源が引き続き供給されます。そのため、アプライアンスの電源を完全にオフにするには、メンテナンスを実行する前に電源ケーブルをコンセントから抜いてください。</p>
2	IPMI ポート (リモート管理)	<p>IPMI (インテリジェントプラットフォーム管理インターフェース) ポートを使用すると、温度、電圧、ファン、電源、アプライアンスなどのサーバの物理状態をモニタできます。</p> <p>注: IPMI アクセス用のデフォルトのユーザ名/パスワードは ADMIN/ARCAADMIN です(大文字と小文字が区別されます)。このパスワードはできる限り早く変更することをお勧めします。IPMI パスワードを変更する方法の詳細については、「IPMI パスワードを変更する方法」を参照してください。</p>
3	外部ストレージデバイスのポート	<p>外部ストレージデバイス(ハードドライブ、テープドライブなど)をアプライアンスに接続するために使用されます。これらのポータブル外部ストレージデバイスを使用して、バックアップデータを保存して1つの場所から別の場所に簡単に移動させることができます。</p>

	(テープドライブの場合はSASポート)	
4	シリアル番号のラベル	アプライアンスに割り当てられている一意のシリアル番号。
5	COM1シリアルポート	シリアルデバイス(マウスなど)をアプライアンスに接続するために使用される通信ポート。
6	USB 2.0 (黒)	USB 2.0タイプのデバイスをアプライアンスに接続するために使用されます。
7	USB 3.0 (青)	USB 3.0タイプのデバイスをアプライアンスに接続するために使用されます。
8	ネットワークデータI/Oポート1	ネットワークデータをアプライアンスから転送するために使用されます。(ネットワーク1の場合はETH0)
9	ネットワークデータI/Oポート2	ネットワークデータをアプライアンスから転送するために使用されます。(ネットワーク2の場合はETH1)
10	VGAコネクタ	モニタをアプライアンスに接続するために使用されます(必要な場合)。
11	外部ストレージデバイスのポート (テープオートローダ/ライブラリ) LSI SAS 9212 - 4i4e	外部ストレージデバイス(テープオートローダ/ライブラリ)をアプライアンスに接続するために使用されます。これらのポータブル外部ストレージデバイスを使用して、バックアップデータを保存して1つの場所から別の場所に簡単に移動させることができます。 注: このポートは、オペレーティングシステムでは LSI Adapter SAS2 2008 Falcon として表示されます。

背面パネル 8100-8200

背面パネルには、アプライアンス用の電源、ケーブル接続、ポートが備わっています。

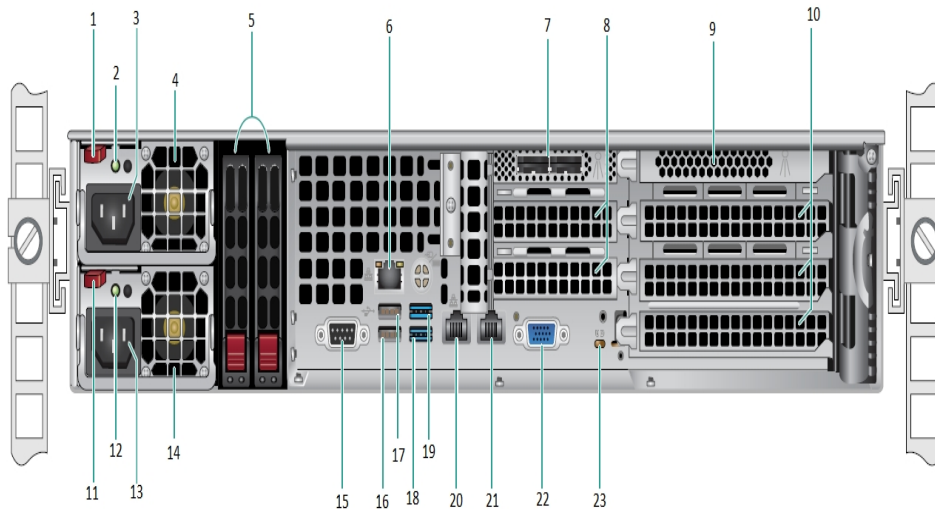


番号	コントロール/インジケータの名前
1	電源モジュール #1
2	AC 電源 インレット #1
3	電源 #2
4	AC 電源 インレット #2
5	COM ポート
6	IPMI ポート (リモート管理)
7	低プロファイル PCI 拡張スロット
8	PCI 拡張スロット
9	パワーグッド LED #1
10	電源ロック #1
11	電源正常 LED #2
12	電源ロック #2
13	USB 2.0 ポート 1 (黒)
14	USB 2.0 ポート 2 (黒)
15	USB 3.0 ポート 3 (青)
16	USB 3.0 ポート 4 (青)
17	ネットワークデータ I/O ポート 1 (ネットワーク 1 の場合は ETH0)
18	ネットワークデータ I/O ポート 2 (ネットワーク 2 の場合は ETH1)

19	VGA ポート
20	外部ストレージデバイスのポート (テープドライブオプションの場合は SAS ポート)

背面パネル 8300-8400

背面パネルには、アプライアンス用の電源、ケーブル接続、ポートが備わっています。



番号	コントロール/インジケータの名前
1	電源モジュール#1 ロック
2	電源モジュール#1 パワーグッド LED
3	電源モジュール#1 AC ソケット
4	電源モジュール#1 ファン
5	背面 SSD (オプション)
6	IPMI ポート (リモート管理)
7	外部 SAS HBA ポート
8	ハーフサイズ PCI 拡張スロット
9	内部 RAID コントローラ
10	フルサイズ PCI 拡張スロット
11	電源モジュール#2 ロック
12	電源モジュール#2 パワーグッド LED
13	電源モジュール#2 AC コンセント
14	電源モジュール#2 ファン
15	COM ポート
16	USB ポート 1 (第 2 世代)
17	USB ポート 2 (第 2 世代)
18	USB ポート 3 (第 3 世代)

19	USB ポート 4 (第 3 世代)
20	ETH0 (ネットワーク 1)
21	ETH1 (ネットワーク 2)
22	VGA ポート (モニタ)
23	UID LED

アプライアンスが使用するポート

以下の表のリストに、Arcserve UDP、Arcserve Backup、Linux 用アプライアンスのサポートによって使用されるポートに関する情報を示します。

- [Arcserve UDP](#)
- [Arcserve Backup](#)
- [Linux 用アプライアンスのサポート](#)

Arcserve UDP

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

- [Microsoft Windows にインストールされるコンポーネント](#)
- [Linux にインストールされているコンポーネント](#)
- [リモートで UDP Linux により保護されている実稼働ノード](#)

Microsoft Windows にインストールされるコンポーネント

LAN 環境を使用している場合、バックアップなどのジョブを行うには以下のポートが必要です。

ポート #	ポートの種類	起動元	受信待機プロセス	説明
1433	TCP	リモート Java	sqlsrvr.exe	Arcserve UDP コンソールと Microsoft SQL Server データベースが異なるコンピュータに存在する場合、その間のデフォルトの通信ポートを指定します。 注: デフォルト通信ポートは、SQL Server をインストールするときに変更できます。
4090	TCP	Arcserve UDP エージェント	HATransServer.exe	プロキシ モードで仮想スタンバイタスクのデータを転送します。
5000-5060	TCP	Arcserve UDP サーバ	GDDServer.exe	Arcserve UDP RPS グローバル デデュプリケーション データストア サービス(GDD) 用に予約されています。1 つの Arcserve UDP GDD データストアは、5000 以降の 3 つの空きポートを使用します。GDD データストアに対するバックアップが有効化されている場合、またはリストアタスクを使用している場合にはこれが必要です。
6052	TCP	Arcserve Backup GDB	CA.ARCserve.CommunicationFoundation.WindowsService.exe	CA.ARCserve.CommunicationFoundation.WindowsService.exe Arcserve UDP コンソールと Arcserve Backup グローバルダッシュボード プライマリサーバでデータを同期するための通信。
6054	TCP	Arcserve Backup	CA.ARCserve.CommunicationFoundation.WindowsService.exe	CA.ARCserve.CommunicationFoundation.WindowsService.exe Arcserve UDP コンソールと Arcserve Backup プライマリサーバでデータを同期するための通信。

800-6				Arcserve UDP コンソールによって使用される Tomcat をシャット ダウンします。
801-4	TC-UDP P コン ソール	Arcserve UDP コン ソール	Tomcat7.exe	<p>リモート管理コンソールと Arcserve UDP サーバの間のデフォルトの HTTP/HTTPS 通信ポートを指定します。</p> <p>リモート管理コンソールと Arcserve UDP エージェントの間のデフォルトの HTTP/HTTPS 通信ポートを指定します。</p> <p>注: デフォルトの通信ポートは、Arcserve UDP コンポーネントをインストールするときに変更できます。</p>
801-4	TC-UDP P サーバ	Arcserve UDP サーバ	httpd.exe	<p>Arcserve UDP サーバと Arcserve UDP コンソールの間のデフォルトの HTTP/HTTPS 通信ポートを指定します。</p> <p>*デフォルトの共有ポートであり、Arcserve UDP サーバをレプリケーション デスティネーションとして使用する場合に開く必要のある唯一のポートを指定します。ポート 5000 ~ 5060 は、グローバル デデュープリケーションが有効化されているときにデータストアによって使用されるため開かないでください。</p> <p>注: デフォルトの通信ポートは、Arcserve UDP コンポーネントをインストールするときに変更できます。</p>
801-5	TC-UDP P コン ソール	Arcserve UDP コン ソール	Tomcat7.exe	<p>リモート管理コンソールと Arcserve UDP サーバの間のデフォルトの HTTP/HTTPS 通信ポートを指定します。</p> <p>リモート管理コンソールと Arcserve UDP エージェントの間のデフォルトの HTTP/HTTPS 通信ポートを指定します。</p> <p>注: デフォルトの通信ポートは、Arcserve UDP コンポーネントをインストールするときに変更できます。</p>
801-6	TC-UDP P サーバ	Arcserve UDP サーバ	Tomcat7.exe	<p>同じサーバ上の Arcserve UDP RPS ポート共有サービスと通信する Arcserve UDP サーバ Web サービス用に予約済みです。</p> <p>注: ポートはカスタマイズできません。ファイアウォール設定では無視できます。</p>
180-05			CA.ARCserve.Communication-Foundation. WindowsService.exe	Arcserve UDP サーバまたはエージェントによって使用される Tomcat をシャット ダウンします。

Linux にインストールされているコンポーネント

LAN 環境を使用している場合、バックアップなどのジョブを行うには以下のポートが必要です。

ポート #	ポートの種類	起動元	受信待機プロセス	説明
22	TCP	Arcserve UDP Linux	SSH サービス	Arcserve UDP Linux サードパーティ依存性。SSH サービスのデフォルトを指定しますが、このポートは変更できます。このポートは受信および送信通信の両方に必要です。
67	UDP	Arcserve UDP Linux	bootpd	PXE ブート サーバで使用されます。PXE ブート機能の使用を必要としている場合のみ必須です。このポートは受信通信に必要です。 注：ポート番号はカスタマイズできません。
69	UDP	Arcserve UDP Linux	tffpd	PXE ブート サーバで使用されます。PXE ブート機能の使用を必要としている場合のみ必須です。このポートは受信通信に必要です。 注：ポート番号はカスタマイズできません。
8014	TCP	Arcserve UDP Linux	Java	リモート コンソールと Linux 用 Arcserve UDP エージェントの間のデフォルトの HTTP/HTTPS 通信ポートを指定します。このポートは受信および送信通信の両方に必要です。
18005	TCP	Arcserve UDP Linux	Java	Tomcat によって使用されます。ファイアウォールの設定では無視できます。

リモートで UDP Linux により保護されている実稼働ノード

LAN 環境を使用している場合、バックアップなどのジョブを行うには以下のポートが必要です。

ポート #	ポートの種類	起動元	受信待機プロセス	説明
22		SSH サービス		Arcserve UDP Linux サードパーティ依存性。SSH サービスのデフォルトを指定しますが、このポートは変更できます。このポートは受信および送信通信の両方に必要です。

* ポート共有はレプリケーションジョブのためにサポートされています。異なるポート上のデータはすべてポート 8014 (Arcserve UDP サーバ用のデフォルト ポート。インストール時に変更可能) に転送できます。WAN 上にある 2 つの復旧サーバポイント間でレプリケーションジョブを実行する時には、ポート 8014 のみが開いている必要があります。

同様に、リモートレプリケーションの場合、リモート管理者はポート 8014 (データレプリケーション用) とポート 8015 (Arcserve UDP コンソール用のデフォルト ポート。インストール時に変更可能) を開くか転送して、割り当てられたレプリケーションプランをローカル復旧ポイントサーバが取得できるようにする必要があります。

Arcserve Backup

LAN 環境を使用している場合、バックアップなどのジョブを行うには以下のポートが必要です。

ポート #	ポートの種類	起動元	受信待機プロセス	説明
135	TCP			Microsoft ポート マッパー
445	TCP		名前付きパイプ上の MSRPC	
6050	TCP/UDP	CASUniversalAgent	Univagent.exe	Arcserve Universal Agent
6502	TCP	Arcserve Communication Foundation	CA.ARCserve.CommunicationFoundation.WindowsService.exe	Arcserve Communication Foundation
6502	TCP	CASapeEngine	Tapeng.exe	Arcserve Tape Engine
6503	TCP	CASJobEngine	Jobengine.exe	Arcserve Job Engine
6504	TCP	CASDBEngine	DBEng.exe	Arcserve Database Engine
7854	TCP	CASportmapper	Catirpc.exe	Arcserve PortMapper
4152-3	TCP	CASDiscovery	casdscsvc.exe	Arcserve Discovery Service
4152-4	UDP	CASDiscovery	casdscsvc.exe	Arcserve Discovery Service
9000-9500	TCP		動的ポートを使用する他の Arcserve MS RPC サービス用	

Linux 用アプライアンスのサポート

LAN 環境を使用している場合、バックアップなどのジョブを行うには以下のポートが必要です。

ポート #	ポートの種類	起動元	受信待機プロセス	説明
8017	TCP			NAT ポート リダイレクション。他の Linux ノードを Amazon S3 にバックアップするため、アプライアンス上の 8017 を Linux バックアップ サーバにリダイレクトします。
8018	TCP			NAT ポート リダイレクション。アプライアンス上の 8018 を Linux バックアップ サーバエージェントのポート 8014 にリダイレクトします。
8019	TCP			NAT ポート リダイレクション。アプライアンス上の 8019 を Linux バックアップ サーバの SSH ポート 22 にリダイレクトします。
8021	TCP			NAT ポート リダイレクション。8021 ポートを使用して他の Linux ノードをバックアップするため、アプライアンス上の 8021 を Linux バックアップ サーバにリダイレクトします。
8036	TCP			NAT ポート リダイレクション。アプライアンス上の 8036 を Linux バックアップ サーバのポート 8036 にリダイレクトします。
50000	TCP			NAT ポート リダイレクション。50000 ポートを使用して他の Linux ノードをクラウドにバックアップするため、アプライアンス上の 50000 を Linux バックアップ サーバにリダイレクトします。
50001	TCP			NAT ポート リダイレクション。50001 ポートを使用して他の Linux ノードをクラウドにバックアップするため、アプライアンス上の 50001 を Linux バックアップ サーバにリダイレクトします。
50002	TCP			NAT ポート リダイレクション。50002 ポートを使用して他の Linux ノードをクラウドにバックアップするため、アプライアンス上の 50002 を Linux バックアップ サーバにリダイレクトします。
50003	TCP			NAT ポート リダイレクション。50003 ポートを使用して他の Linux ノードをクラウドにバックアップするため、アプライアンス上の 50003 を Linux バックアップ サーバにリダイレクトします。
50004	TCP			NAT ポート リダイレクション。50004 ポートを使用して他の Linux ノードをクラウドにバックアップするため、アプライアンス上の 50004 を Linux バックアップ サーバにリダイレクトします。

第 3 章: Arcserve UDP アプライアンスの設置

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

Arcserve Backup r17.5 をインストールする方法	57
8100-8200 シリーズ アプライアンスの設置方法	59
8300-8400 シリーズ アプライアンスの設置方法	60

Arcserve Backup r17.5 をインストールする方法

Arcserve Backup r17.5 は、アプライアンスに事前インストールされていません。デスクトップ上にある “InstallASBU.bat” というスクリプトを使用して Arcserve Backup r17.5 をインストールできます。

以下の手順に従います。

1. デスクトップから、InstallASBU.bat を選択して起動します。

注：英語以外の Windows システムから .bat ファイルを起動している場合、以下の画面が表示されます。Arcserve Backup r17.5 をインストールする言語を選択するか、それ以外の場合は手順 2 に進みます。

2. 管理者パスワードを入力すると、Arcserve Backup r17.5 のインストールに使用できるスクリプトが生成されます。

```
Checking Arcserve Backup installation environment ...

Select language for Arcserve Backup Installation:
  1. Japanese (default)
  2. English
Your choice [1]:
You select "Japanese". Are you sure? [y/n]:y

Enter Password for Administrator: *****

Starting to install Arcserve Backup r17.5 (Japanese).
This may take up to 25 minutes.
Please do not close this window or shutdown the appliance.

Installing Arcserve Backup...
Completed.

Installing Arcserve Backup Patch Manager...
Completed.

Updating configurations of the Arcserve Backup server...

Arcserve Backup r17.5 is installed successfully.
UserName: caroot
Password: Arcserve
```

インストールが完了したら、Arcserve Backup のアイコンがデスクトップに追加されます。以下の認証情報で Arcserve Backup にログインできます。

- ユーザ名 = caroot
- パスワード = Arcserve

8100-8200 シリーズ アプライアンスの設置方法

アプライアンスは、限られた領域のみに設置することを目的としています。初期設定およびメンテナンスは、専門の担当者が実行する必要があります。

完全な設置プロセスについては、「[8100-8200 のアプライアンスの設置](#)」を参照してください。

8300-8400 シリーズ アプライアンスの設置方法

アプライアンスは、限られた領域のみに設置することを目的としています。初期設定およびメンテナンスは、専門の担当者が実行する必要があります。

完全な設置プロセスについては、「[8300-8400 のアプライアンスの設置](#)」を参照してください。

第 4 章: ネットワーク設定の理解

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

NIC チーミングを設定する方法	62
DHCP サーバを無効化する方法	64
UDP アプライアンスのネットワーク環境設定を理解する方法	65
プリインストールされた Linux バックアップ サーバの IP アドレスを設定する方法	70
負荷分散のために DNS サーバ上でラウンド ロビンを有効にする方法	72

NIC チーミングを設定する方法

Arcserve UDP アプライアンスには、イーサネット ポートが標準で備わっています。これらのポートを使用するには、イーサネット NIC チーミングが設定されている必要があります。NIC チーミングでは、複数のネットワークアダプタをチームにまとめることにより、帯域幅およびトラフィックのフェールオーバを集約し、ネットワークコンポーネントに障害が発生した場合に接続を維持することができます。

使用可能な NIC チームを設定するには、リンクの集約をサポートするネットワークスイッチが必要です。ネットワークスイッチのベンダおよび Microsoft Windows の構成ドキュメントを参照し、NIC チームを設定してください。

ネットワークスイッチの設定後、次の手順を実行します。

1. Windows デスクトップで、Arcserve UDP アプライアンス ウィザードを起動します。

DHCP または静的 IP アドレスを使用している場合、[ネットワーク接続]画面で NIC チームの IP アドレスを設定できます。有効な IP アドレスが NIC チームに割り当てられており、ネットワーク上で利用可能であることを確認します。

2. サーバマネージャで、[ツール]- [レーティングとリモート アクセス]を選択します。[レーティングとリモート アクセス]ダイアログ ボックスが表示されます。
3. アプライアンス サーバのノードを右クリックし、[レーティングとリモート アクセスの無効化]を選択します。

注: 他のレーティングおよびリモート アクセス機能が他の目的のために設定されている場合は、これらの手順の完了後にそれらを再設定することをお勧めします。

4. 確認ダイアログボックスで [はい] をクリックし、ルータを無効にして設定を削除します。
5. アプライアンスサーバのノードを右クリックし、[レーティングとリモート アクセスの構成と有効化] を選択します。

[レーティングとリモート アクセス サーバーのセットアップ ウィザード] が表示されます。

6. [キャンセル] をクリックし、Windows コマンド プロンプト ウィンドウを開きます。
7. 以下のコマンドを実行します。

```
C:\Program Files\Arcserve\Unified Data  
Protection\Engine\BIN\Appliance\resetnic.bat
```

設定が完了し、以下のメッセージが表示されます。

正しく機能していることを確認するには、Hyper-V マネージャで Linux バックアップサーバにログインし、イントラネット上の特定のコンピュータに対して IP アドレスを ping します。失敗した場合は、確認し、この手順を繰り返します。

DHCP サーバを無効化する方法

DHCP サーバは、アプライアンス上ではデフォルトで有効になります。DHCP サーバが、アプライアンス上の Hyper-V 仮想 Ethernet アダプタ - *LinuxBkpSvr* でのみ動作し、プリインストールされた Linux バックアップ サーバが IP アドレスを取得でき、アプライアンスとの通信が可能で、実稼働ネットワーク環境に影響を与えないことを確認します。

DHCP サーバを無効にするには、次の手順を実行します。

1. ファイル *C:\Program Files\Arcserve\Unified Data Protection\Engine\BIN\Appliance\Configuration\Appliance.properties* を開きます。
2. ファイルを *DHCP_ENABLE=false* と変更します。 *Appliance.properties* には以下のように表示されます。

```
DHCP_ENABLE=false  
AdapterName=LinuxBkpSvr  
Appliance_IPAddress=192.168.10.1  
Linux_IPAddress=192.168.10.2
```

3. ファイルを保存します。
4. ファイル *C:\Program Files\Arcserve\Unified Data Protection\Engine\BIN\Appliance\dhcpdone.flag* を削除します。
5. *C:\Program Files\Arcserve\Unified Data Protection\Engine\BIN\Appliance\resetdhcp.ps1* を DOS コマンド ラインから以下のように実行し、DHCP サーバサービスを無効化します。

```
C:\Program Files\Arcserve\Unified Data  
Protection\Engine\BIN\Appliance>powershell .\resetdhcp.ps1
```

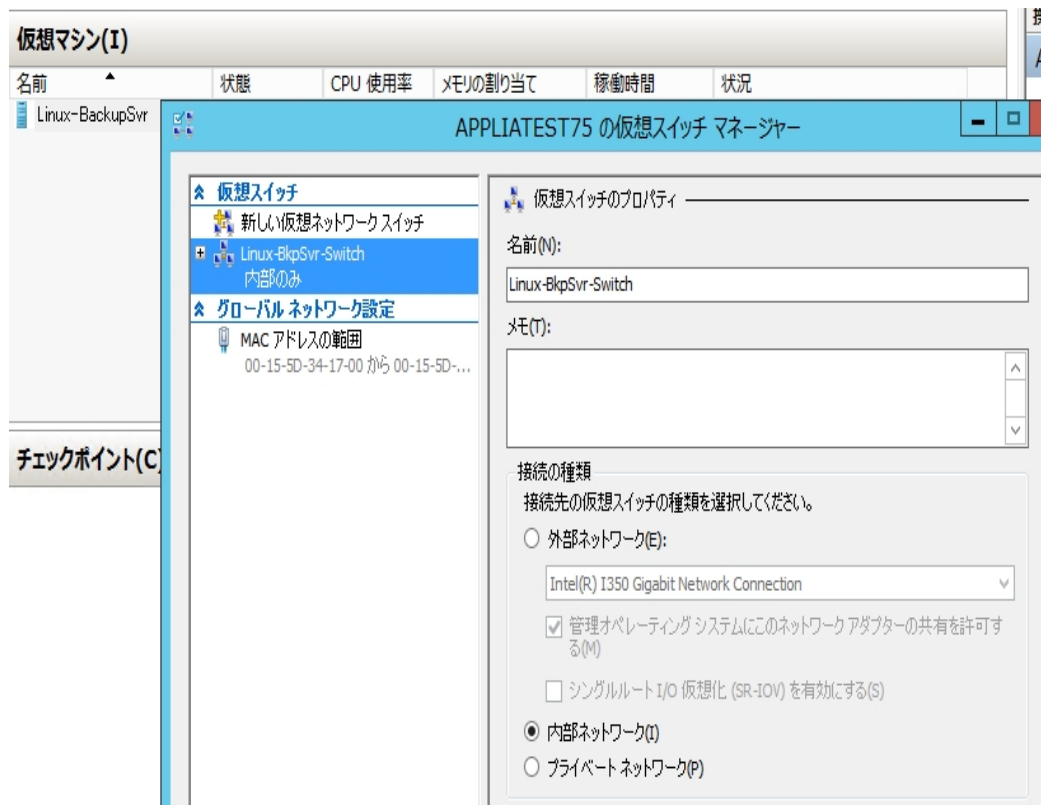

UDP アプライアンスのネットワーク環境設定を理解する方法

アプライアンスのネットワーク環境設定の目的は、組み込みの Linux バックアップサーバ(Hyper-V マネージャでの仮想名: Linux-BackupSvr) が NAT の背後で動作できることを確認することです。そのため、

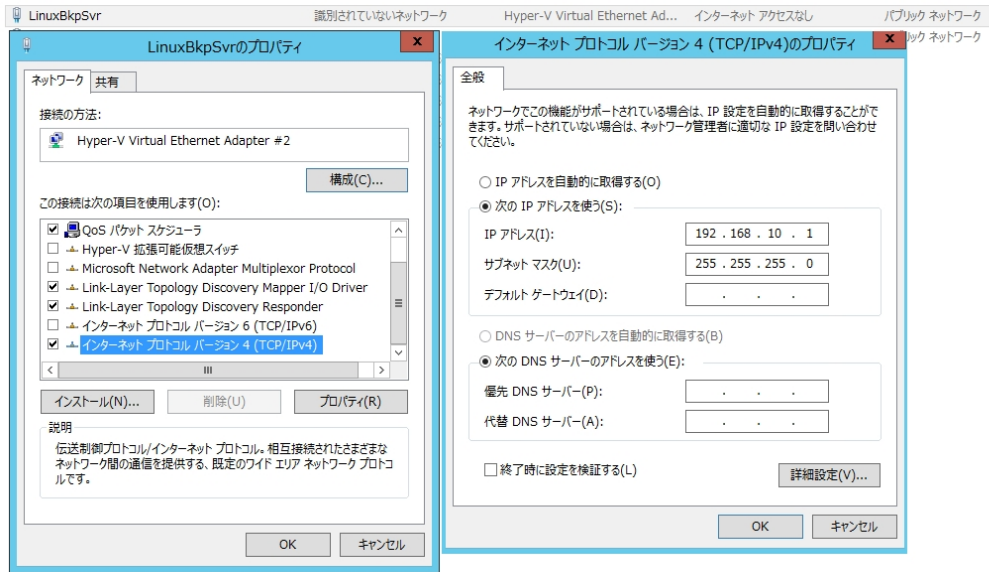
- ユーザは組み込みの Linux のホスト名を変更する必要はありません。
- ユーザは、Linux バックアップサーバのネットワーク上の IP を保存します。
- Linux バックアップサーバは、パブリック ネットワーク上のマシンに接続できます。
- パブリック ネットワーク上のマシンは、アプライアンスサーバの特別なポートを介してのみ Linux バックアップサーバに接続できます。

ネットワーク設定の詳細

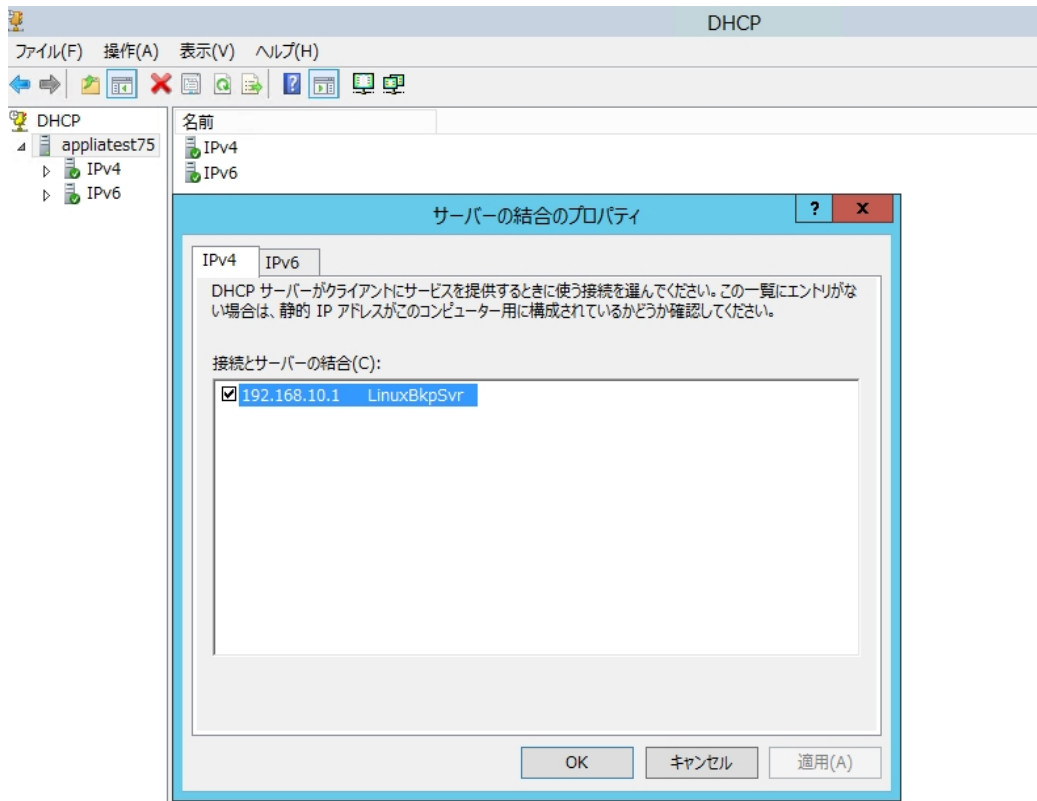
- Hyper-V マネージャで、Linux-BackupSvr によってのみ使用される内部のみの仮想スイッチ - *Linux-BkpSvr-Switch* が利用可能です。



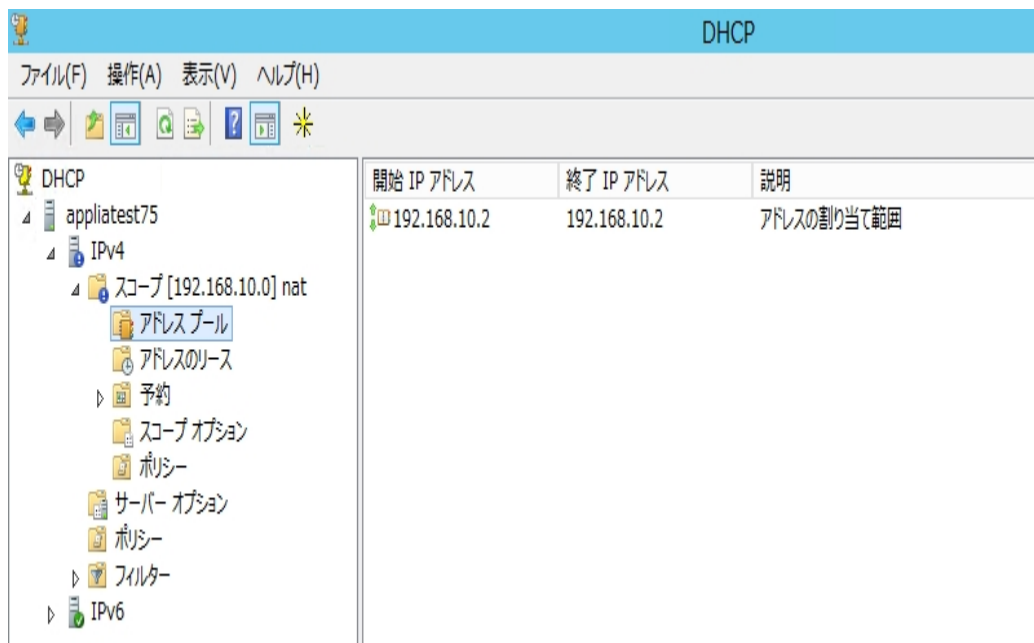
- コントロールパネル\ネットワークとインターネット\ネットワーク接続に、「LinuxBkpSvr」という名前が「Hyper-V Virtual Ethernet Adapter」が表示されます。デフォルトでは、以下のように、このスイッチの IPv4 を 192.168.10.1 として設定しています。



- デフォルトでは、アプライアンスマシン上で DHCP サーバを設定しており、DHCP サーバは Hyper-V 仮想アダプタ上でのみ動作します。



- デフォルトでは、アドレスプールには 192.168.10.2 のみがあり、これによって、Linux バックアップサーバが IP 192.168.10.2 を取得できるようにします。



- アプライアンス マシン上で NAT が設定されました。

名前	状態	デバイス名	接続	ネットワークのカテゴリ
LinuxBkpSvr	識別されていないネットワーク	Hyper-V Virtual Ethernet Ad...	インターネット アクセスなし	パブリック ネットワーク
イーサネット	無効	Intel(R) I350 Gigabit Netwo...		
イーサネット 2	無効	Intel(R) I350 Gigabit Netwo...		
イーサネット 5	ARCSERVE.COM	Intel(R) I350 Gigabit Netwo...	インターネット アクセス	パブリック ネットワーク
イーサネット 6	無効	Intel(R) I350 Gigabit Netwo...		

```
C:¥Windows¥System32>netsh routing ip nat dump

# -----
# NAT 構成
# -----
pushd routing ip nat
uninstall
install
set global tcptimeoutmins=1440 udptimeoutmins=1 loglevel=ERROR

#
# インターフェイス イーサネット2 の NAT 構成
#
add interface name="イーサネット2 " mode=FULL

#
# インターフェイス イーサネット5 の NAT 構成
#
add interface name="イーサネット5 " mode=FULL

#
# インターフェイス LinuxBkpSvr の NAT 構成
#
add interface name="LinuxBkpSvr" mode=PRIVATE

popd
```

- Linux バックアップ サーバ用に、アプライアンス上でポート リダイレクションを設定しています。

```
C:¥Windows¥System32>netsh interface portproxy show all

ipv4 をリッスンする:          ipv4 に接続する:
Address      Port          Address      Port
-----
*            8018         192.168.10.2 8014
*            8019         192.168.10.2 22
*            8035         192.168.10.2 8035
```

- Linux バックアップ サーバは、DHCP サーバから IP アドレス 192.168.10.2 を取得します。IP アドレスを取得した後、バックエンド スクリプト (C:\Program Files\Arcserve\Unified Data Protection\Engine\BIN\Appliance\resethdcp.ps1) は Linux と通信し、Linux のシステム ロケールを変更して、アプライアンス Windows OS のシステム ロケールと一致させます。

```
[root@Linux-BackupSvr network-scripts]# cat ifcfg-eth0
DEVICE=eth0
TYPE=Ethernet
ONBOOT=yes
NM_CONTROLLED=yes
BOOTPROTO=dhcp
DEFROUTE=yes
NAME="eth0"
[root@Linux-BackupSvr network-scripts]# ifconfig
eth0      Link encap:Ethernet  HWaddr 00:15:5D:0A:04:00
          inet6 addr: fe80::215:5dff:fe0a:400/64 Scope:Link
          UP BROADCAST RUNNING MULTICAST  MTU:1500  Metric:1
          RX packets:481943 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
          TX packets:100859 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
          collisions:0 txqueuelen:1000
          RX bytes:36784482 (35.0 MiB)  TX bytes:21795976 (20.7 MiB)

lo        Link encap:Local Loopback
          inet addr:127.0.0.1  Mask:255.0.0.0
          inet6 addr: ::1/128 Scope:Host
          UP LOOPBACK RUNNING  MTU:65536  Metric:1
          RX packets:0 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
          TX packets:0 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
          collisions:0 txqueuelen:0
          RX bytes:0 (0.0 b)  TX bytes:0 (0.0 b)
```

プリインストールされた Linux バックアップ サーバの IP アドレスを設定する方法

プリインストールされた Linux バックアップ サーバは、デフォルトで IP 192.168.10.2 を使用して、アプライアンス サーバと通信します。プリインストールされた Linux バックアップ サーバがアプライアンス サーバと通信する方法については、プリインストールされた Linux バックアップ サーバのネットワーク設定概要を参照してください。

プリインストールされた Linux バックアップ サーバの IP アドレスを指定するには、次の手順を実行します。

1. ファイル `C:\Program Files\Arcserve\Unified Data Protection\Engine\BIN\Appliance\Configuration\Appliance.properties` を開きます。
2. `Appliance_IPAddress` および `Linux_IPAddress` の IP アドレスを変更します。たとえば、`Appliance_IPAddress` を 192.168.100.1 に、`Linux_IPAddress` を 192.168.100.2 に設定します。

注:

- ◆ `Appliance_IPAddress` の IP アドレスは、このプリインストールされた Linux バックアップ サーバとの通信に使用されるネットワーク インターフェース `LinuxBkpSvr` (Hyper-V 仮想 Ethernet アダプタ) に設定されます。
- ◆ `Linux_IPAddress` の IP アドレスは、プリインストールされた Linux バックアップ サーバに設定されます。
- ◆ 「`Appliance_IPAddress`」および「`Linux_IPAddress`」が同じサブ ネットワークの IP アドレスを使用していることを確認してください。

変更後のファイルを以下に示します。

```
DHCP_ENABLE=true  
AdapterName=LinuxBkpSvr  
Appliance_IPAddress=192.168.100.1  
Linux_IPAddress=192.168.100.2
```

3. ファイルを保存します。
4. ファイル `C:\Program Files\Arcserve\Unified Data Protection\Engine\BIN\Appliance\dhcpdone.flag` を削除します。
5. `C:\Program Files\Arcserve\Unified Data Protection\Engine\BIN\Appliance\resetchcp.ps1` を実行し、ネットワークイ

インターフェース LinuxBkpSvr とプリインストールされた Linux バックアップ サーバの IP アドレスをリセットします。

注:

ユーザが Linux_IPAddress を変更する場合、処理中にプリインストールされた Linux バックアップ サーバはシャット ダウンし、再起動します。

コマンド プロンプトを実行して、以下のコマンドを入力します。

```
C:\Program Files\Arcserve\Unified Data  
Protection\Engine\BIN\Appliance>powershell .\resetdhcp.ps1
```

負荷分散のために DNS サーバ上でラウンド ロビンを有効にする方法

Microsoft DNS サーバでは、サーバ間の負荷分散に使用される技術であるラウンド ロビンをサポートしています。この機能によって、DNS では *myserver.mydomain.com* のクエリを受信する場合に両方の IP アドレスを送信できます。クライアント(またはリゾルバ)では、常に最初のものを使用します。次に DNS がこの名前前のクエリを受信するときに、IP アドレスのリストの順序はラウンド ロビン手法を使用して変更されます(以前のリストで 1 番目だったアドレスは、新しいリストの最後になります)。1 つのエイリアスに対して 1 つのカノニカル名しか許可されないため、名前レコードのラウンド ロビンはサポートされていません。

アプライアンスで、ドメイン ネーム サーバ(DNS) にすべての IPv4 アドレスのレコードを追加し、ネットワーク インターフェース全体で負荷分散することができます。

サーバ間の負荷分散の詳細については、[RFC 1794](#) を参照してください。

追加の IP アドレスのレコードをドメイン ネーム サービス サーバに追加する方法

サーバに 2 つ以上のネットワーク インターフェースカード(NIC) があるか、サーバの NIC に 2 つ以上の IP アドレスが指定されている場合は、各 IP アドレスの「A」レコードを作成することによって、追加の IP アドレスのレコードを DNS サーバに追加できます。

例:

サーバの DNS ホスト名が <myserver> で、DNS ドメイン名が <mydomain.com> であるとして、このサーバには、以下の 2 つの IP アドレスが割り当てられています。

- IPAddress1
- IPAddress2

これらの IP アドレスを DNS サーバに追加するには、以下のように 2 つの「A」レコードを <mydomain.com> ゾーンに作成します。

- Myserver A <IPAddress1>
- Myserver A <IPAddress2>

リゾルバが毎回同じ IP アドレスを取得できるようにするには、以下のように、各アドレスに一意の名前を割り当てる「A」レコードをさらに 2 つ作成します。

- Altname1 A <IPAddress1>
- Altname2 A <IPAddress2>

この方法を使用すると、リゾルバは Altname1 に対するクエリを送信するときは常に IPAddress1 を取得し、Altname2 に対するクエリを送信するときは常に IPAddress2 を取得します。

第 5 章: アプライアンス上の Arcserve UDP のアップグレード

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

Arcserve ソフトウェアのアップグレード後にライセンスを適用する方法	75
Arcserve UDP アプライアンス上のアップグレード シーケンス	76
UDP コンソール、RPS、エージェントのアップグレード シーケンス	82

Arcserve ソフトウェアのアップグレード後にライセンスを適用する方法

Arcserve UDP を v6.5 にアップグレードした後、または Arcserve Backup を r17.5 にアップグレードした後は、Arcserve UDP アプライアンス上の元のライセンスキーは機能しません。Arcserve Unified Data Protection v6.5 および Arcserve Backup r17.5 用の新しいライセンスキーを取得するには、営業担当者までお問い合わせください。

Arcserve UDP のライセンスキーを追加する方法の詳細については、「*Arcserve Unified Data Protection ソリューションガイド*」の「**Arcserve 製品のアクティブ化**」を参照してください。

Arcserve UDP のライセンスキーを追加する方法の詳細については、「*Arcserve Backup 管理者ガイド*」の「*Arcserve Backup コンポーネント ライセンスの適用*」を参照してください。

Arcserve UDP アプライアンス上のアップグレード シーケンス

Arcserve UDP アプライアンス v5.0 から Arcserve UDP v6.5 へのアップグレードでは、以下のいずれかのシーケンスを伴う場合があります。

- Arcserve UDP のアップグレード
 - ◆ [Arcserve UDP コンソールおよび RPS として機能する Arcserve UDP アプライアンスのアップグレード](#)
 - ◆ [Arcserve UDP RPS としてのみ機能する Arcserve UDP アプライアンスのアップグレード](#)
 - ◆ [複数の Arcserve UDP アプライアンスが環境で使用されている場合のアップグレード手順](#)
- [Arcserve UDP アプライアンス上の Arcserve UDP Linux エージェントのアップグレード](#)
- [Arcserve UDP アプライアンス上の Arcserve Backup のアップグレード](#)
- [UDP コンソール、RPS、エージェントのアップグレード シーケンス](#)

Arcserve UDP コンソールおよび RPS として機能する Arcserve UDP アプライアンスのアップグレード

この Arcserve UDP アプライアンスをアップグレードして、次に「[アップグレード シーケンス](#)」に説明されている手順に従って環境をアップグレードします。

Arcserve UDP RPS としてのみ機能する Arcserve UDP アプライアンスのアップグレード

実稼働環境全体をアップグレードします。詳細については、「[アップグレード シーケンス](#)」を参照してください。

複数の Arcserve UDP アプライアンスが環境で使用されている場合のアップグレード手順

- 実稼働環境全体をアップグレードします。詳細については、「[アップグレード シーケンス](#)」を参照してください。
- アップグレード後、Arcserve UDP コンソールからアプライアンスを RPS として追加するときに以下のような警告が表示される場合は、「[トラブルシューティング](#)」セクションの「[別のアプライアンスから UDP アプライアンスをバックアップすると重複するノードがレポートされる](#)」トピックを参照してください。

Arcserve UDP アプライアンス上の Arcserve UDP Linux エージェントのアップグレード

- 最初に、Linux バックアップ サーバ環境を管理している Arcserve UDP コンソールをアップグレードします。
- 次に、Arcserve UDP アプライアンス上の Linux バックアップ サーバをアップグレードします。詳細については、「Arcserve Unified Data Protection Agent for Linux オンライン ヘルプ」を参照してください。

Arcserve UDP アプライアンス上の Arcserve Backup のアップグレード

Arcserve UDP アプライアンス上でアップグレードを完了するには、「Arcserve Backup 実装ガイド」を参照してください。

UDP コンソール、RPS、エージェントのアップグレード シーケンス

後方互換性サポート ポリシーに基づいて、以下の順序でアップグレードを計画し、アップグレードが円滑に行われるようにします。

1. Arcserve UDP コンソールをアップグレードします。
2. Arcserve UDP RPS (DR サイト) をアップグレードします。
3. Arcserve UDP RPS (データ センター) をアップグレードします。
4. Arcserve UDP エージェントレス プロキシ、データ センター内の一部 エージェントをアップグレードします。
5. Arcserve UDP RPS (リモート サイト) をアップグレードします。
6. Arcserve UDP エージェントレス プロキシ、リモート サイトの一部 エージェントをアップグレードします。

注: リモート サイトごとに、手順 5 と 6 を繰り返します。

7. Arcserve UDP 仮想スタンバイ モニタをアップグレードします。

注: レプリケーションの後方互換性サポート ポリシーに従って、常にソース RPS の前にターゲット RPS をアップグレードしてください。

第 6 章: Arcserve UDP アプライアンスの設定

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

UDP アプライアンス用にネットワーク環境を設定する方法	84
UDP アプライアンス ウィザードを使用したプランの作成の概要	89
Arcserve UDP アプライアンスを設定してプランを作成する方法	90
プランへのノードの追加の詳細	99
ゲートウェイとしての UDP アプライアンスの設定	108
環境設定の消去およびアプライアンスファクトリリセットの適用	109
ブート オプションを使用した Arcserve UDP ファクトリリセットの適用	111
アプライアンス上の Arcserve 製品をアクティブ化する方法	115

UDP アプライアンス用にネットワーク環境を設定する方法

Arcserve UDP アプライアンスを管理するには、最初にアプライアンスをネットワーク内に含めます。そのためには、ホスト名をアプライアンスに割り当て、ネットワークポートを設定する必要があります。

以下の手順に従います。

1. アプライアンスの電源をオンにした後、Microsoft ライセンス条項に対する設定画面が表示されます。条件を確認して、同意します。
2. UDP の [エンド ユーザ使用許諾契約] ダイアログボックスが表示されます。使用許諾契約の内容を確認して同意し、[次へ] をクリックします。
3. アプライアンスのホスト名を入力します。名前を割り当てると、ネットワーク上でアプライアンスを識別するのに役立ちます。

アプライアンスをネットワーク内のドメインのメンバーにするには、[この Arcserve UDP アプライアンスをドメインに追加] オプションをクリックし、ドメイン、ユーザー名、パスワードを指定します。

注：このオプションが選択されている場合、[ドメイン]、[ユーザー名]、[パスワード] フィールドが表示されます。

注: 新しいホスト名を適用するには、アプライアンスを再起動する必要があります。アプライアンスを今すぐ再起動するか、またはネットワーク設定後に再起動するかを選択できます。

アプライアンスを再起動すると、他の任意のマシンから以下の URL を使用してアプライアンスにアクセスすることができます。

`https://<hostname>:8015`

4. **保存**]をクリックします。
5. 以下のダイアログ ボックスが表示されます。

デフォルトでは、Arcserve UDP はネットワーク内のすべてのネットワーク接続を検出します。一部の接続が割り当てられていない場合は、手動で編集し、接続の詳細を指定します。

6. ネットワーク接続を編集するには、[ネットワーク接続]ボックスで **編集** をクリックします。

7. **ネットワーク接続** ダイアログ ボックスが表示されます。

8. IP アドレス、サブネット マスク、デフォルト ゲートウェイの値を必要に応じて変更し、**保存** をクリックします。

注: 必要に応じて、ホスト名、ドメイン、日付と時刻を変更することもできます。

9. 変更を適用するには、**アプライアンスの再起動** をクリックしてアプライアンスを再起動します。

アプライアンスが新しいホスト名で再起動されます。

10. **ログイン** 画面が再度表示されます。ユーザ名とパスワードを入力して、**Enter** キーを押します。

11. アプライアンスの環境設定画面が再度開いたら、**ウィザードの起動** をクリックします。

UDP アプライアンス ウィザードを使用したプランの作成の概要

プランは、バックアップするノードおよびバックアップするタイミングを定義する手順の集合です。Arcserve UDP アプライアンスでは、基本的なプランを作成できます。UDP アプライアンス ウィザードを使用したプランの作成には、次の3つのステップがあります。

1. 保護するノードを追加します。

Windows ノードまたは仮想マシンを vCenter/ESX または Hyper-V サーバから選択できます。

2. バックアップ スケジュールを定義します。
3. プランをチェックして確認します。

基本的なプランに加えて、Arcserve UDP では、UDP コンソールから複雑なプランを作成して多くのパラメータを制御することができます。UDP コンソールから複雑なプランを作成するには、「Arcserve UDP ソリューション ガイド」を参照してください。

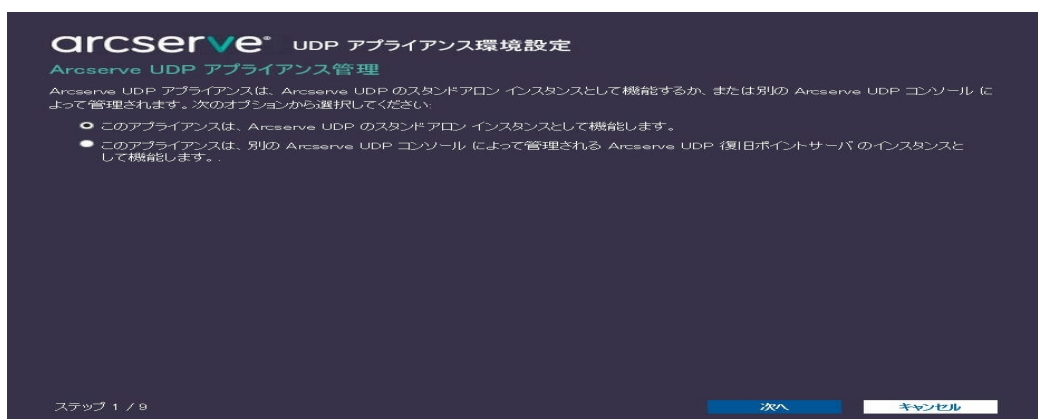
Arcserve UDP アプライアンスを設定してプランを作成する方法

アプライアンスが新しいホスト名で再起動されると、Unified Data Protection ウィザードが表示されます。ウィザードを使用して、バックアップをスケジュールするための基本プランを作成できます。このプランでは、保護するノードを定義し、バックアップを実行するタイミングをスケジュールできます。バックアップ先は、アプライアンスサーバです。

注： Arcserve UDP アプライアンス設定 ウィザードのすべての手順はオプションです。スキップして、直接 UDP コンソールを開いてプランを作成することもできます。

以下の手順に従います。

1. Arcserve UDP コンソールにログインします。
2. Unified Data Protection ウィザードでは、**[Arcserve UDP アプライアンス管理]** ダイアログボックスが最初に表示されます。UDP コンソールは、スタンドアロンのインスタンスとして管理できます。または別の UDP コンソールからリモートで管理できます。リモート コンソール管理機能は、複数の UDP コンソールを管理している場合に便利です。



3. アプライアンスをローカルで管理するか(デフォルト)、別の UDP コンソールから管理するかを選択します。

アプライアンスが別の UDP コンソールから管理されている場合、UDP コンソールの URL、ユーザ名、パスワードを指定します。

4. **[次へ]**をクリックします。

注： ウィザードを閉じて Arcserve UDP コンソールを開くには、**[キャンセル]**をクリックします。

[**データストア**]ダイアログ ボックスが表示されます。

データストアは、アプライアンス上の物理ストレージ領域で、バックアップ先として使用されます。

デフォルトでは、Arcserve UDP は <hostname>_data_store という名前でデータストアを作成します。このデータストアは、デデュプリケーションおよび暗号化に対応しています。デデュプリケーションおよび暗号化の詳細については、「Arcserve UDP ソリューションガイド」の「[データ デデュプリケーション](#)」を参照してください。

注：データストアは暗号化されるため、暗号化パスワードを指定する必要があります。

5. このデータストアに対する暗号化パスワードを入力し、確認します。
6. [**次へ**]をクリックします。
7. [**電子メールおよびアラート**]ダイアログ ボックスが表示されます。

このダイアログ ボックスでは、アラートを送信するために使用される電子メールサーバと、アラートを受け取る受信者を定義できます。成功したジョブ、失敗したジョブ、またはその両方に基づいてアラートを取得するオプションを選択できます。

8. 以下の電子メールとアラートの詳細を指定します。

サービス

Google メール、Yahoo メール、Live メール、などの電子メールサービスを指定します。

電子メールサーバ

電子メールサーバのアドレスを指定します。たとえば、Google サーバ電子メールの場合は smtp.gmail.com を指定します。

ポート

電子メールサーバのポート番号を指定します。

認証が必要

電子メールサーバに認証が必要かどうかを指定します。認証が必要な場合は、認証用のアカウント名とパスワードを指定します。

件名

受信者に送信される電子メールの件名を指定します。

送信者

送信者の電子メールIDを指定します。受信者はこの送信者からメールを受信します。

受信者

アラートを受信する受信者を指定します。複数の受信者がいる場合はセミコロン(;)で区切ることができます。

オプション

通信チャンネルに使用する暗号化方式を指定します。

プロキシサーバを使用して接続する

プロキシサーバ経由で電子メールサーバに接続している場合は、プロキシサーバのユーザ名とポート番号を指定します。また、プロキシサーバで認証が必要な場合は、ユーザ名とパスワードを指定します。

テスト電子メールを送信

テストメールを受信者に送信します。テストメールを送信することによって、詳細を確認できます。

9. [次へ]をクリックします。
10. [リモート RPS にレプリケート]ダイアログボックスが表示されます。

11. アプライアンスで、リモートで管理された復旧ポイント サーバ(RPS) にレプリケートするようには、以下の詳細を指定します。リモートで管理された RPS の詳細については、「Arcserve UDP ソリューションガイド」を参照してください。

Arcserve UDP コンソールの URL

リモートの Arcserve UDP コンソールの URL を指定します。

ユーザ名 およびパスワード

リモート コンソールに接続するために使用されるユーザ名とパスワードを指定します。

プロキシ サーバを使用して接続する

リモート コンソールがプロキシ サーバの背後にある場合は、プロキシ サーバの詳細を指定します。

12. アプライアンスで、リモートで管理された RPS にレプリケートしないようには、**「このアプライアンスはリモートで管理された RPS にレプリケートしません」** オプションを選択します。
13. **「次へ」**をクリックします。
14. **「プランの作成」**ダイアログ ボックスが表示されます。

このダイアログ ボックスを使用して、基本プランを作成し、保護するノードおよびバックアップのスケジュールを指定できます。

注: ウィザードを使用して基本プランを作成しない場合は、以下の手順を実行します。

- a. **プラン作成をスキップ**]をクリックします。
 - b. **次の手順**]ダイアログ ボックスが表示されます。
 - c. **完了**]をクリックし、UDP コンソールを開いてプランを作成します。
15. プランを作成するために以下の詳細を指定します。

プラン名

プランの名前を指定します。プラン名を指定しない場合は、デフォルトの名前として「保護プラン <n>」が割り当てられます。

セッション パスワード

セッション パスワードを指定します。セッション パスワードは、データのリストア時に必要となるため重要です。

ノードをプランにどのように追加しますか?

ノードをプランに追加する方法を指定します。以下の方法から1つを選択します。

◆ [ホスト名/IP アドレス](#)

ノードのホスト名または IP アドレスを使用してノードを手動で追加する方法を示します。必要な数だけノードを追加できます。

◆ [Active Directory からのノードのディスカバリ](#)

Active Directory 内にあるノードを追加する方法を示します。Active Directory の詳細情報を使用してノードを検出してから、ノードを追加できます。

◆ [vCenter/ESX Server からインポート](#)

ESX または vCenter Server から仮想マシンノードをインポートする方法を示します。このオプションでは、指定されたホスト名または IP アドレス上で検出されたすべての仮想マシンがリスト表示されます。


◆ [Hyper-V Server からインポート](#)

Microsoft Hyper-V サーバから仮想マシンノードをインポートする方法を示します。

方法を選択したら、各ダイアログボックスで詳細を指定します。

16. ノードがプランに追加されたら、**[次へ]**をクリックします。

[バックアップ スケジュール]ダイアログボックスが表示されます。


UDP アプライアンス環境設定

バックアップ スケジュール

プランのバックアップ スケジュールの基準を入力します。

インストール/アップグレードおよび再起動のタイミング
 : :

日次増分バックアップの実行:
 :

i **スケジュール サマリ** (選択内容に基づく)

金曜日 の 21:00 に、Arcserve UDP エージェント の最新バージョンがまだインストールされていないすべてのソース ノードに最新バージョンがインストールされます。

これらのノードは、インストール/アップグレードの完了後にすぐに再起動されます。

Hyper-V または vCenter/ESX からインポートされたノードでは、エージェントのインストールと再起動は発生しません。

金曜日 の 22:00 に、最初のフル バックアップが実行されます。

インストール/アップグレードが完了した後は、毎日 22:00 に増分バックアップが実行されます。

プランの作成のキャンセル

ステップ 7 / 9

前に戻る
次へ
キャンセル

17. 以下のスケジュールを入力します。

- ◆ **Arcserve UDP エージェントのインストールまたはアップグレードのスケジュール:** エージェントがインストールされていないソース ノードに、Arcserve UDP エージェントの最新バージョンがインストールされます。以前のエージェントのインストールは、最新のバージョンにアップグレードされます。
- ◆ **増分バックアップスケジュール:** 初めての場合はフルバックアップが実行され、その後は増分バックアップが実行されます。

注: インストール/アップグレードの時刻より前にバックアップの時刻がスケジュールされている場合、バックアップは自動的に次の日にスケジュールされます。たとえば、エージェントのインストールを金曜日の午後 9 時にスケジュールし、バックアップを午後 8 時にスケジュールした場合、バックアップは土曜日の午後 8 時に実行されます。

プランの作成をキャンセル: 作成したプランをキャンセルするには、**[プランの作成をキャンセル]**をクリックします。

18. **[次へ]**をクリックします。

[プランの確認]ダイアログ ボックスが開きます。

19. ダイアログ ボックスで、プランの詳細を確認します。必要に応じて、**[ノードの編集]**または**[スケジュールの編集]**をクリックしてノードまたはスケジュールを編集するか、プランを追加または削除できます。

ノードの編集

保護するソースノードを変更します。

スケジュールの編集

バックアップスケジュールを変更します。

20. プランを検証したら、**次へ**]をクリックします。

次の手順]ダイアログボックスが表示されます。

環境設定が正常に終了し、Arcserve UDP コンソールで作業する準備が整いました。保護するノードをさらに追加し、仮想スタンバイなどの機能でプランをカスタマイズし、復旧ポイント サーバおよびデータストアを含めることによってデスティネーションを追加することができます。

21. **完了**]をクリックしてウィザードを終了し、Arcserve UDP コンソールを開きます。

プランへのノードの追加の詳細

さまざまなノードを保護するためのプランを作成することができます。ノードを保護するには、ノードをプランに追加する必要があります。UDP アプライアンス ウィザードからノードを追加できます。ウィザードでは、以下の方法を使用してノードを追加できます。

- ノードの IP アドレスまたはホスト名を手動で入力
([ホスト名/IP アドレスによるノードの追加](#))
- Active Directory からのノードのディスカバリ
([Active Directory によるノードの追加](#))
- VMware ESX/vCenter Server から仮想マシンノードをインポート
([vCenter/ESX ノードの追加](#))
- Microsoft Hyper-V サーバから仮想マシンノードをインポート
([Hyper-V ノードの追加](#))

ホスト名/IP アドレスによるノードの追加

ノードをプランに追加するために IP アドレスまたはホスト名を手動で入力することができます。追加するノード数が少ない場合はこの方法を使用しますが、複数のノードを 1 つずつ追加できます。Arcserve UDP エージェント (Windows) はこれらのノードにインストールされます。

以下の手順に従います。

1. [ホスト名/IP アドレスによるノードの追加] ダイアログ ボックスで、以下の詳細を入力します。

ホスト名/IP アドレス

ソースノードのホスト名または IP アドレスを指定します。

ユーザ名

管理者権限を持つノードのユーザ名を指定します。

パスワード

ユーザパスワードを指定します。

説明

ノードを特定する説明を指定します。

プラン作成のキャンセル

作成したプランをキャンセルします。

2. **[リストに追加]**をクリックします。

ノードが右ペインに追加されます。さらにノードを追加するには、これらの手順を繰り返します。追加されたすべてのノードは、右ペインにリスト表示されます。

3. (オプション) 追加したノードを右ペインのリストから削除するには、目的のノードを選択して **[削除]**をクリックします。
4. **[次へ]**をクリックします。

ノードがプランに追加されます。

Active Directory によるノードの追加

Active Directory にノードを追加するには、Active Directory の詳細を指定し、ノードを検出して、プランにノードを追加します。

以下の手順に従います。

1. 「Active Directory によるノードの追加」ダイアログ ボックスで、以下の詳細を入力します。

ユーザ名

<ドメイン>\<ユーザ名> の形式でドメインおよびユーザ名を指定します。

パスワード

ユーザ パスワードを指定します。

コンピュータ名 フィルタ

ノード名のディスカバリに使用するフィルタを指定します。

プラン作成のキャンセル

作成したプランをキャンセルします。

2. **参照**]をクリックします。

検出されたノードが表示されます。

ノードを追加するには、ノードを選択して確認します。

3. 検証するには、ノードを選択し、ユーザ名およびパスワードを入力して **適用**]をクリックします。

認証情報が検証されました。検証済みノードには、緑色のチェックマークが付いています。ノードの検証が失敗した場合、認証情報を再入力して **適用**]を再度クリックします。

注：ノードをリストに追加する前に各ノードを検証する必要があります。

4. **リストに追加**]をクリックします。

選択したノードが右ペインに追加されます。

5. (オプション) ノードを右ペインから削除するには、ノードを選択して **削除**]をクリックします。
6. **次へ**]をクリックします。

ノードがプランに追加されます。

vCenter/ESX ノードの追加

仮想マシンノードを VMware vCenter/ESX Server に追加できます。これらのノードを追加するには、vCenter/ESX Server からのノードを検出およびインポートする必要があります。

以下の手順に従います。

1. **[vCenter/ESX によるノードの追加]** ダイアログボックスで、以下の vCenter/ESX Server の詳細を指定し、**[接続]** をクリックします。

ホスト名/IP アドレス

vCenter/ESX Server のホスト名または IP アドレスを指定します。

ポート

使用するポート番号を指定します。

プロトコル

使用するプロトコルを指定します。

ユーザ名

サーバのユーザ名を指定します。

パスワード

ユーザパスワードを指定します。

プラン作成のキャンセル

作成したプランをキャンセルします。

2. 検出されたホスト名が表示されます。ホスト名を展開してノードを参照します。

3. 追加するノードを選択してから、**[リストに追加]**をクリックします。

選択したノードが右ペインに追加されます。

4. (オプション) ノードを右ペインから削除するには、ノードを選択して **[削除]** をクリックします。

5. **[次へ]**をクリックします。

ノードがプランに追加されます。

Hyper-V ノードの追加

この方法を使用すると、Microsoft Hyper-V サーバから仮想マシンノードをインポートできます。

以下の手順に従います。

1. [Hyper-V ノードの追加] ダイアログ ボックスで以下の詳細を指定します。

ホスト名/IP アドレス

Hyper-V サーバの名前または IP アドレスを指定します。Hyper-V クラスタに含まれている仮想マシンをインポートするには、クラスタノード名または Hyper-V ホスト名のいずれかを指定します。

ユーザ名

管理者権限のある Hyper-V ユーザ名を指定します。

注: Hyper-V クラスタの場合は、クラスタの管理者権限を持つドメインアカウントを使用します。スタンドアロン Hyper-V ホストの場合は、ドメインアカウントを使用することをお勧めします。

パスワード

ユーザ名のパスワードを指定します。

プラン作成のキャンセル

作成したプランをキャンセルします。

2. **接続** をクリックします。

検出されたホスト名が表示されます。ホスト名を展開してノードを参照します。

3. (オプション) **フィルタ** フィールドにノード名を入力して、ツリー内のノードを検索できます。

4. ノードを選択してから、**リストに追加** をクリックします。

選択したノードが右ペインに追加されます。

5. (オプション) ノードを右ペインから削除するには、ノードを選択して **削除** をクリックします。

6. **次へ** をクリックします。

ノードがプランに追加されます。

ゲートウェイとしての UDP アプライアンスの設定

Arcserve UDP アプライアンスをゲートウェイとして設定 できます。

以下の手順に従います。

1. Arcserve UDP アプライアンスから Arcserve UDP コンソールをアンインストールします。
2. Arcserve UDP コンソールから、**[リソース]**タブをクリックします。
3. Arcserve UDP コンソールの左 ペインで、**[インフラストラクチャ]**に移動して、**[サイト]**をクリックします。
4. **[サイトの追加]**をクリックします。
5. **[サイトの追加]**ウィザードの手 順に従って、Arcserve UDP アプライアンス上に Arcserve UDP リモート 管理 ゲートウェイをインストールします。

注： Arcserve UDP アプライアンス上に Arcserve UDP リモート 管理 ゲートウェイをインストールした後に、Arcserve UDP アプライアンス ウィザードで **[ウィザードの起動]**をクリックしても、Arcserve UDP コンソールは起 動しません。Arcserve UDP コンソールにアクセスするには、Arcserve UDP コンソールの URL を直接 入力します。

環境設定の消去およびアプライアンスファクトリリセットの適用

ファクトリリセットを使用して、Arcserve UDP アプライアンスをクリーンな未設定の状態に戻すことができます。ファクトリリセットは Arcserve UDP コンソールから適用できます。

以下の手順に従います。

1. Arcserve UDP コンソールの **設定** タブで **ファクトリリセット** をクリックします。

デフォルトではすべてのバックアップデータが保存されます。

Notes:

Arcserve UDP には、**既存のバックアップデータを保持** オプションが用意されており、既存のデータストアを保存することができます。

- ◆ **既存のバックアップデータを保持** オプションを選択した場合、C:\ volume のみが再構築されます。X:\ volume および Y:\ volume のデータは変更されないままになります。
- ◆ **既存のバックアップデータを保持** オプションを選択しない場合、C:\, X:\ および Y:\ が再構築されます。

2. **ファクトリリセットを実行** をクリックします。

確認のダイアログボックスが表示されます。

3. 確認のダイアログボックスで、**[リセット]**をクリックすると、ファクトリリセットが開始されます。

アプライアンスマシンが再起動され、ファクトリリセットが以下に表示されるとおりに実行されます。

ファクトリリセットの完了により、確認のダイアログボックスが表示されます。

4. 確認ダイアログ ボックスで、以下のいずれかのオプションを実行します。
 - ◆ **再起動**]をクリックしてアプライアンスを再起動します。
 - ◆ **シャット ダウン**]をクリックしてアプライアンスを閉じます。

ブート オプションを使用した Arcserve UDP ファクトリリセットの適用

UDP ファクトリリセットは、UDP アプライアンスのブート メニューから適用することもできます。UDP ファクトリリセットを使用して、Arcserve UDP アプライアンスをクリーンな未設定の状態に戻すことができます。

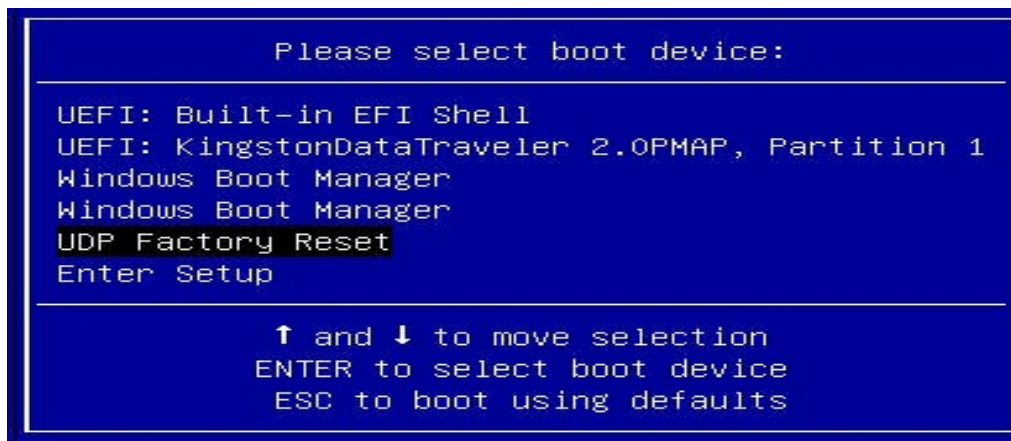
注：UDP ファクトリリセットの実行中に、バックアップ データを保持するオプションも選択できます。

以下の手順に従います。

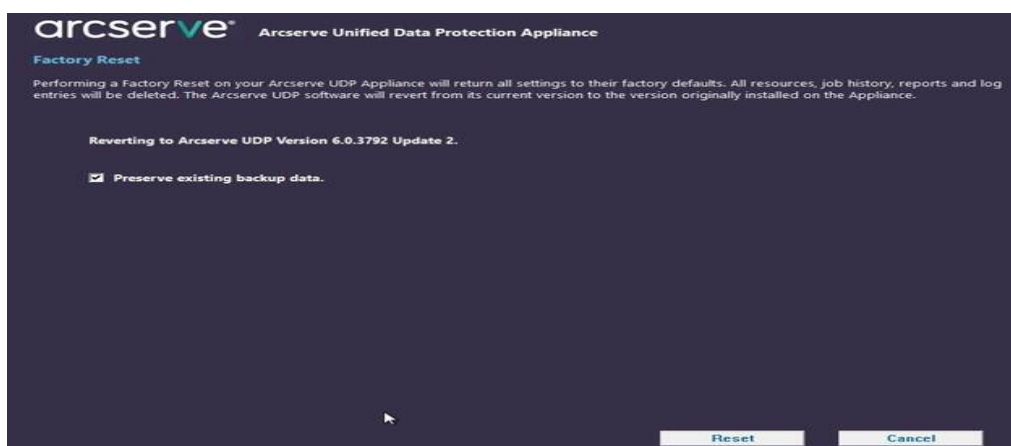
1. ブートメニューを起動するには、F11 キーを押します。



2. ブート オプションの UDP ファクトリリセットを選択します。

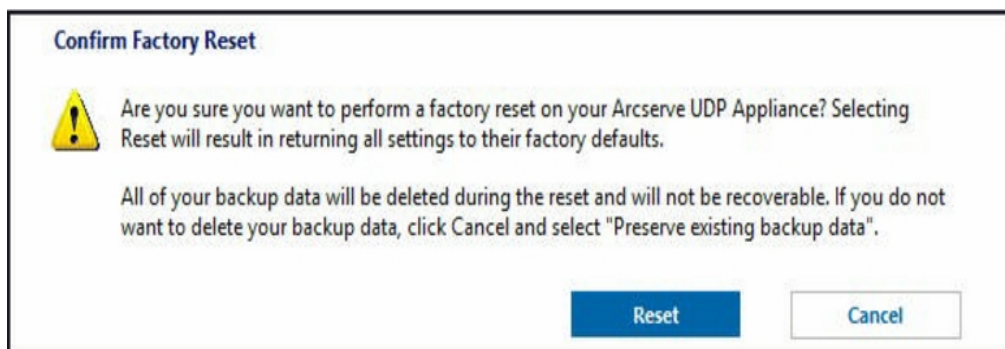


ファクトリリセットに関するページが表示されます。

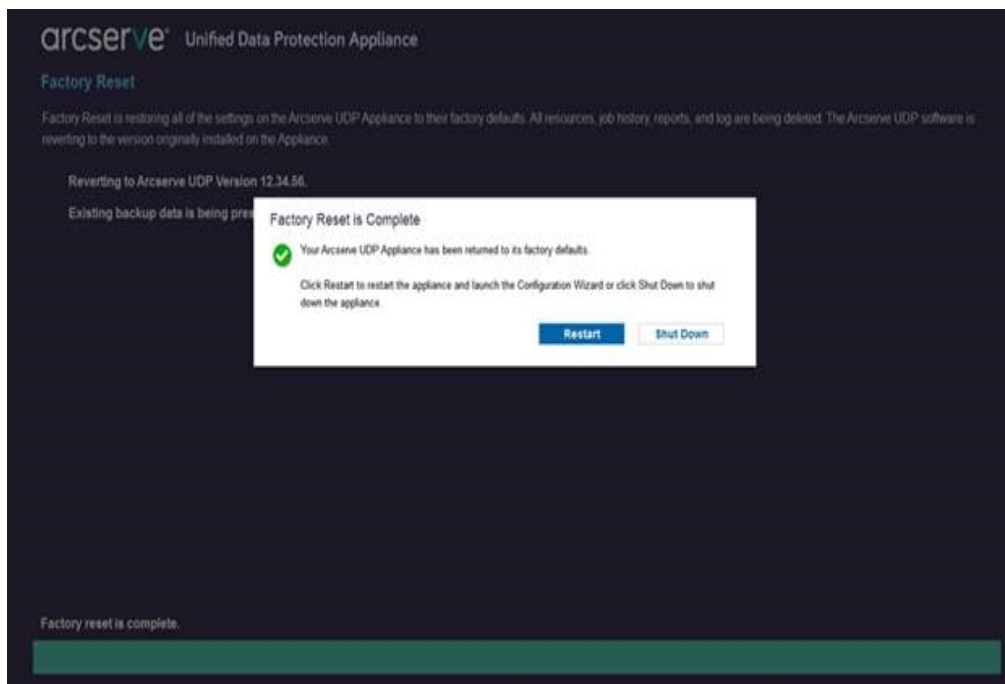


Notes:

- デフォルトで、**既存のバックアップデータを保持** オプションが選択されています。元のオペレーティング システムの C:\ ボリュームのみが再構築されます。X:\ volume および Y:\ volume のデータは変更されませんままになります。
 - **既存のバックアップデータを保持** オプションの選択をオフにすると、元のオペレーティング システムの C:\、X:\、Y:\ の各ボリューム上のすべてのデータが再構築されます。
3. **[リセット]** をクリックします。
- 確認のダイアログ ボックスが表示されます。



- [キャンセル]** をクリックすると、アプライアンス ユニートを再起動できます。
4. ファクトリリセットが完了した後、以下のいずれかの操作を実行できます。
- ◆ **[再起動]** をクリックしてアプライアンスを再起動します。
 - ◆ **[シャット ダウン]** をクリックしてアプライアンスを閉じます。



アプライアンス上の Arcserve 製品をアクティブ化する方法

アプライアンス上の Arcserve 製品のアクティブ化の詳細については、「ソリューションガイド」の「[オンラインでの Arcserve 製品 ライセンスのアクティブ化](#)」を参照してください。

第 7 章: バックアッププランの作成

UDP アプライアンスを使用して、Windows、Linux、および仮想マシン用のバックアッププランを作成できます。テープデバイスにデータを書き込み、仮想スタンバイマシンを作成することもできます。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

Linux ノード用のバックアッププランの作成	117
テープデバイスへのバックアッププランの作成	118
アプライアンス上仮想スタンバイプランの作成	119

Linux ノード用のバックアッププランの作成

アプライアンスコンソールから Linux ノードをバックアップできます。Linux バックアップサーバはすでにコンソールに追加されています。

以下の手順に従います。

1. アプライアンスコンソールを開きます。
2. [ソース]- [プラン]- [すべてのプラン]をクリックします。
3. Linux バックアッププランを作成します。
4. [ソース]、[デスティネーション]、[スケジュール]、[拡張]の設定を指定します。

注: 各環境設定の詳細については、「ソリューションガイド」の「Linux バックアッププランを作成する方法」を参照してください。

5. バックアッププランを実行します。

テープデバイスへのバックアッププランの作成

UDP アプライアンスには、テープデバイスにデータを書き込む機能があります。通常、ソースデータは、UDP バックアッププランを使用してデータストアに保存されている復旧ポイントで、デスティネーションはテープデバイスです。Arcserve Backup マネージャを使用して、テープへのバックアップジョブを管理する必要があります。

以下のプロセスの概要は、UDP アプライアンスを使用してテープデバイスに書き込む方法を理解するのに役立ちます。

1. テープデバイスを UDP アプライアンスに接続します。

UDP アプライアンスには、テープデバイスを接続するためのポートが背面パネルに備わっています。テープデバイスを接続すると、UDP アプライアンスは自動的にテープデバイスを識別します。

2. バックアップ マネージャを使用して、テープデバイスを設定します。

バックアップ マネージャを開き、テープデバイスをバックアップ マネージャに追加します。バックアップ マネージャは、Arcserve Backup を管理するためのインターフェースです。テープデバイスをバックアップ マネージャに追加した後、デバイスを設定します。

注: デバイスの設定および管理の詳細については、「Arcserve Backup for Windows 管理者ガイド」の「デバイスおよびメディアの管理」を参照してください。

3. UDP コンソールを使用して、1 つ以上のバックアップジョブを正常に完了します。

テープデバイスに書き込み可能な正常なバックアップが少なくとも 1 つ存在している必要があります。データをバックアップするには、UDP コンソールを使用してプランを作成し、データストアにバックアップします。

注: 別のノード用のバックアッププランの作成に関する詳細については、「ソリューションガイド」の「データを保護するプランの作成」を参照してください。

4. バックアップ マネージャからのテープへのバックアップジョブの開始

バックアップ マネージャを開き、テープデバイスにデータをバックアップするプランを作成します。ソースデータは UDP バックアッププランのデスティネーションで、デスティネーションはテープデバイスです。

注: テープへのバックアッププランの作成に関する詳細については、「Arcserve Backup for Windows 管理者ガイド」の「D2D/UDP データのバックアップおよび回復」を参照してください。

アプライアンス上 仮想スタンバイ プランの作成

アプライアンスには、仮想スタンバイ マシンとして動作する機能があります。この機能は、以下アプライアンスシリーズに備わっています。

- Arcserve UDP アプライアンス 7200V
- Arcserve UDP アプライアンス 7300V
- Arcserve UDP アプライアンス 7400V
- Arcserve UDP アプライアンス 7500V
- Arcserve UDP アプライアンス 7600V
- Arcserve UDP アプライアンス 8100
- Arcserve UDP アプライアンス 8200
- Arcserve UDP アプライアンス 8300
- Arcserve UDP アプライアンス 8400

前提条件：バックアップ プランが正常に実行されている必要があります。

以下の手順に従います。

1. アプライアンス コンソールを開きます。
2. プランに移動して、バックアップ プランを変更します。
3. 仮想スタンバイ タスクを追加します。
4. ソース、デスティネーション、仮想 マシンの環境設定を更新します。

注：環境設定の詳細については、「ソリューション ガイド」の「仮想スタンバイ プランを作成する方法」トピックを参照してください。

5. プランを保存して実行します。

第 8 章: Arcserve UDP アプライアンスの修復

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

ハードドライブの取り外しおよび交換	121
-------------------------	-----

ハードドライブの取り外しおよび交換

Arcserve UDP アプライアンスを使用すると、ハードドライブの1つに障害が発生した場合、残りのドライブがすぐに起動し、データは失われずにアプライアンスが引き続き正常に動作します。そのため、複数のハードドライブの障害に関連する問題に対して防御するには、データが失われる可能性を最小限に抑えるためにできる限り早くハードドライブを置き換える必要があります。

Arcserve UDP アプライアンスには、4つのハードドライブキャリアが含まれており、左から右に0、1、2、3とラベルが付けられています。一度に複数のハードドライブを交換する場合、各ドライブキャリアでどのドライブが交換されたかがわかるように、交換したハードドライブにラベルを付ける必要があります。アプライアンスから取り外したハードドライブにもラベルを付け、どのドライブキャリアによって占有されていたかがわかるようにします。

重要: ハードドライブは静電気に敏感なデバイスであり、損傷しやすいため、ハードドライブを扱う場合は適切な保護対策を講じてください。

- 静電気の放電を防ぐためにリストトラップを着用してください。
- 交換用ハードディスクを帯電防止のパッケージ袋から取り出す前に、接地された物体に触れるようにします。
- ハードドライブを扱う際は常に端のみを持つようにし、底面の露出している部品には一切触れないでください。

以下の手順に従います。

1. ドライブホルダーにアクセスするには、まずフェイスプレートを取り外す必要があります。
 - a. フェイスプレートのロックを解除します。
 - b. 取り外し用つまみを押してフェイスプレートピンを格納します。
 - c. フェイスプレートを慎重に取り外します(両手を使用)。
2. ドライブキャリアの取り外し用ラッチを押します。これにより、ドライブキャリアハンドルが展開されます。

3. ハンドルを使用して、アプライアンスの前面からドライブ キャリアを引き出します。ハードドライブは、アプライアンスに対する取り付け/取り外しを簡単に行うことができるよう、ドライブ キャリアにマウントされています。これらのキャリアは、ドライブ ベイに適切な換気が行われるようにするのも役立ちます。

重要: 短時間の場合を除き(ハードドライブの交換など)、ドライブ キャリアが完全に設置されていない状態でアプライアンスを稼働させることはしないでください。

4. 古いハードドライブをドライブ キャリアから取り外し、新しいハードドライブを設置します。その際、交換用ハードドライブが正しい向きであるかに注意

し、ラベルが上部、部品が下部にきていることを確認します。

5. ドライブトレイがアプライアンスに完全に設置されるまでスライドし、ドライブキャリアハンドルを閉じて固定します。

6. ドライブを返却する場合は、返却に関する指示を Arcserve サポートから取得します。

第 9 章: 安全に関する注意事項

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

一般的な安全に関する注意事項	126
電気に関する安全のための注意事項	128
FCC コンプライアンス	129
静電気放電 (ESD) に関する注意事項	130

一般的な安全に関する注意事項

以下は、自分自身を損害から保護し、アプライアンスを障害または誤動作から保護するために従う必要がある一般的な安全に関する注意事項です。

- EMI クラス A 機器 (商用機器) の場合、本装置は家庭用ではなく、商用機器 (A) として EMC (Electromagnetic Compatibility) Registration に登録されています。販売者およびユーザは、この点において注意する必要があります。

A급 기기 (업무용 방송 통신 기자재)

이 기기는 업무용 (A급) 으로 전자파 적합 기기로서 판매자 또는 사용자는 이 점을 주의하시기 바라며, 가정 외의 지역에서 사용하는 것을 목적으로 합니다

注: この注意事項は韓国にのみ適用されます。詳細については、Arcserve サポート (<https://www.arcserve.com/support>) までお問い合わせいただくか、0079885215375 (韓国) までお電話ください。

- アプライアンスに同梱されている内容をチェックして破損がないことを確認します。破損の証拠がある場合は、すべてのパッケージ資材を保持して Arcserve サポートにご連絡ください: <https://www.arcserve.com/support>。
- アプライアンスを格納するラックユニットの適切な場所を決定します。これは、よく換気され、ごみなどが無い清潔かつ無塵の領域に配置する必要があります。熱、電氣的ノイズ、電磁場が生じる場所は避けてください。
- また、接地された電源コンセントが少なくとも 1 つある場所の近くに配置する必要があります。モデルによっては、アプライアンスに 1 つの電源または冗長電源装置のいずれかが含まれており、2 つの接地されたコンセントが必要になります。
- アプライアンスは、限られた場所でのみ使用するものです。
 - 場所に適用される制限の理由および従うべき注意事項について指示されているユーザまたはサービス担当者からアクセスを得ることができません。
 - アクセスするには、ツールまたはロックおよびキー、セキュリティの別の手段によって与えられ、その場所に責任を持つ担当者によって制御されます。
- アプライアンスの上部のカバーと、アプライアンスから取り外されたすべての部品をテーブルの上に置き、誤って踏まないようにします。

- アプライアンスを使用して作業する際は、ネクタイや袖のボタンを留めていないシャツなどゆるやかな服装は避けてください。そのような服装は、電子回路に触れたり、冷却ファンに巻き込まれたりする可能性があります。
- 宝飾品や金属のものは、金属導体であり、プリント基板 (PCB) または電流が流れている場所に接触すると、ショートしたり損傷を生じさせたりする可能性があるため、身に付けしないでください。
- アプライアンスの内部にアクセスし、すべての接続が行われたことを確認したら、アプライアンスを閉じて、留めねじでラックユニットに固定します。

電気に関する安全のための注意事項

以下は、自分自身を損害から保護し、アプライアンスを障害または誤動作から保護するために従う必要がある電気に関する安全のための注意事項です。

- アプライアンス上の電源オン/オフのスイッチの場所と、部屋の緊急電源遮断スイッチ、切断スイッチ、電源コンセントの場所を確認します。電氣的事故が発生した場合は、アプライアンスから電力を素早く切断することができます。
- 高電圧の部品を扱う場合は、1人で作業しないでください。
- システムの主要部品(サーバボード、メモリモジュール、DVD-ROM、フロッピードライブなど)を取り外したり配置したりする場合は、必ずアプライアンスから電力を切断する必要があります(ホット スワップ可能なドライブには必要ありません)。電力を切断する場合は、最初にオペレーティングシステムでアプライアンスの電源を切り、次にアプライアンスのすべての電源モジュールから電源コードのプラグを抜きます。
- 露出している電子回路の周りで作業する場合、電源切断の制御に慣れている別の担当者が待機し、必要に応じて電源スイッチをオフにする必要があります。
- 電源がオンになっている電子機器を扱う場合は、片手のみを使用します。これは、完全に閉じられた回路を防ぐためです。完全な回路は電気ショックを引き起こす可能性があります。金属のツールを使用する場合、電子部品や回路基板に接触すると簡単に損傷を与える可能性があるため、特に注意します。
- 感電からの保護として静電気を軽減するために設計されたマットは使用しないでください。代わりに、電気絶縁体として特別に設計されているゴムのマットを使用します。
- 電源装置の電源コードには、アース端子付きプラグが含まれている必要があります。アース接地用コンセントに接続する必要があります。
- サーバボードのバッテリー: 注意: オンボード バッテリーの上下を逆に設置すると、極性が逆になり、爆発の危険があります。このバッテリーは、メーカーによって推奨されるのと同じ種類または同等の種類でのみ置き換える必要があります。メーカーの指示に従って使用済みバッテリーを破棄します。
- DVD-ROM のレーザー: 注意 - このサーバには、DVD-ROMドライブが装備されている場合があります。レーザービームへの直接の露出および有害な放射線被ばくを回避するため、筐体を開いたり、通常とは異なる方法でユニットを使用したりしないでください。

FCC コンプライアンス

このアプライアンスは、FCC 規則の Part 15 に準拠しています。以下の条件に従って運用される必要があります。

- このアプライアンスは、有害な干渉を引き起こしません
- このアプライアンスは、受け取った干渉を受け入れる必要があります(意図しない操作を発生させる可能性がある干渉を含む)

注: この機器はテストされ、クラス A のデジタル機器の制限に従っており、FCC 規則の Part 15 に準拠していることが検証されています。これらの制限は、機器が商用目的で運用された場合に有害な干渉に対して適切な保護を提供するように設計されています。この機器は、電磁波を発生および利用し、外部に放射することがあり、正式な手順に従って設置および使用されない場合は、無線通信に有害な干渉を引き起こす可能性があります。住宅地域でこの機器を稼働させると、有害な干渉が発生する可能性があります。ユーザは自らの費用負担で干渉を是正する必要があります。

静電気放電(ESD)に関する注意事項

静電気放電(ESD)は、異なる電荷の2つの物体が互いに接触することによって生じます。静電気は、この電荷の違いを中和しようとして発生し、電子部品やプリント回路基板に損傷を与える可能性があります。ESDに敏感なデバイスには、サーバボード、マザーボード、PCIeカード、ドライブ、プロセッサ、メモ리카ードなどがあり、特殊な扱いが必要となります。接触する物体の電荷の違いを中和するための努力として、接触前に以下の注意事項に従い、機器をESDから保護します。

- 電気絶縁体として特別に設計されているゴムのマットを使用します。感電からの保護として静電気を軽減するために設計されたマットは使用しないでください。
- 静電気の放電を防ぐように設計されている接地されたリストストラップを使用します。
- 帯電または放電(ESD)を予防する洋服または手袋を使用します。
- すべての部品およびプリント回路基板(PCB)は、使用するまで静電気防止バッグに入れておきます。
- 基盤を静電気防止バッグから取り出す前に、接地されたメタルオブジェクトに触れます。
- 部品またはPCBが洋服に触れないようにします。触れた場合は、リストストラップを装着していても静電気を帯びる可能性があります。
- ボードを扱う際は、その端のみに触れるようにします。その部品、周辺チップ、メモリモジュール、接点に触れないでください。
- チップまたはモジュールを扱う場合、そのピンに触れないようにします。
- サーバボードおよび周辺機器を使用しない場合は静電気防止バッグに戻します。
- 接地目的のため、アプライアンスが、電源、ケース、マウントファスナー、サーバボード間で優れた伝導性を提供することを確認します。

第 10 章: IPMI での作業

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

IPMI パスワードを変更する方法	132
IPMI ファームウェアをアップグレードする方法	135

IPMI パスワードを変更する方法

IPMI パスワードを変更する前に、BIOS セットアップ画面にアクセスして IP アドレスを取得する必要があります。

以下の手順に従います。

1. システムを起動すると、ブート画面が表示されます。この画面で、Delete キーを押します。BIOS セットアップ画面が表示されます。

注：移動するには、矢印キーを使用し、Enter キーを押します。前の画面に戻るには、Escape キーを押します。

2. BIOS メイン画面の上部で IPMI タブを選択します。

注：デフォルトでは、環境設定アドレスソースは DHCP に設定されています。

3. IP アドレスが正しいことを確認します。サーバが同じネットワーク上にある場合のみ、Web ブラウザを使用して、IPMI インターフェースに接続することができます。
4. ステーション IP アドレスを記録します。

-
5. ステーション IP アドレスを Web ブラウザに入力します。

IPMI ポート経由でリモートサーバに接続した後、IPMI ログイン画面が表示されます。

6. [ユーザ名]フィールドにユーザ名を入力します。(デフォルトはADMIN)
7. [パスワード]フィールドにパスワードを入力します。(デフォルトはARCAADMIN)
8. ホームページが表示されます(IPMI メイン画面)。

9. 上部バーから [環境設定] オプションをクリックします。[環境設定]画面が表示されます。

10. [環境設定] サイドバーで [ユーザ] オプションをクリックします。
11. ユーザリストから [ユーザ: (ADMN)] を選択します。

12. [ユーザの変更]をクリックすると、[ユーザの変更]画面が表示されます。

13. ユーザ名を入力します。(ADMIN)

14. [パスワードの変更]チェックボックスを選択してパスワードを変更します。パスワードフィールドが有効になります。

15. 新しいパスワードを入力し、確認します。

16. [変更]をクリックすると、変更が保存されます。IPMI パスワードが変更されます。

IPMI ファームウェアをアップグレードする方法

Supermicro IPMI ユーティリティは、組織の要件に従って IPMI をアップグレードするのに役立ちます。

以下の手順に従います。

1. IPMI にログインし、[Maintenance]タブに移動して [Firmware Update] をクリックします。

[Firmware Update]画面が表示されます。

2. [Enter Update Mode]をクリックします。

[Message from webpage]ポップアップウィンドウが表示されます。

3. **[OK]**をクリックします。
[BIOS & IPMI download]画面が表示されます。
4. IPMI モデルのリビジョンに対応する **.zip** ファイルをクリックします。
ファイルがダウンロードされ、[Firmware Upload]画面が表示されます。
5. ダウンロードした **.zip** ファイルからファイルを抽出します。
6. [Firmware Upload]画面で **[Browse]**をクリックして、抽出されたファイルから **.bin** ファイルを選択します。
7. **[Upload Firmware]**をクリックします。
ファームウェアのイメージがアップロードされます。
8. **[Start Upgrade]**をクリックします。
ファームウェアのアップグレードが完了し、IPMI が再起動されます。
[Summary]画面で、アップグレードされたファームウェアのバージョンを確認できます。

第 11 章: アプライアンス サーバへのアプライアンス拡張 シェルフの接続

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

すべての利用可能なモデルのためのアプライアンス インフィールド 拡張	138
同梱されている内容	148
アプライアンス サーバへのアプライアンス拡張シェルフの接続方法	151
Arcserve UDP データストアの変更方法	160

すべての利用可能なモデルのためのアプライアンス インフィールド 拡張

モデル	現在の容量 \TB	拡張 セルフ 容量	現 在の SSD - GB	新 しい SSD 要件 GB	空 きス ロット 数	アドオンカー ド	説明
8100	4, 6	8 (6x2 TB ディス ク)	120	8 TB - 140	2, 3	LSI SAS 9200 -8E HBA Qlogic デュ アルポート HBA クアッド ポー ト 1G NIC デュアル ポート 10G SPF+ デュアル ポート 10G Copper インフィールド 拡張 - (MegaRAID SAS 9380- 8e)	<ol style="list-style-type: none"> 8100 モデル では、8 TB インフィールド 拡張のみ をサポートし ます。 8100 - 8 TB 拡張セルフ フには組み 込みおよび 事前設定 済みの SSD 240 GB が付 属していま す。 8100 には、 オプション ス ロット 2 およ び 3 がありま す。アプライ アンス イン フィールド 拡 張 / MegaRAID SAS 9380-8e のために、 空きスロット が 1 つ必要 です。

							<p>4. オプション スロットの両方にアドオンカードが挿入されている場合、インフィールド拡張を使用するため、少なくとも1つのスロット、好ましくはスロット3を空ける必要があります。</p> <p>5. アプライアンスと拡張シェルフの間ではSAS接続が使用されます。</p> <p>6. 8100 - 拡張シェルフにはRAID-6が搭載されています。</p> <p>7. 拡張シェルフにはデュアルPSUが搭載されています。</p> <p>8. 拡張シェルフを接続した後、拡張ガイドの「データパスの追加手順」に従い</p>
--	--	--	--	--	--	--	---

							<p>ます。</p> <p>9. 新しいSSDが必要な場合は、拡張ガイドの「新しいSSDへのハッシュステイネーションの移行」の手順に従います。</p>
8200	8, 12	<p>8 (6x2 TB ディスク) または 16 (6x4 TB ディスク)</p>	220	<p>8 TB - NA 16 TB - 280</p>	2, 3	<p>LSI SAS 9200 -8E HBA</p> <p>Qlogic デュアルポート HBA</p> <p>クアッド ポート 1G NIC</p> <p>デュアル ポート 10G SPF+</p> <p>デュアル ポート 10G Copper</p> <p>インフィールド 拡張 (MegaRAID SAS 9380- 8e)</p>	<p>1. 8200 モデルでは、8 TB または 16 TB のインフィールド 拡張をサポートします。クライアントは、いつでも 1 つだけ拡張シェルフに接続することができます。</p> <p>2. 8200 - 16 TB 拡張シェルフには組み込みおよび事前設定済みの SSD 480 GB が付属しています。</p> <p>3. 8200 には、オプション スロット 2 および 3 があります。アプライ</p>

							<p>アンス イン フィールド 拡 張 / MegaRAID SAS 9380-8e のために、 空きスロット が1つ必要 です。</p> <p>4. オプション ス ロットの両 方にアドオン カードが挿 入されている 場合、イン フィールド 拡張を使 用するた め、少なくと も1つのス ロット、好ま しくはスロッ ト 3 を空け る必要があ ります。</p> <p>5. アプライア ンスと拡張 シェルフの間 では SAS 接 続が使用さ れます。</p> <p>6. 拡張シエル フには RAID- 6 が搭載さ れています。</p> <p>7. 拡張シエル フにはデュア ル PSU が搭 載されてい</p>
--	--	--	--	--	--	--	--

							<p>ます</p> <p>8. 拡張シェルフを接続した後、拡張ガイドの「データパスの追加手順」に従います。</p> <p>9. 新しいSSDが必要な場合は、拡張ガイドの「新しいSSDへのハッシュステーションの移行」の手順に従います。</p>
8300	16,20,24,28,32,36,40	<p>8 (6x2 TB ディスク)</p> <p>または</p> <p>16 (6x4 TB ディスク)</p> <p>または</p> <p>40 (12x4 TB)</p>	480	<p>8 TB - NA</p> <p>16 TB - 560</p> <p>40 TB - 790</p>	2, 5, 6	<p>LSI SAS 9200 -8E HBA</p> <p>Qlogic デュアルポート HBA</p> <p>クアッドポート 1G NIC</p> <p>デュアルポート 10G SPF+</p> <p>デュアルポート 10G Copper</p> <p>インフィールド拡張 (MegaRAID SAS 9380-</p>	<p>1. 8300 モデルでは、8 TB、16 TB、または 40 TB のインフィールド拡張をサポートします。クライアントは、いつでも 1 つだけ拡張シェルフに接続することができます。</p> <p>2. 8300 - 16 TB / 40 TB 拡張シェルフには組み込みおよび事前</p>

						<p>設定済みの SSD 1.9 TB が付属しています。</p> <p>3. 8300 には、オプション スロット 2、5 および 6 があります。アプライアンス インフィールド 拡張 / MegaRAID SAS 9380-8e のために、空きスロットが 1 つ必要です。</p> <p>4. オプション スロットの両方にアドオンカードが挿入されている場合、インフィールド 拡張を使用するため、少なくとも 1 つのスロット、好ましくはスロット 2 を空ける必要があります。</p> <p>5. アプライアンスと拡張シェルフの間では SAS 接続が使用さ</p>
		ディスク			8e)	

							<p>れます。</p> <p>6. 拡張シェルフには RAID-6 (6x4 TB ディスク) が搭載されています。</p> <p>7. 拡張シェルフにはデュアル PSU が搭載されています。</p> <p>8. 拡張シェルフを接続した後、拡張ガイドの「データパスの追加手順」に従います。</p> <p>9. 新しい SSD が必要な場合は、拡張ガイドの「新しい SSD へのハッシュステイネーションの移行」の手順に従います。(アプライアンス 8300 を 40 TB アプライアンス拡張シェルフと接続する場合のみ、拡張</p>
--	--	--	--	--	--	--	--

							<p>シェルフではなくベースアプライアンスに設置する必要がある未接続の2TB SSDが1つあります。詳細については拡張ガイドを参照してください。</p>
8400	32,40,48,56,64,72,80	<p>8 (6x2 TB ディスク) または 16 (6x4 TB ディスク) または 40 (12x4 TB ディスク)</p>	1200	<p>8 TB - NA 16 TB - NA 40 TB - NA</p>	2, 5, 6	<p>LSI SAS 9200 -8E HBA Qlogic デュ アルポート HBA クアッド ポー ト 1G NIC デュアル ポート 10G SPF+ デュアル ポート 10G Copper インフィールド 拡張 (MegaRAID SAS 9380- 8e)</p>	<p>1. 8400 モデルでは、8 TB、16 TB、または40 TB のインフィールド拡張をサポートします。クライアントは、いつでも1つだけ拡張シェルフに接続することができます。</p> <p>2. 8400 - 追加のSSD は必要ありません。</p> <p>3. 8400 には、オプションスロット 2、5 および 6 があります。アプライアンスインフィールド拡張 /</p>

							<p>MegaRAID SAS 9380-8e のために、空きスロットが1つ必要です。</p> <p>4. オプション スロットの両方にアドオンカードが挿入されている場合、インフィールド 拡張を使用するため、少なくとも1つのスロット、好ましくはスロット 2 を空ける必要があります。</p> <p>5. アプライアンスと拡張シェルフの間では SAS 接続が使用されます。</p> <p>6. 拡張シェルフには RAID-6 が搭載されています。</p> <p>7. 拡張シェルフにはデュアル PSU が搭載されています。</p> <p>8. 拡張シェルフ</p>
--	--	--	--	--	--	--	---

								フを接続した後、拡張ガイドの「データパスの追加手順」に従います。
--	--	--	--	--	--	--	--	----------------------------------

同梱されている内容

箱には以下の項目が含まれています。

注：箱の中に入っているアイテムが破損していた場合、[Arcserve にお問い合わせ](#)ください。

- アプライアンス拡張シェルフ

注：アプライアンス拡張シェルフの容量は、拡張シェルフで利用可能なディスクの数に依存します。



- CVP M02 モジュール (CacheVault Power Module02) とケーブル



- MegaRAID SAS 9380-8e RAID Controller



- SAS ケーブル

2 つの SAS ケーブルは、アプライアンス拡張シェルフの MegaRaid Controller とアプライアンス サーバを接続するのに使用されます。



■ SSD (オプション)

注: アプライアンス 8300 の場合のみ、40 TB アプライアンス拡張に接続する必要があり、未接続の 2 TB SSD が 1 つあります。

アプライアンス サーバへのアプライアンス拡張シェルフの接続方法

以下の手順に従います。

1. アプライアンス拡張シェルフを準備し、アプライアンスサーバの近くに配置します。
2. *CacheVault Power Module02 (CVPM02)* を *MegaRAID Controller 9380-8e* に接続します。



3. すべての Arcserve UDP プランを一時停止します。Arcserve UDP コンソールを確認し、アプライアンスサーバ上で実行中のジョブがなく、すべてのプランが一時停止していることを確認します。
4. アプライアンスサーバの電源をオフにし、電源装置から電源コードを抜きます。

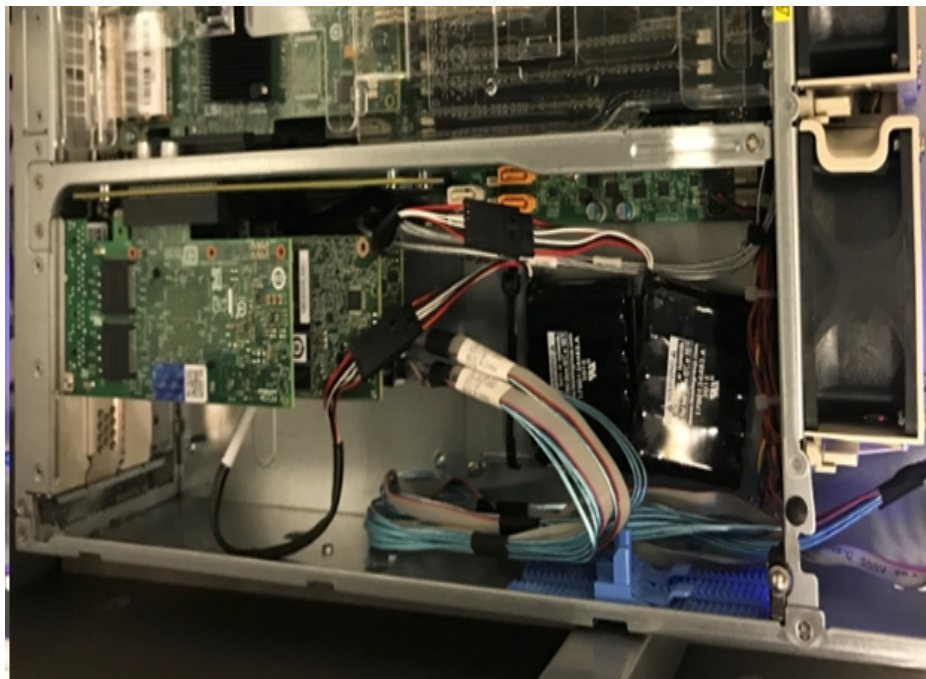
注：システムの損傷または感電のリスクを回避するには、電源装置からコンピュータを切断します。

5. アプライアンスサーバシャーシのカバーを取り外します。

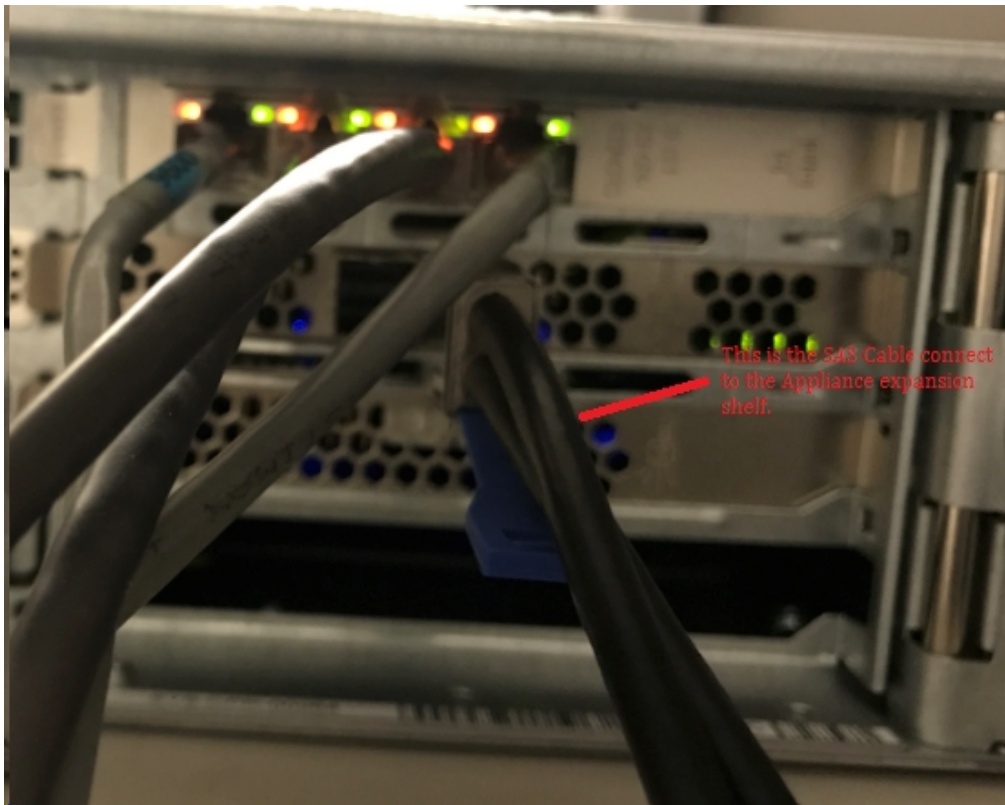
6. アプライアンスサーバの利用可能な PCI-e スロットに *MegaRAID Controller 9380-8e* を挿入します。

以下の手順に従います。

- a. 空いている PCI-e スロットを見つけます。
- b. コンピュータ背面の、空の PCIe スロットと合う空のブラケット パネルを取り外します。
- c. ネジがある場合は、ブラケットのネジを保存します。
- d. *MegaRAID Controller 9380-8e* を PCIe スロットに合わせます。
- e. 優しくじっくり押し込み、RAID コントローラを正しくスロットに取り付けます。



7. *MegaRAID Controller 9380-8e* ブラケットをシステムのシャーシに固定します。
8. アプライアンスサーバシャーシのカバーを再び取り付けます。
9. アプライアンスサーバの *MegaRAID Controller 9380-8e* と、アプライアンス拡張シェルフの *MegaRAID Controller* を、SAS ケーブルで接続します。

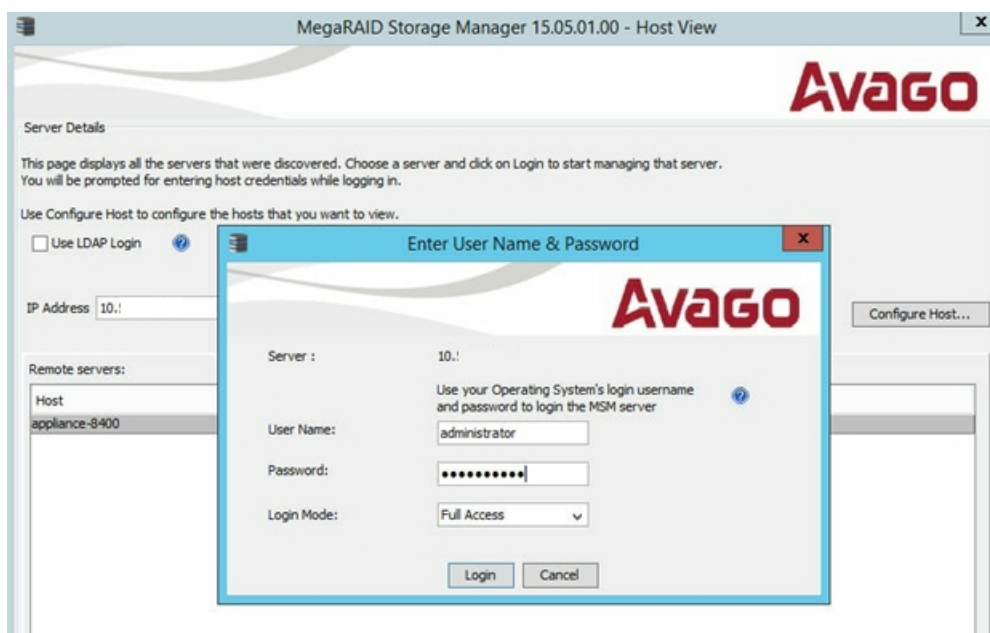


10. SSD を挿入します(アプライアンス 8300 + 40 TB 拡張シェルフのみ)。

注: アプライアンス 8300 に 40 TB アプライアンス拡張シェルフを接続している場合、アプライアンス 8300 の背面パネルの空いている SATA スロットに、2 TB SSD (アプライアンス拡張シェルフに同梱) を追加します。



11. アプライアンス拡張シェルフの電源を入れます。アプライアンス拡張シェルフの電源コードを接続し、アプライアンス拡張シェルフの電源を入れます。
12. アプライアンスサーバの電源を入れます。アプライアンスサーバの電源コードを再接続し、アプライアンスサーバの電源を入れます。
13. MegaRAID Storage Manager にログインします。アプライアンスサーバにログインし、MegaRAID Storage Manager を開いて、管理者認証情報を使用してログインします。

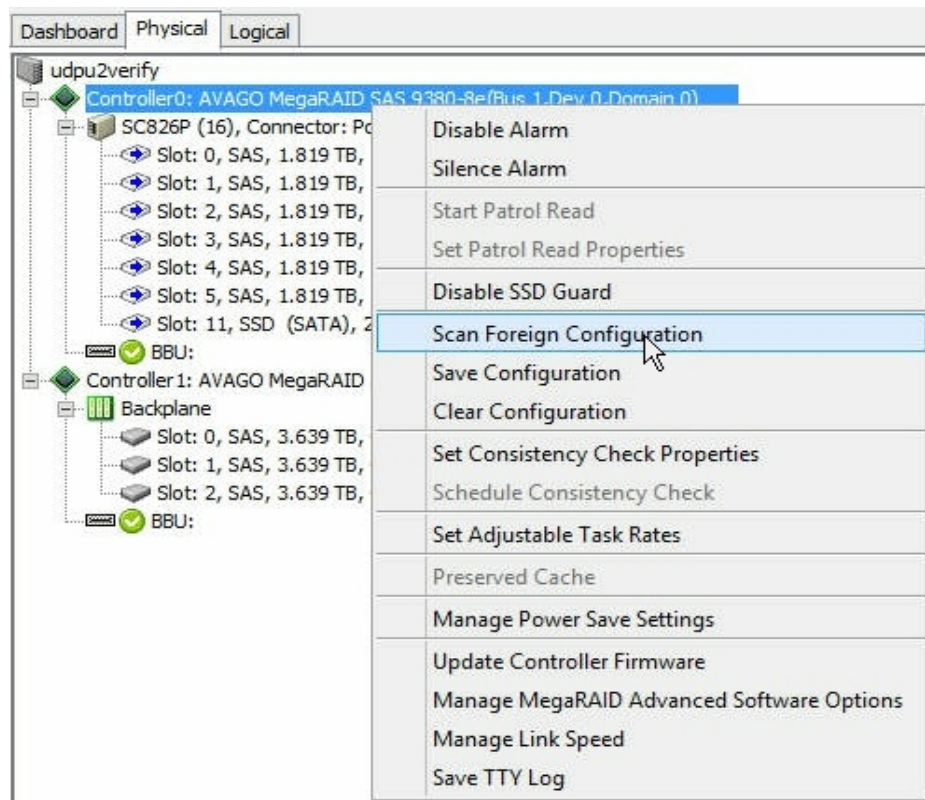


14. MegaRAID Storage Manager から RAID コントローラを確認します。

以下の手順に従います。

- a. [物理または論理] タブを開くと、2 つのコントローラが一覧表示されます。
- b. コントローラ 9380-8e を選択し、コントローラ 9380-8e に接続されているすべてのディスクがオンラインで、利用可能であることを確認します。

注: オンラインではないディスクがある場合、右クリックして [外部構成のスキャン] を選択します。



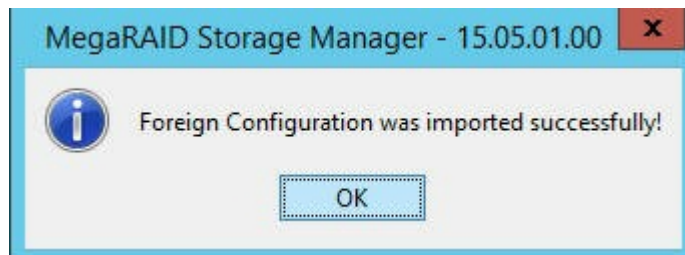
「Import the foreign drives (外部ドライブのインポート)」を選択し、
 「OK」をクリックします。



「はい」をクリックしてインポート処理を開始します。



[OK]をクリックします。



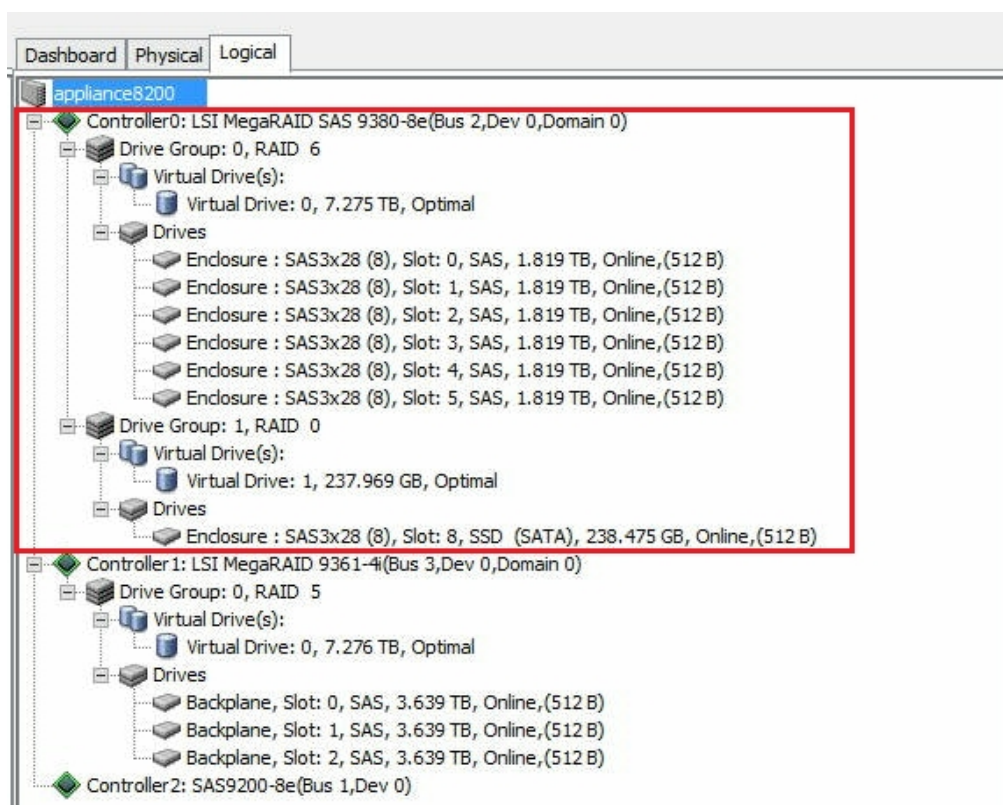
拡張シェルフ上のすべてのディスクドライブがオンラインになります。

論理]タブには、ディスクが RAID-6 で構成されていることや、拡張シェルフの他のモジュールについて、1つのSSDが RAID-0として設定されていることが確認でき、[SI MegaRAID SAS 9380-8e]の下に一覧表示されます。

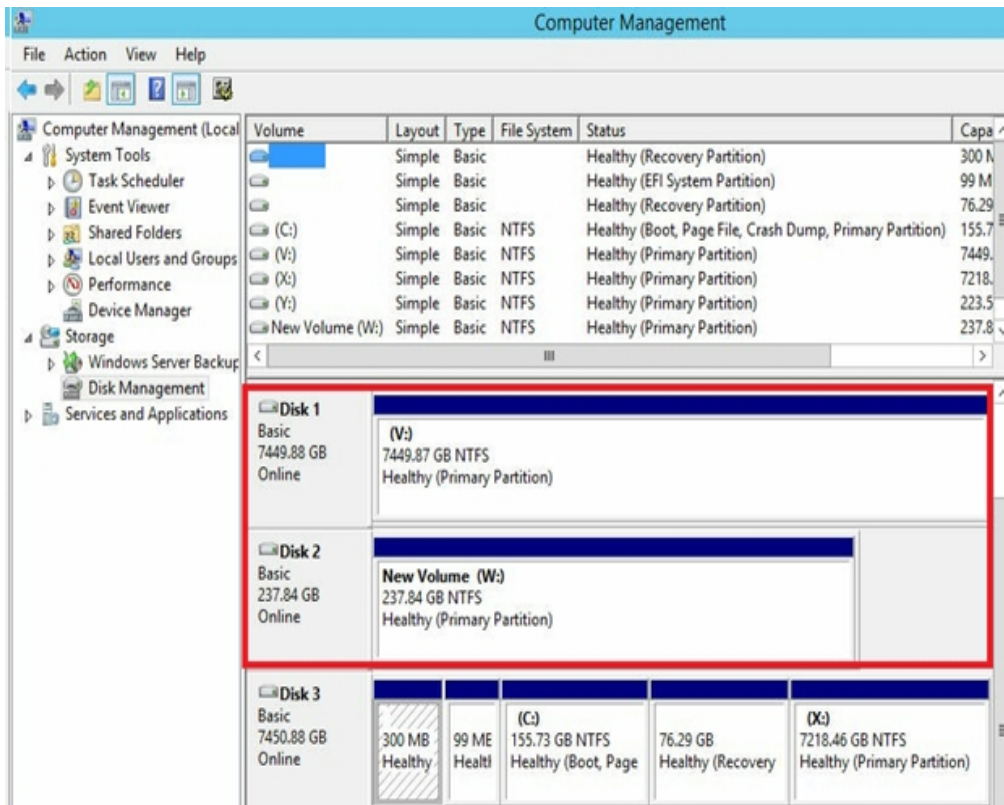
アプライアンスサーバ 8100 + 8 TB 拡張シェルフ

アプライアンスサーバ 8200 + 16 TB 拡張シェルフ

アプライアンスサーバ 8300 + 16 TB 拡張シェルフ



15. [ディスク管理]からディスクを確認します。[ディスク管理]を開き、アプライアンス拡張シェルフの組み込みディスクがフォーマットされていない場合、NTFSとしてフォーマットし、「V:」などのドライブ文字を指定します。SSDがフォーマットされていない場合も、NTFSとしてフォーマットし、「W:」などのドライブ文字を指定します。



アプライアンス拡張シェルフがアプライアンスサーバに正常に接続されました。

Arcserve UDP データストアの変更方法

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

- [拡張シェルフのデータパスを Arcserve UDP データストアに追加する](#)
- [新しい SSD へのハッシュ デスティネーションの移行](#)
- [Arcserve UDP コンソールからの <data store name> データストア全体の容量の確認](#)
- [Arcserve UDP コンソールからのすべてのプランの再開](#)

拡張シェルフのデータパスを Arcserve UDP データストアに追加する

以下の手順に従います。

1. 「V:\data」などのアプライアンス拡張シェルフ上のボリュームにフォルダを作成します。
2. データストアを停止し、以下のコマンドを使用して、データストアをアプライアンス拡張シェルフに拡張します。

```
as_gddmgr.exe -DataPath Add <data store name> -NewDataPath <new data folder>
```

```
as_gddmgr.exe -DataPath Display <data store name>
```

新しい SSD へのハッシュ デスティネーションの移行

注: この手順は、以下の拡張シェルフに新しい SSD を使用する場合にのみ、必要です。

- アプライアンス サーバ 8100 + 8 TB 拡張シェルフ
- アプライアンス サーバ 8200 + 16 TB 拡張シェルフ
- アプライアンス サーバ 8300 + 16 TB 拡張シェルフ
- アプライアンス サーバ 8300 + 40 TB 拡張シェルフ

以下の手順に従います。

1. 新しい SSD に、`W:\Arcserve\data_store\hash` などのハッシュフォルダを作成します。
2. データストア `<data store name>` が停止していることを確認します。停止していない場合、Arcserve UDP コンソールからデータストア `<data store name>` を停止します。
3. Arcserve UDP コンソールからデータストア `<data store name>` を変更し、ハッシュ デスティネーションを `W:\Arcserve\data_store\hash` に設定します。
4. データストアの変更を保存します。
5. Arcserve UDP コンソールからデータストア `<data store name>` を起動します。

Arcserve UDP コンソールからの <data store name> データストア全体の容量の確認

全体の容量は、アプライアンス サーバの容量に、アプライアンス拡張シェルフの容量を追加したものです。

Arcserve UDP コンソールからのすべてのプランの再開

Arcserve UDP コンソールからすべての一時停止プランを再開します。

第 12 章: トラブルシューティング

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

Linux バックアップ サーバにコンソールから接続できない	166
別のアプライアンスから UDP アプライアンスをバックアップすると重複するノードがレポートされる	167
Linux バックアップ サーバがネットワーク DNS サフィックスを取得できない	169
アプライアンスのデフォルトのタイムゾーン	170
ライセンスがある場合でもライセンスエラーになる	171

Linux バックアップ サーバにコンソールから接続できない

現象

Arcserve UDP コンソールから Linux バックアップ サーバに接続しようとする、接続に失敗して赤色のマークが表示されます。

解決策

Linux バックアップ サーバにコンソールから接続できない場合、接続のトラブルシューティングを行って問題を特定することができます。

接続の問題のトラブルシューティングを行う方法

1. Hyper-V マネージャを起動し、Linux バックアップ サーバの仮想マシンに接続してログインします。
2. 以下のコマンドを実行します。

```
service network restart
```

3. Linux バックアップ サーバに割り当てられている IP アドレスが 192.168.10.2 であることを確認します。確認するには、次のコマンドを実行します。

```
ifconfig
```

4. IP アドレスが 192.168.10.2 である場合は、Arcserve UDP コンソールに移動し、接続しようとしている Linux バックアップ サーバノードを更新します。
5. IP アドレスが 192.168.10.2 でない場合は、「DHCP Microsoft 管理コンソール (MMC) からのトラブルシューティング」の手順に従います。

DHCP Microsoft 管理コンソール (MMC) からのトラブルシューティング

重要: DHCP サーバ サービスが、アプライアンス上で適切に実行されていることを確認します。

1. [サーバ マネージャ]- [ツール]- [DHCP] から DHCP MMC を起動します。
2. Linux サーバノード、IPV4、スコープを展開し、192.168.10.0 という名前のスコープがその下に存在することを確認します。
3. [アドレスのリース] を展開し、他のリースレコードの存在を削除します。
4. Linux バックアップ サーバにログインし、以下のコマンドを実行します。

```
service network restart
```

5. Arcserve UDP コンソールに移動し、接続しようとしている Linux バックアップ サーバノードを更新します。

Linux バックアップ サーバにコンソールから接続できるようになりました。

別のアプライアンスから UDP アプライアンスをバックアップすると重複するノードがレポートされる

現象

アプライアンス A からアプライアンス B をバックアップすると、アクティビティ ログに以下の警告メッセージが表示されます。

「次のノードが重複しています: Appliance_B、Appliance_A。その結果、同じエージェント識別子を持ち、予期せぬ結果が生じる可能性があります。This duplicate node problem can be caused if the node was added using a different node name (such as the DNS name or IP address), or if some machines were set up by cloning from one to another.” (次のノードが重複しています: Appliance_B、Appliance_A。その結果、これらのノードに同じエージェント識別子が指定され、予期しない結果が生じる可能性があります。異なるノード名 (DNS 名や IP アドレスなど) を使用してノードが追加された場合や、別のマシンのクローンを作成してマシンがセットアップされた場合に、この重複ノードの問題が発生する可能性があります。)

ケース 1: アプライアンス B が RPS としてアプライアンス A の UDP コンソールに追加されます。

例: アプライアンス B から、UDP ウィザードを使用してアプライアンスを設定し、[このアプライアンスは、別の Arcserve UDP コンソールによって管理される Arcserve UDP 復旧ポイント サーバのインスタンスとして機能します]を選択できます。

解決策

1. UDP コンソールの [RPS] ペインからアプライアンス B のノード内のデータストアを停止します。
2. アプライアンス B にログインし、[HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\CA\ARCserve Unified Data Protection\Engine] の下にあるノード ID のレジストリキーを削除します。
3. アプライアンス B のノードから Arcserve UDP エージェント Web サービスを再起動します。
4. アプライアンス B のノードから Arcserve UDP RPS データストアサービスを再起動します。
5. UDP コンソールから、[ノード]- [すべてのノード] ペインに移動して、アプライアンス B のノードを更新します。
6. [復旧ポイント サーバ] ペインに移動して、アプライアンス B のノードを更新します。

7. アプライアンス B の RPS に元のバックアップ先を設定して、既存のデータストアをインポートします。

ケース 2: アプライアンス B がエージェント ノードとしてのみ、アプライアンス A の UDP コンソールに追加されます。

たとえば、あるプランでは、アプライアンス A の UDP コンソール上にあるエージェントベースのバックアップタスクを使用してアプライアンス B を保護します。

1. アプライアンス B にログインし、[HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Arcserve Unified Data Protection\Engine] の下にあるノード ID のレジストリキーを削除します。
2. アプライアンス B から Arcserve UDP エージェント サービスを再起動します。
3. UDP コンソールから、[ノード]- [すべてのノード] ペインに移動して、アプライアンス B からのノードを更新します。

Linux バックアップ サーバがネットワーク DNS サフィックス を取得できない

アプライアンス サーバに静的 IP アドレスを設定した場合、ネットワーク サービスを再起動した後に Linux バックアップ サーバがネットワーク DNS サフィックスを正しく取得できません。この問題によって、Linux バックアップ サーバと UDP コンソールの間の通信に問題が発生します。通信の問題により、この Linux バックアップ サーバを使用して Linux ノードを保護することができなくなります。

現象

Linux バックアップ サーバのステータスが、UDP コンソール上で切断状態のままになります。[ノードの更新]を実行しても Linux バックアップ サーバは正常に更新されず、黄色の警告アイコンは緑色に変化しません。この問題は、アプライアンス サーバに静的 IP アドレスを設定した場合に、Linux バックアップ サーバがネットワーク DNS サフィックスを正しく取得できないために発生します。

解決策

この問題を解決するには、Linux マシンの `file/etc/resolv.conf` を直接更新して正しい DNS サフィックスを追加します。

アプライアンスのデフォルトのタイムゾーン

現象

デフォルトのタイムゾーンが、最初にアプライアンスの電源をオンにしたときに選択した地域に関係なく、(UTC-08:00) 太平洋時間(米国およびカナダ)になります。

解決策

この問題を解決するには、Arcserve Backup アプライアンス ウィザードで **編集**]-**日付と時間**]をクリックして、タイムゾーンを変更します。

ライセンスがある場合でもライセンス エラーになる

ライセンスがある場合でもアプライアンスで発生するライセンス関連のエラーの詳細については、[リンク](#)を参照してください。

第 13 章: 推奨事項

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

ネットワーク構成に関する推奨事項	173
Arcserve UDP コンソールの移行に関する推奨事項	176
データを保持しないベアメタル復旧 (BMR) に関する推奨事項	178
データを保持するベアメタル復旧 (BMR) に関する推奨事項	193
Linux 移行ツールに関する推奨事項	201
アプライアンスイメージ設定ユーティリティツールを設定するための推奨事項	203
Arcserve UDP アプライアンスに事前インストールされている Linux バックアップ サーバに関する推奨事項	206
Arcserve UDP アプライアンスに Linux のバックアップサーバ自体をバックアップさせるための推奨事項	208
Arcserve UDP アプライアンスからアプライアンスへの移行の推奨事項	212
解決策 1	213
解決策 2	217
ローカルアプライアンス Hyper-V に対する Arcserve UDP Linux インスタント VM ジョブの推奨事項	220
リモートで管理される RPS ヘレプリケートタスクを別のアプライアンスに追加するベストプラクティス	221
モニタが別のアプライアンスである仮想スタンバイ (VSB) タスクを実行するベストプラクティス	223

ネットワーク構成に関する推奨事項

- 複数のネットワーク インターフェースを実稼働環境で接続する場合は、各ネットワーク アダプタが異なるサブ ネットワークに接続されていることを確認します。
- 保護する実稼働環境で Linux ノードが利用できない場合は、アプライアンス上の VM Linux-BackupSvr、DHCP サーバ サービスおよび RRAS を無効化することをお勧めします。

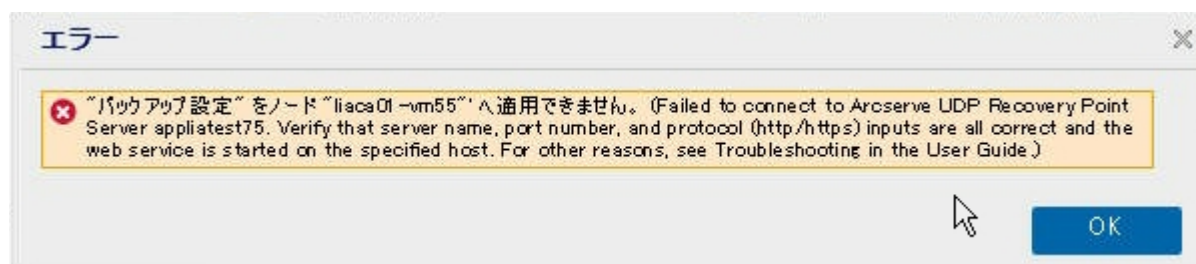
詳細については、アプライアンス ユーザ ガイドの「[DHCP サーバを無効にする方法](#)」を参照してください。

- アプライアンスとエージェント ノードがネットワーク上でオンラインのときに、アプライアンスとエージェント ノード間の接続の問題が発生した場合。アプライアンスで同じサブ ネットワークに接続されたネットワーク インターフェースが複数ある場合、問題が発生します。

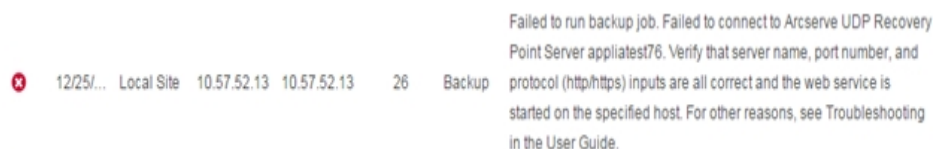
現象

アプライアンスとエージェント ノードの両方が同じサブ ネットワークでオンラインの場合以下の事象が発生することがあります。

- ◆ Arcserve UDP コンソールで、エージェント ノードにプランを展開すると、以下のエラー メッセージが表示されます。



- ◆ 以下のようにエージェント ノードのバックアップ ジョブが失敗します。



- ◆ アプライアンスからエージェント ノードに ping を送信し、次のようにエージェント ノードが接続されているかどうかを確認します。

```
C:\Users\Administrator> ping 10.57.52.13

10.57.52.13 に ping を送信しています 32 バイトのデータ:
10.57.52.13 からの応答: バイト数 =32 時間 <1ms TTL=128
10.57.52.13 からの応答: バイト数 =32 時間 <1ms TTL=128
10.57.52.13 からの応答: バイト数 =32 時間 <1ms TTL=128
10.57.52.13 からの応答: バイト数 =32 時間 <1ms TTL=128
```

- ◆ エージェント ノードから ping アプライアンス ホスト名を実施し、アプライアンスは以下のように接続されていません。

```
C:\Users\Administrator>ping appliatest76

appliatest76 [10.57.52.47]に ping を送信しています 32 バイトのデータ:
要求がタイムアウトしました。
要求がタイムアウトしました。
要求がタイムアウトしました。
要求がタイムアウトしました。

10.57.52.47 の ping 統計:
   パケット数: 送信 = 4、受信 = 0、損失 = 4 (100% の損失)
```

解決策

アプライアンスとエージェント ノードの間の接続の問題を解決するには、以下の手順のいずれかを実行します。

- ◆ 実稼働環境で Linux ノードが利用できない場合、アプライアンス上の DHCP サーバサービスおよび RRAS サービスを停止し、問題が解決されるかどうかを確認します。

詳細については、アプライアンスユーザガイドの「[DHCP サーバを無効にする方法](#)」を参照してください。

- ◆ アプライアンスおよびエージェント ノードで、以下の手順を実行します。

アプライアンスで実行する手順

1. DOS コマンド プロンプトから `ipconfig/all` を実行し、アプライアンス上で利用可能な IPv4 アドレスを取得します。
2. DOS コマンド プロンプトから `Route Print` を実行し、IPv4 ルートテーブルを取得し、以下のように、アプライアンス上で利用可

能なすべての IPv4 アドレスの順番のリストを記録します。

```
IPv4 ルート テーブル
=====
アクティブ ルート:
ネットワーク宛先      ネットマスク      ゲートウェイ      インターフェイ
ス メトリック
-----
0.0.0.0                0.0.0.0           10.57.52.1        10.57.52.46     10
0.0.0.0                0.0.0.0           10.57.52.1        10.57.52.35     10
0.0.0.0                0.0.0.0           10.57.52.1        10.57.52.45     10
0.0.0.0                0.0.0.0           10.57.52.1        10.57.52.47     10
-----
10.57.52.0            255.255.255.0     リンク上          10.57.52.46     266
10.57.52.0            255.255.255.0     リンク上          10.57.52.35     266
10.57.52.0            255.255.255.0     リンク上          10.57.52.45     266
```

エージェント ノードで実行する手順

1. DOS コマンド プロンプトから、次のように、エージェント ノードに接続しているアプライアンスの最初の IPv4 を取得するため、上記の順序に従って、アプライアンスの利用可能な各 IPv4 アドレスに ping を送信してみます。

```
C:\Users\Administrator>ping 10.57.52.46

10.57.52.46 に ping を送信しています 32 バイトのデータ:
10.57.52.46 からの応答: バイト数 =32 時間 <1ms TTL=128
10.57.52.46 からの応答: バイト数 =32 時間 <1ms TTL=128
10.57.52.46 からの応答: バイト数 =32 時間 <1ms TTL=128
10.57.52.46 からの応答: バイト数 =32 時間 <1ms TTL=128
```

2. ファイル `C:\Windows\System32\drivers\etc\hosts` を編集し、上記で取得した IPv4 アプライアンス ホスト名 ペアのレコードを追加して、ファイルを保存します。

Arcserve UDP コンソールの移行に関する推奨事項

Arcserve UDP アプライアンスでは、*ConsoleMigration.exe* を使用して、Arcserve UDP コンソールを別のアプライアンスに移行することができます。Arcserve UDP v6.5 Update 2 以降では、アプライアンスに属していない場合でも、任意の2つの Arcserve UDP コンソール間で Arcserve UDP コンソールを移行できます。

BackupDB および RecoverDB 用の *ConsoleMigration.exe* を使用します。以下のスクリーンショットは、*ConsoleMigration.exe* の使用方法を示しています。

```
C:\Program Files\Arcserve\Unified Data Protection\Management\BIN\Appliance>ConsoleMigration.exe
Usage: ConsoleMigration.exe <-BackupDB|-RecoverDB>
  -BackupDB: Backup UDP Console database Arcserve_APP
  -RecoverDB: Recover UDP Console database Arcserve_APP
```

移行プロセスを完了するには、以下の手順を実行します。

1. 古い Arcserve UDP コンソールで、Arcserve UDP データベースのバックアップを実行します。

```
C:\Program Files\Arcserve\Unified Data Protection\Management\BIN\Appliance>ConsoleMigration.exe
-BackupDB

Backed up DB and version files completed.

DB and version files were created at "C:\Program Files\Arcserve\Unified Data
Protection\Management\BIN\Appliance\DB_Migration".
```

[DB_Migration] フォルダが正常に作成します。

2. 新しい Arcserve UDP コンソールで、[DB_Migration] フォルダを次のパスにコピーします。

```
<UDP_Home> \Management\BIN\Appliance\
```

3. 新しい Arcserve UDP コンソールが Arcserve UDP アプライアンスの場合、ホスト名を変更してシステムを再起動し、アプライアンスウィザードを使用してアプライアンス設定を終了します。

注： Arcserve UDP コンソールが Arcserve UDP アプライアンスではない場合、この手順をスキップします。

4. 新しい Arcserve UDP コンソールで、以下の画面に示される手順を実行して、Arcserve UDP コンソールデータベースを復旧させます。データベースのリカバリプロセスが完了したら、新しい Arcserve UDP コンソールのノードが更

新されます。ノードの更新に失敗した場合は、C:\Program Files\Arcserve\Unified Data Protection\Management\BIN\Appliance\DB_Migration\logs パスの下にある *DisconnectedNodesInfo-<mm-dd-yyyy>.txt* ファイルに切断されたノードが記録されます。切断されているノードは新しい Arcserve UDP コンソールから手動で更新できます。

```
C:\Program Files\Arcserve\Unified Data Protection\Management\BIN\Appliance>ConsoleMigration.exe -RecoverDB
Are you sure you want to recover the backup DB file? <y/n>: y
Stopping Arcserve UDP management service, please wait...
Recovering backup DB file...
Updating nodes, please wait...
Please update nodes manually from UDP console, if you still encounter disconnected nodes.
The disconnected nodes(if exist) will be saved at "C:\Program Files\Arcserve\Unified Data Protection\Management\BIN\Appliance\DB_Migration\logs".
Console migration completed. Console use DB "localhost\ARCserve_APP".
```

注： Arcserve UDP コンソールで、ローカル サイト以外のサイトが存在する場合、*NewRegistrationText.txt* ファイルに記載されている手順に従い、サイトを再登録します。

新しい Arcserve UDP コンソールへの Arcserve UDP コンソールの移行が正常に完了しました。

このツールを使用して、リモート SQL データベースと接続している Arcserve UDP コンソールについて、コンソール移行を実行することができます。移行が完了すると、移行された Arcserve UDP コンソールは同じリモート SQL データベースに接続されるように設定されます。

注： Arcserve UDP v6.5 Update 4 では、*ConsoleMigration.exe* コマンドに *-force* オプションが導入されました。このオプションを使用すると、以下の条件で、復旧用バックアップ データベース ファイルのターゲット コンソールへの移行が強制されます。

1. ソース コンソールで SQL Server Enterprise エディションを使用しており、ターゲット コンソールで SQL Server Express エディションを使用している 2 つのコンソール間で、コンソールの移行を実行する必要がある場合。この場合、ソース UDP コンソールで必要なデータベースの最小サイズは 4000 MB です。
2. SQL Server データベースの新しいバージョンを使用するコンソールから SQL Server データベースの古いバージョンを使用するコンソールへコンソールの移行を実行する必要がある場合。たとえば、SQL Server 2016 を使用するコンソールから SQL Server 2014 を使用するコンソールへの移行です。

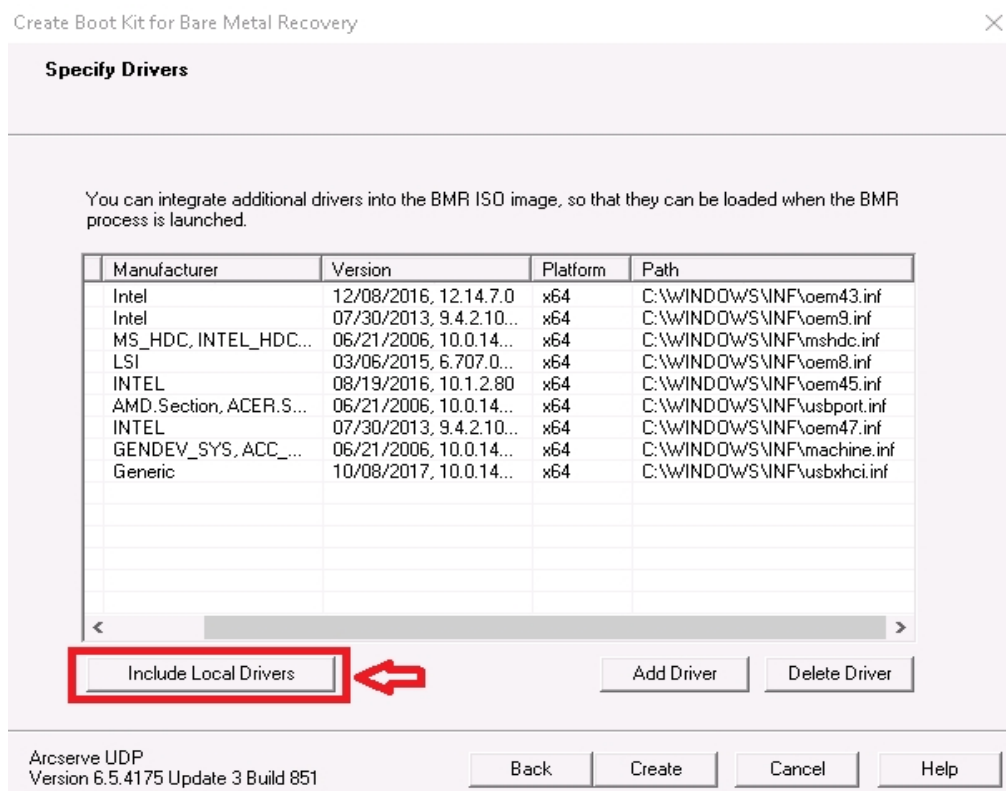
データを保持しないベアメタル復旧 (BMR) に関する推奨事項

Arcserve UDP アプライアンス上で、Arcserve UDP ブートキットを使用してベアメタル復旧を実行できます。

以下の手順に従います。

1. アプライアンスで Arcserve UDP ブートキット ウィザードを実行し、x64 プラットフォームでブート可能な BMR ISO イメージまたは USB スティックを生成します。

注: ISO イメージにはローカルドライバを含める必要があります。ローカルドライバを含めるには、[ベアメタル復旧用のブートキットの作成]ウィンドウで [ローカルドライバを含む] オプションを選択します。ブートキットの作成方法の詳細については、この[リンク](#)を参照してください。



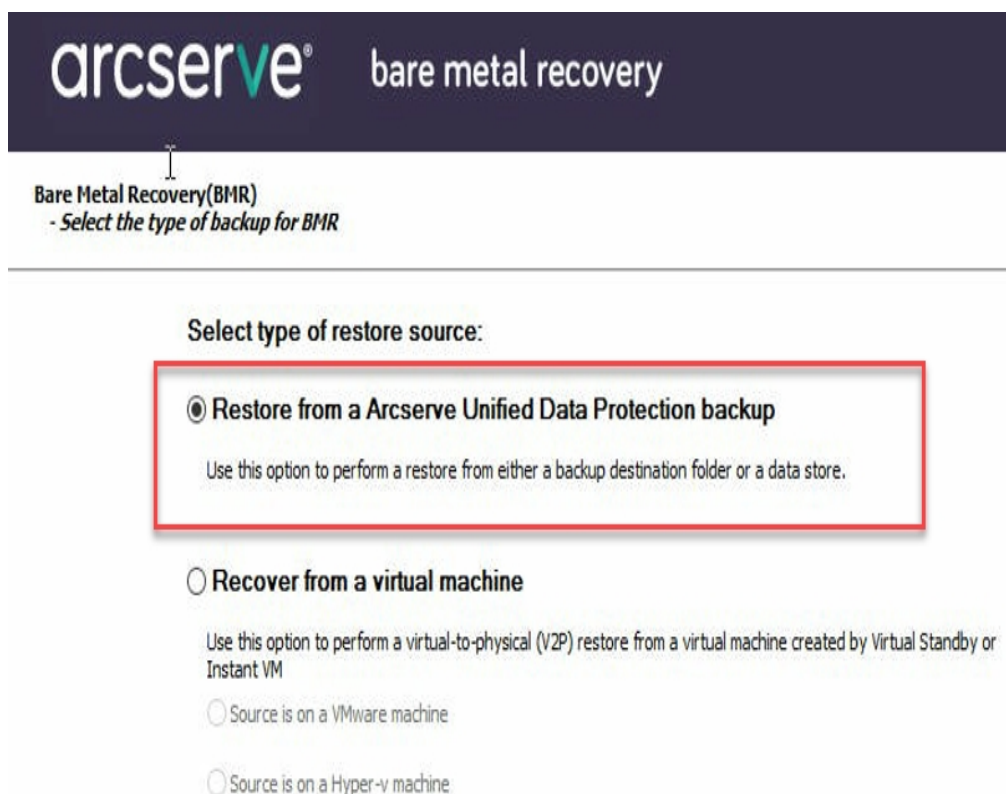
2. BMR ISO イメージまたは USB スティックを使用して Arcserve UDP アプライアンスを起動します。

Arcserve ベアメタル復旧のセットアップ画面が表示されます。

3. 必要な言語を選択して、[次へ]をクリックします。

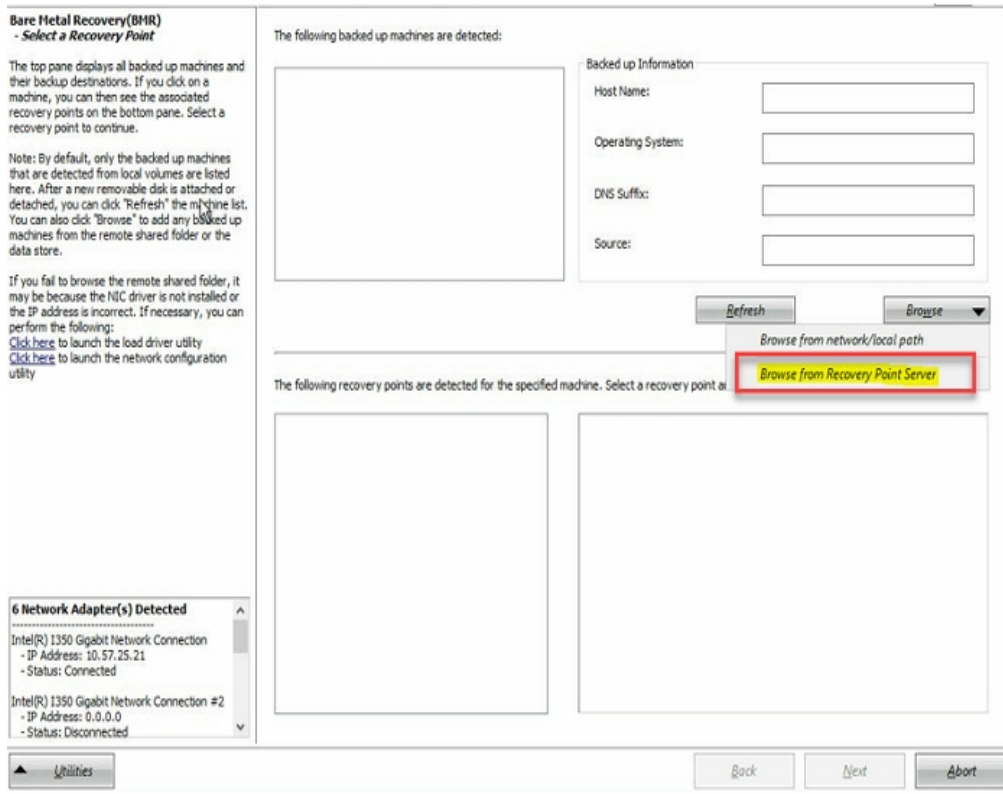


4. [Arcserve Unified Data Protection のバックアップからのリストア]オプションを選択し、[次へ]をクリックします。



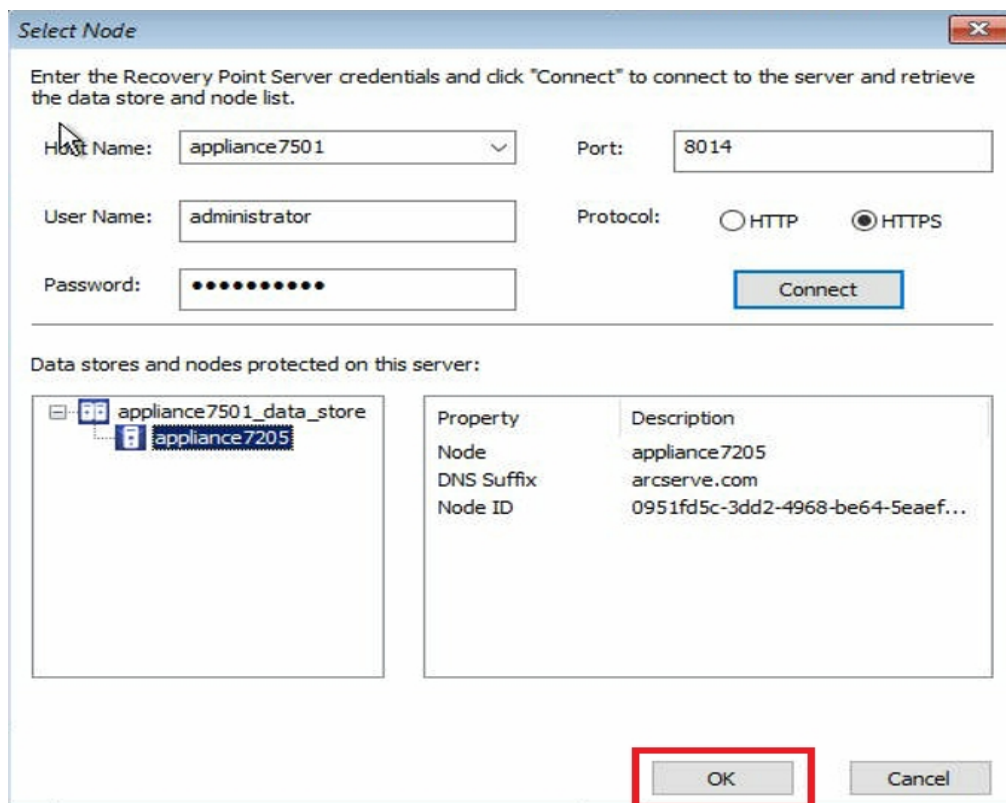
復旧ポイントの選択]ウィザードのウィンドウが表示されます。

5. **参照** をクリックして、**復旧ポイント サーバから参照** を選択します。



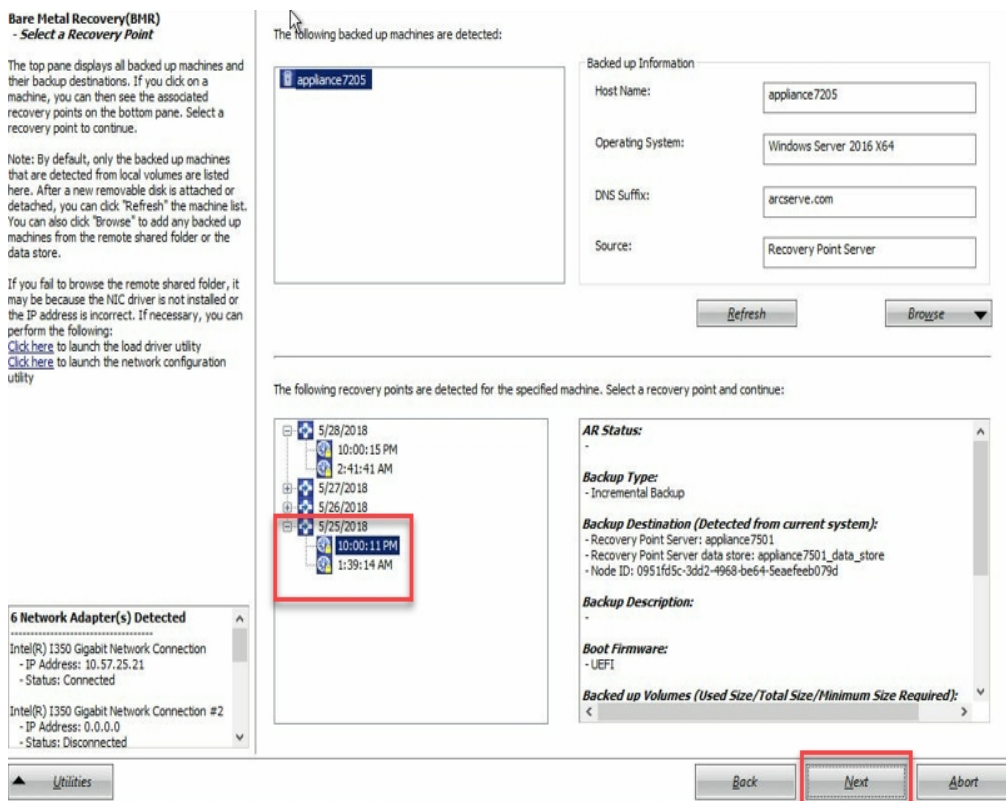
ノードの選択 ウィンドウが表示されます。

6. 復旧ポイント サーバのホスト名、ユーザ名、パスワード、ポート、およびプロトコルを入力します。
7. **接続** をクリックします。
8. 接続が確立されたら、**OK** をクリックします。

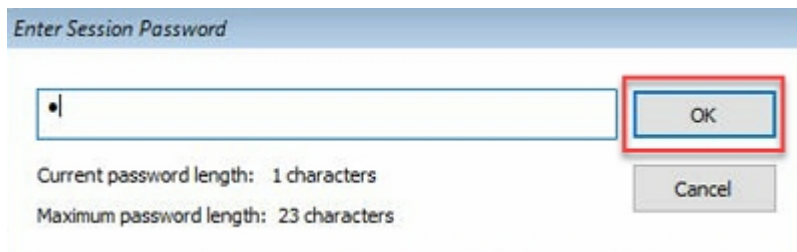


「ペアメタル復旧(BMR) - 復旧ポイントの選択」ダイアログボックスが表示されます。

- リストアする復旧ポイントを選択して、「次へ」をクリックします。

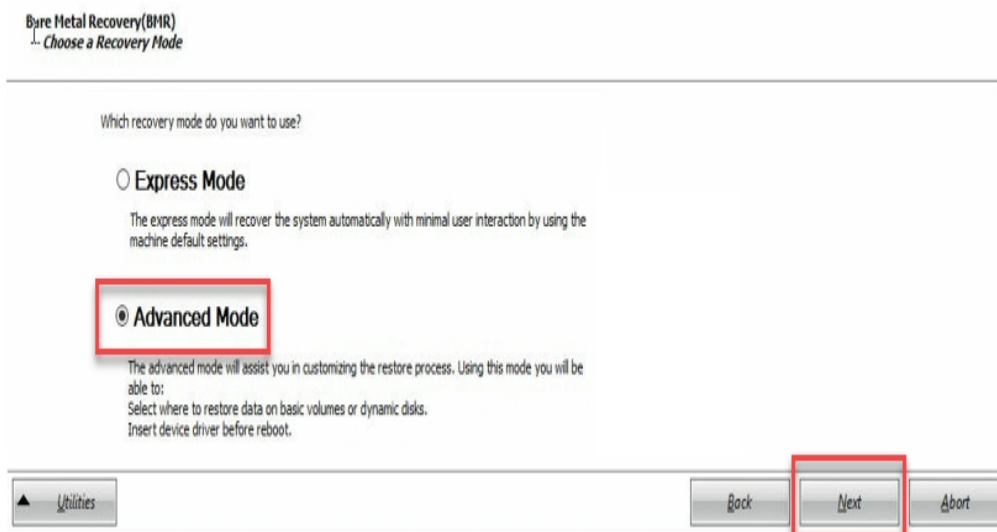


10. (オプション) 要求された場合はセッションパスワードを入力し、[OK]をクリックします。



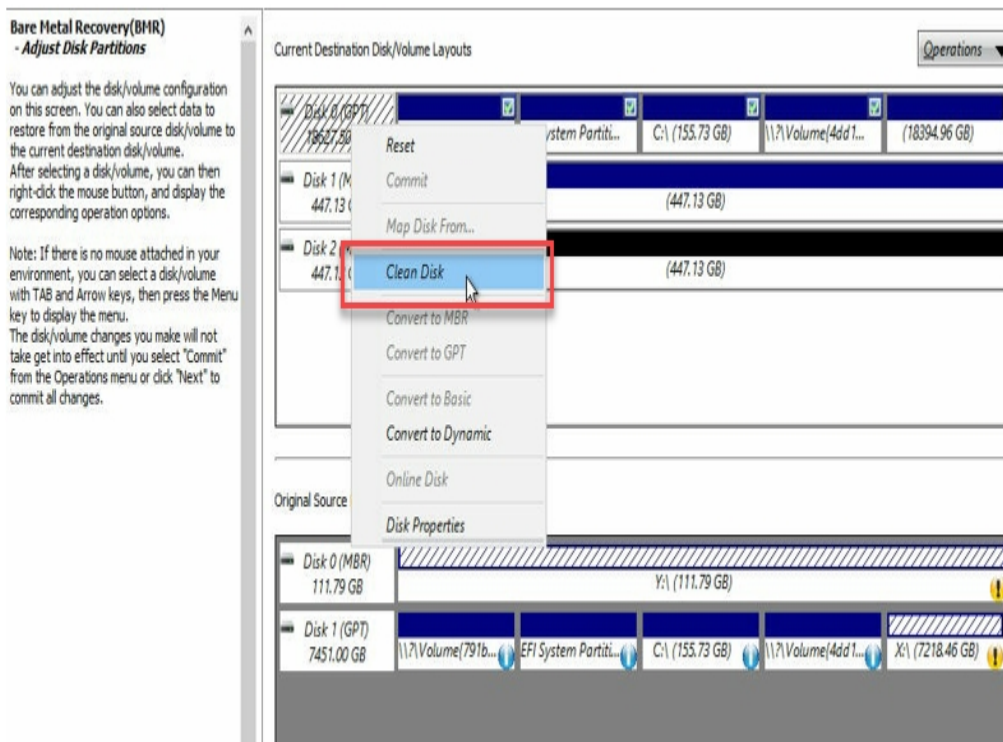
[ベアメタル復旧 (BMR) - 復旧モードの選択] ダイアログボックスが表示されます。

11. [拡張モード] を選択し、[次へ] をクリックします。

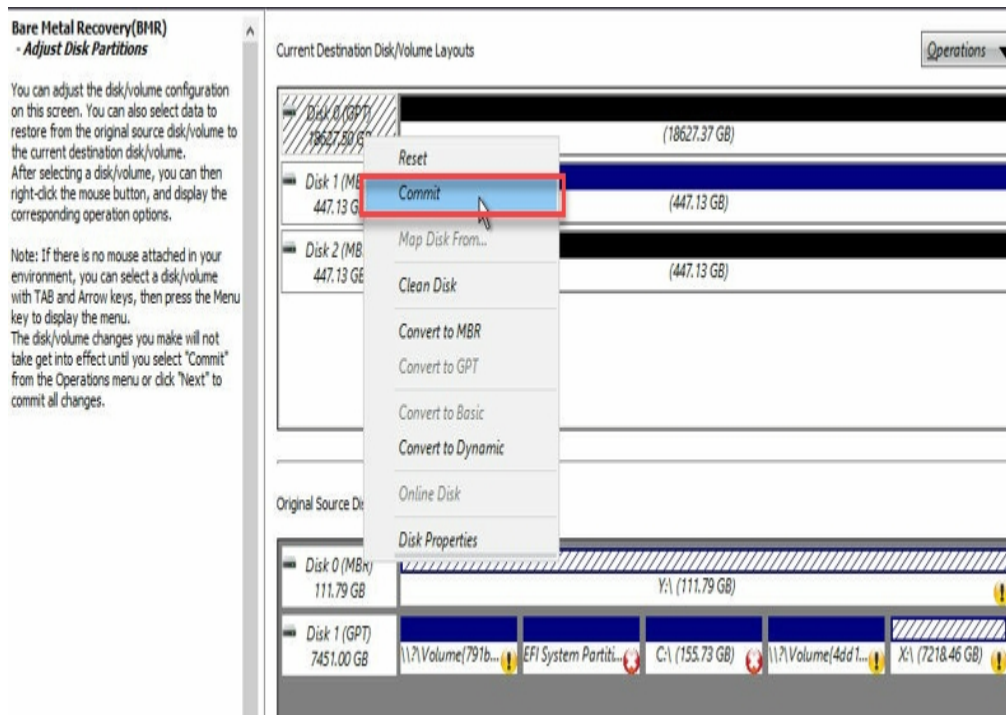


「ベアメタル復旧 (BMR) - ディスクパーティションの調整」ダイアログボックスが表示されます。

12. 使用可能な最大の GUID パーティション テーブル (GPT) ディスクを右クリックし、「ディスクの消去」をクリックします。

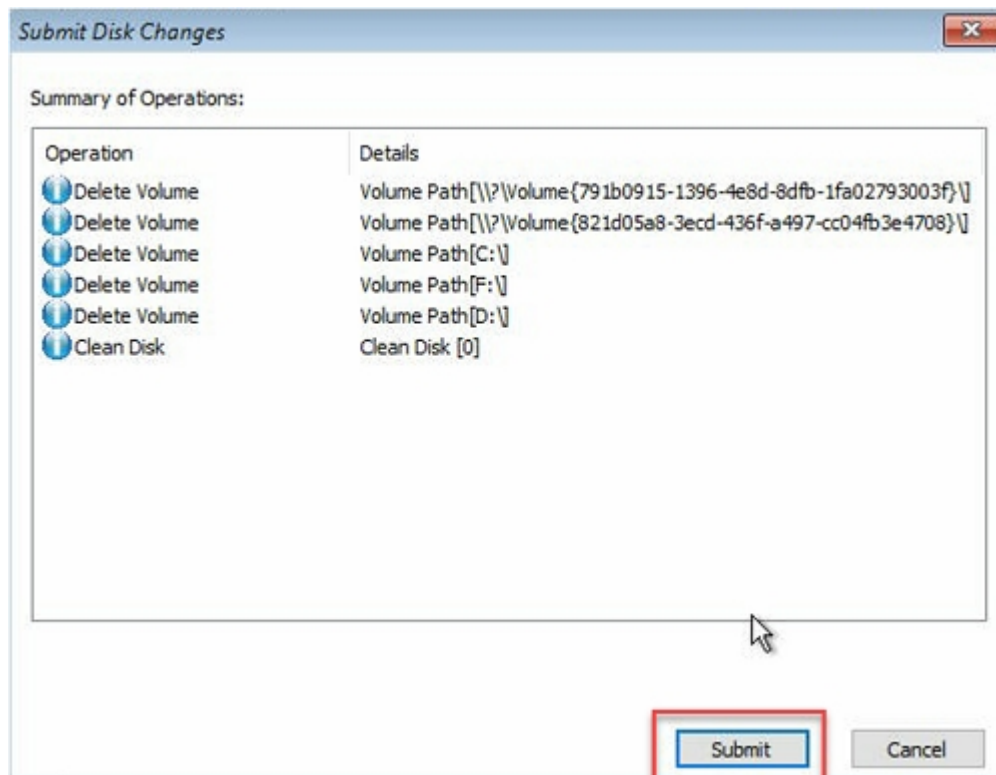


13. ディスクを消去した後、同じディスクを右クリックして「コミット」をクリックします。

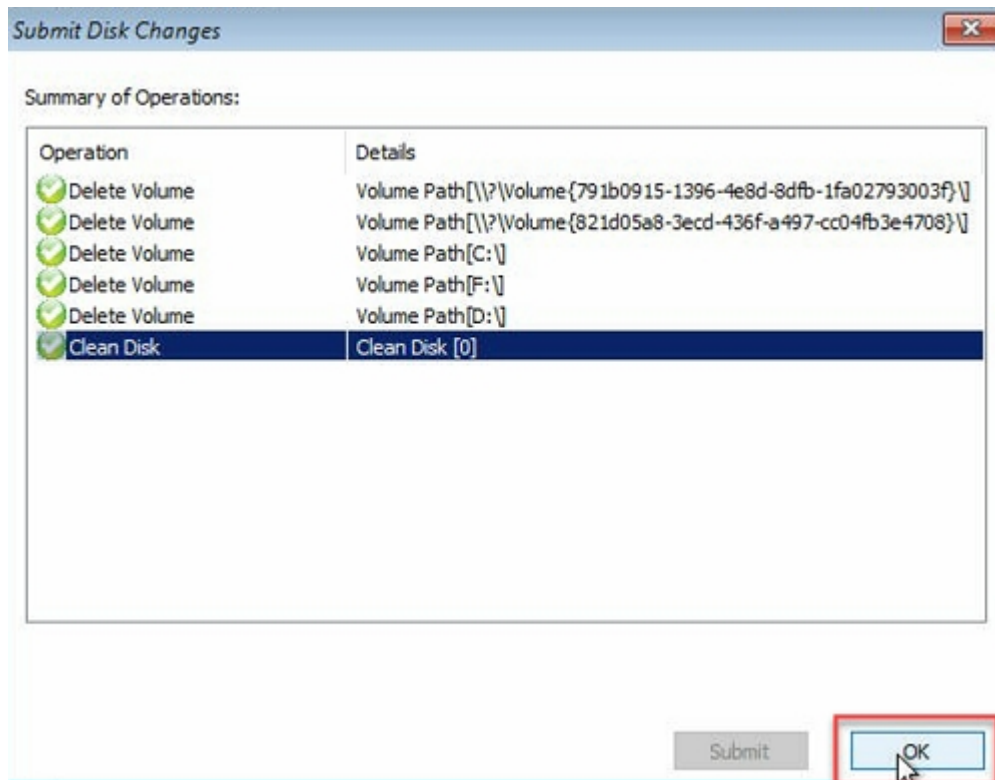


「ディスク変更のサブミット」ウィンドウが表示されます。

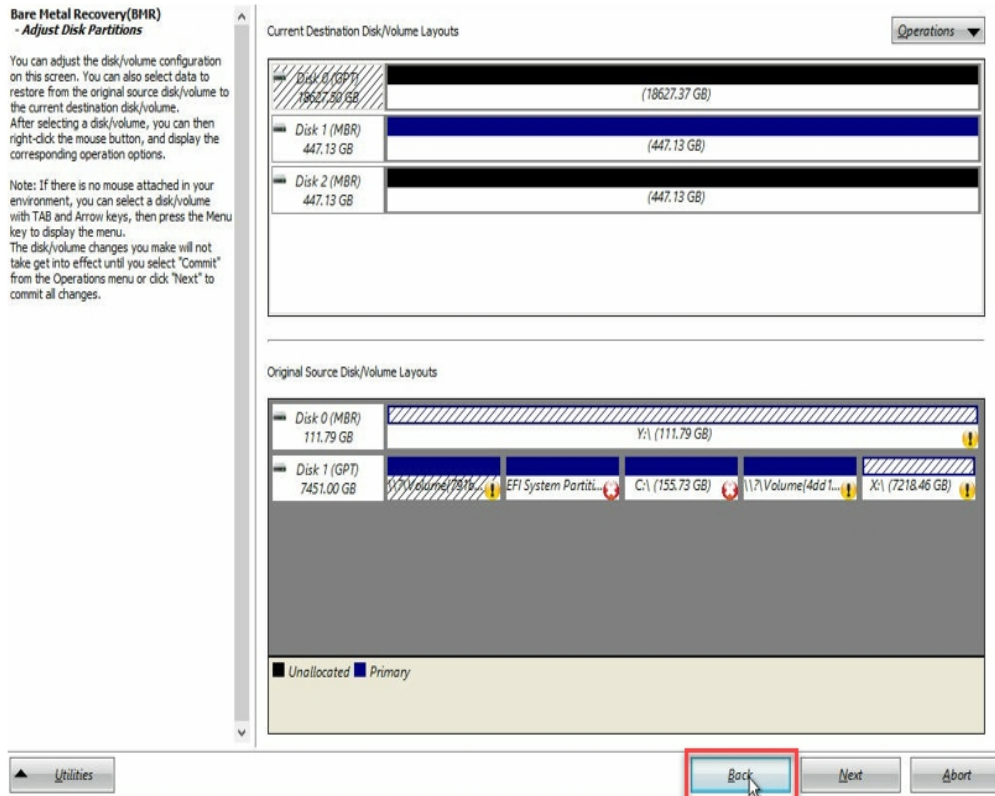
14. 「サブミット」をクリックします。



15. ディスクの消去が完了したら、[OK]をクリックします。

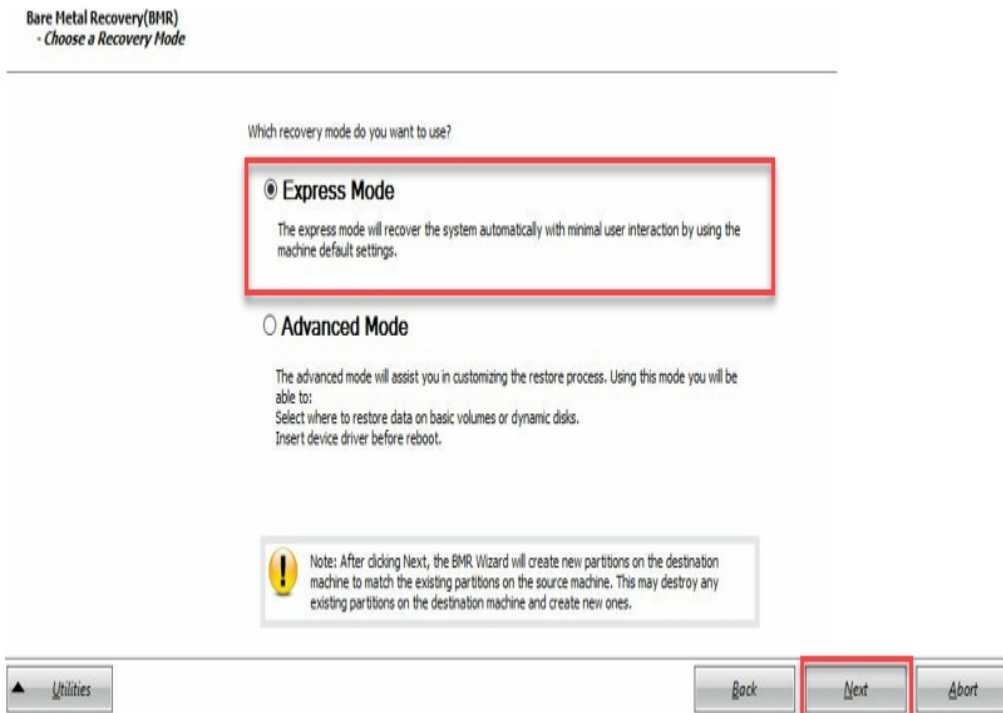


16. [ベアメタル復旧 (BMR) - ディスクパーティションの調整] ダイアログボックスで [戻る] をクリックします。



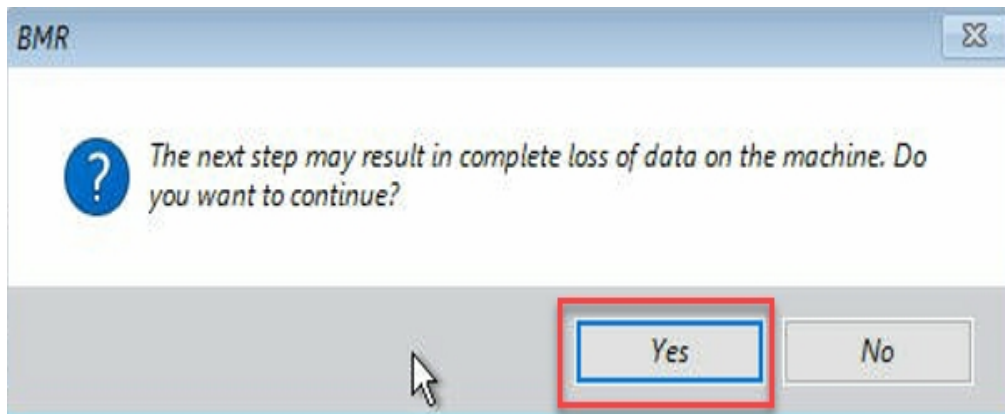
[ペアメタル復旧 (BMR) - 復旧モードの選択] ダイアログボックスが表示されます。

17. [高速モード] を選択し、[次へ] をクリックします。



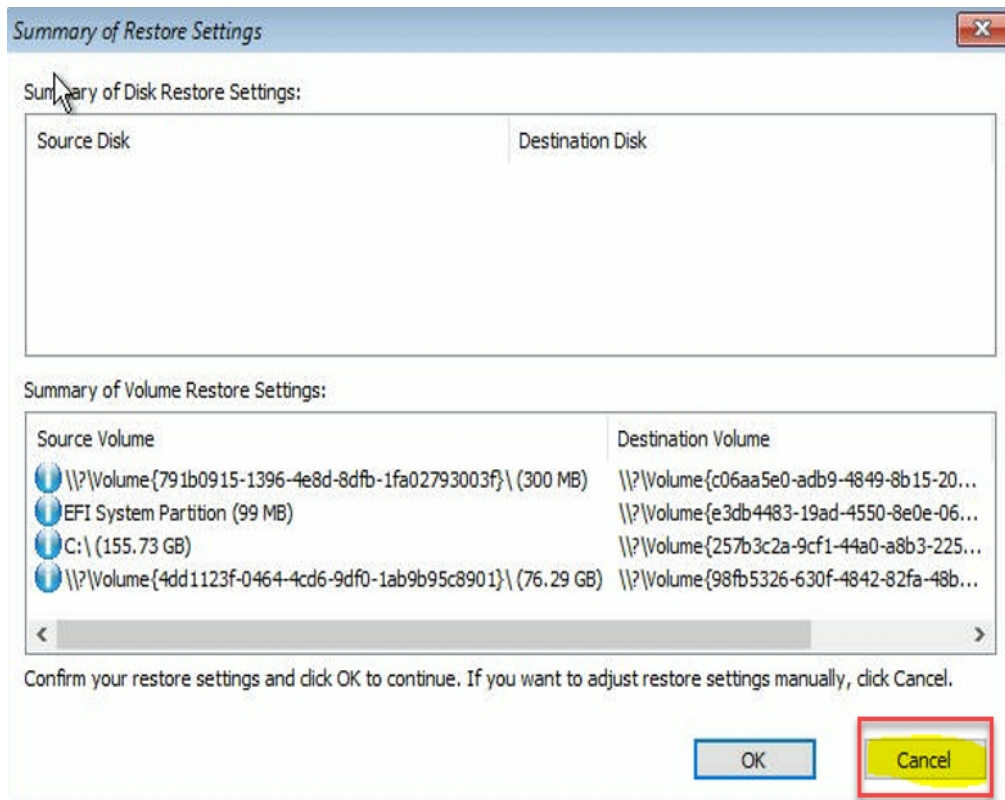
[BMR]ダイアログ ボックスが表示されます。

18. [はい]をクリックします。



[リストア設定のサマリ]ダイアログ ボックスが表示されます。

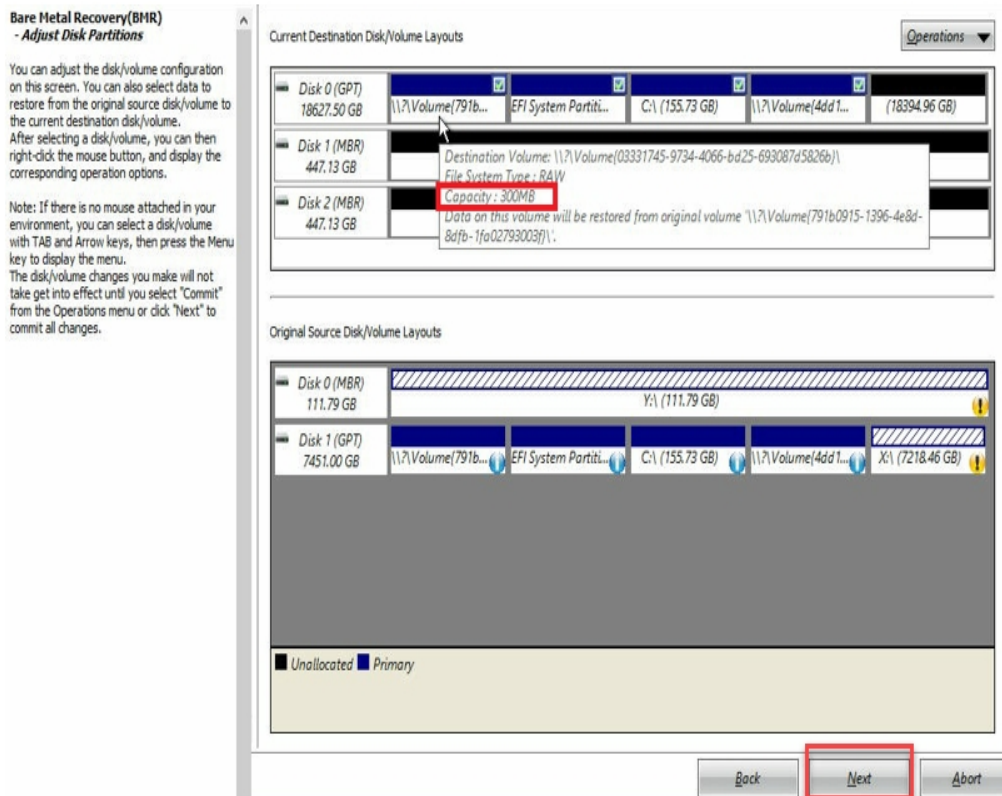
19. [キャンセル]をクリックします。



[ベアメタル復旧 (BMR) - ディスクパーティションの調整] ダイアログボックスが表示されます。

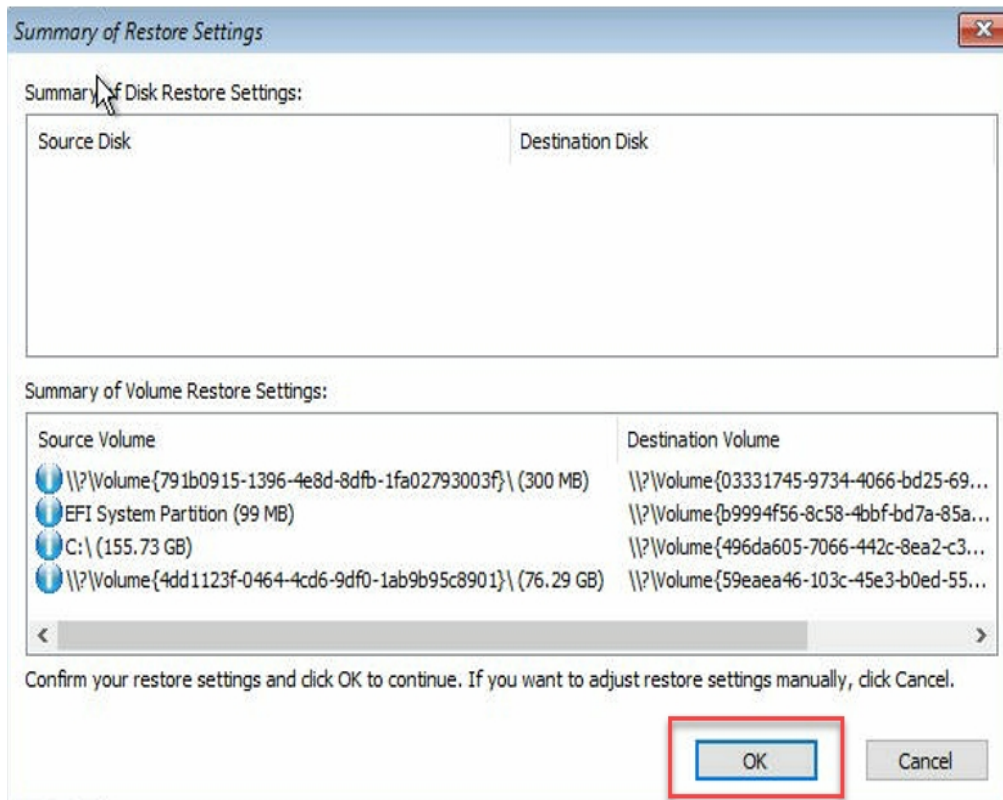
20. [現在のデスティネーション ディスク/ボリュームのレイアウト] タブで使用可能な最初の 4 つのパーティションの容量が、[元のソース ディスク/ボリュームのレイアウト] タブで使用可能な最大の GPT ディスクと一致するかどうかを比較して確認し、[次へ] をクリックします。

注：パーティションのサイズを表示するには、ディスクの上にマウスカーソルを移動させて、ディスクプロパティを表示します。



[リストア設定のサマリ]ダイアログ ボックスが表示されます。

21. [OK]をクリックします。



Bare Metal Recovery(BMR)- Start Recovery Process (ベアメタル復旧 (BMR) - 復旧プロセスの開始)]ダイアログ ボックスが表示されます。

22. **再起動後にエージェント サービスを自動的に開始しない**]オプションをオフにして、リストアの完了を待ちます。

Bare Metal Recovery(BMR)
- Start Restore Process

This page displays a summary of the disk/volume restore settings that you have made.

Note: After the BMR process is complete and server has been rebooted, you may not want to perform backup jobs from this server. If you are just testing the BMR functionality, we recommend that you select the "Do not start Agent service automatically after reboot" option. When you select this option, you can manually start the Agent service (and the Recovery Point Server service, if installed) after reboot if you want to perform backup jobs.

Enable Windows F8 boot option helps user perform further recovery or troubleshooting after BMR. For example, press F8 and boot into Active Directory Service Restore mode to perform Active Directory authoritative restore.

Summary of Restore Settings

Restore Item	Status	Progress	Throughput
Restore source volume '\\?\Volume{791b0915-1396-4e8d-8dfb-1fa02793003f}\...' ...	Completed	100.0%	367.44 MB/Minute
Restore source volume 'EFI System Partition' to current destination disk 0	Completed	100.0%	967.90 MB/Minute
Restore source volume 'C:\' to current destination disk 0	Restoring	0.8%	2705.50 MB/Minute
Restore source volume '\\?\Volume{4dd1123f-0464-4c06-9df0-1ab9b95c8901}\...' ...	Not Started		

Automatically reboot your system after recovery.

Do not start Agent service automatically after reboot.

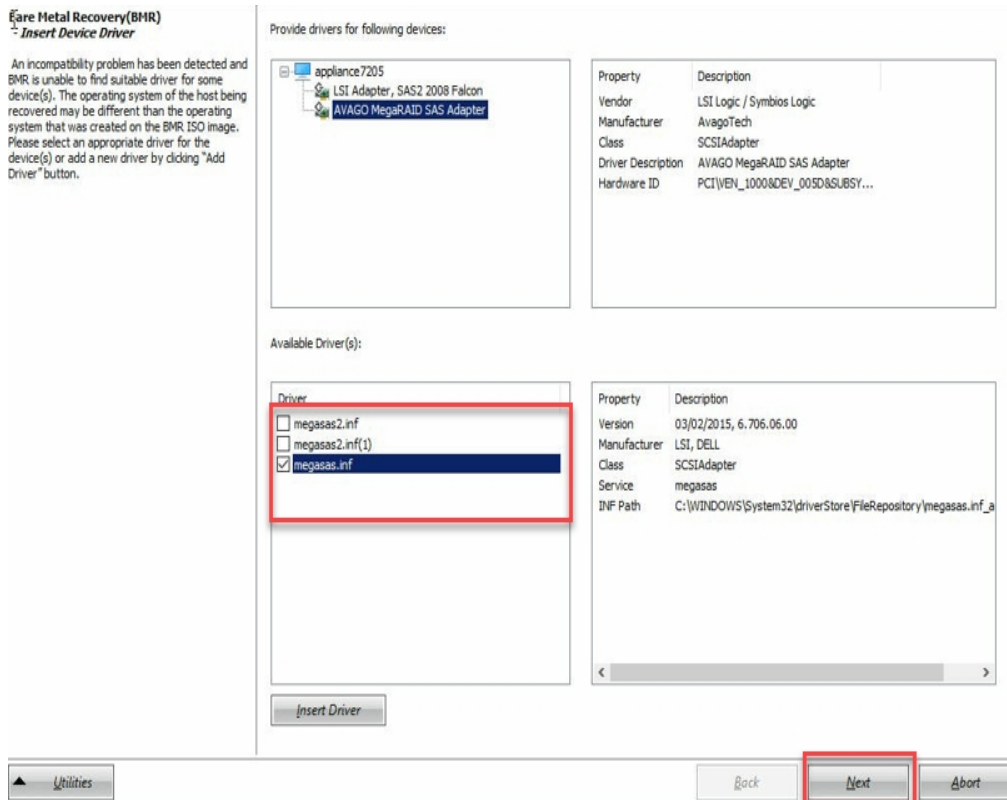
Boot the system to Advanced Boot Options (F8) Menu on the next boot for Windows 8 / Windows Server 2012 and later OS.

Elapsed Time: 00 : 00 : 24
Estimated Time Remaining: 01 : 30 : 50
[0.8%] [576MB/76631MB] Restoring basic source volume 'C:\' to current destination disk 0

Utilities Back Next Abort

【ベアメタル復旧 (BMR) - デバイスドライバのインストール】ダイアログボックスが表示されます。

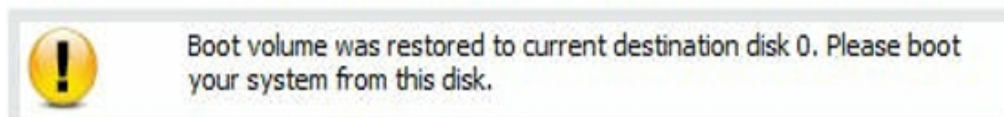
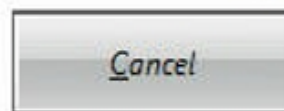
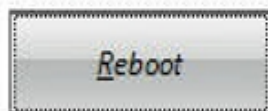
23. RAID コントローラで必要なドライバを選択し、【次へ】をクリックします。



[再起動]ポップアップ ウィンドウが表示され、Arcserve UDP アプライアンスは自動的に再起動されます。

Click **Reboot** to automatically reboot your system at this time. If you want to collect all BMR log files you can use the Activity log utility.
[Click here](#) to launch the Activity Log utility.

Your system will reboot in **11 second(s)**.



BMR の処理が正常に完了しました。

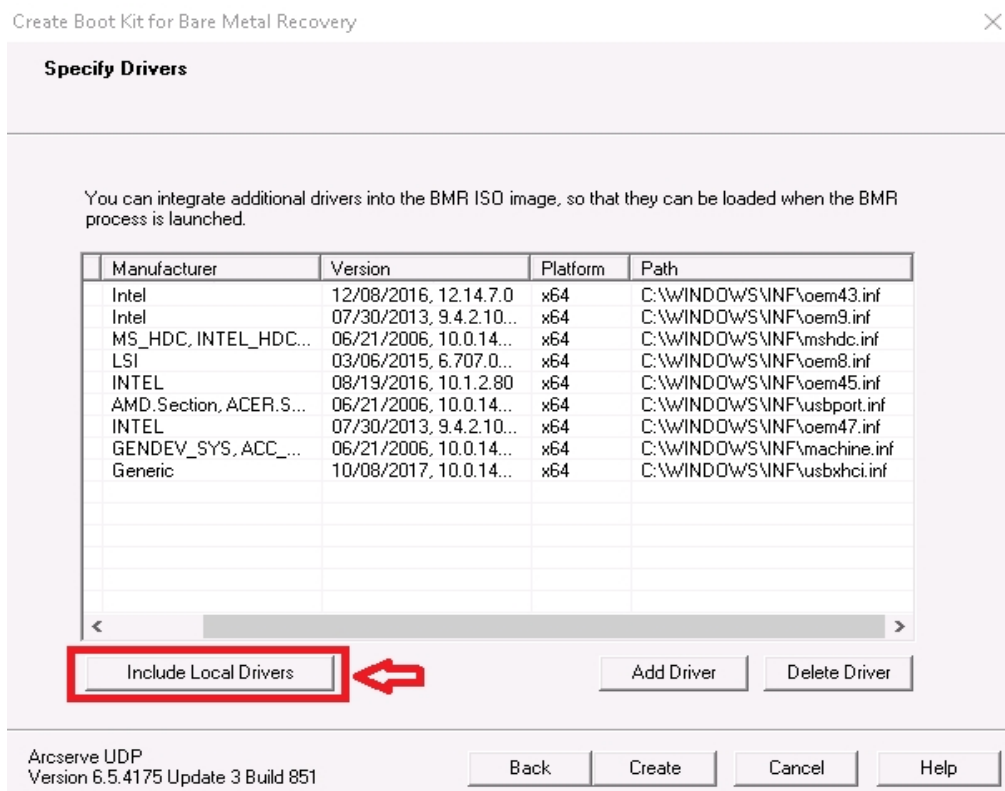
データを保持するベアメタル復旧(BMR)に関する推奨事項

Arcserve UDP アプライアンス上で、Arcserve UDP ブートキットを使用してベアメタル復旧を実行できます。

以下の手順に従います。

1. アプライアンスで Arcserve UDP ブートキット ウィザードを実行し、x64 プラットフォームでブート可能な BMR ISO イメージまたは USB スティックを生成します。

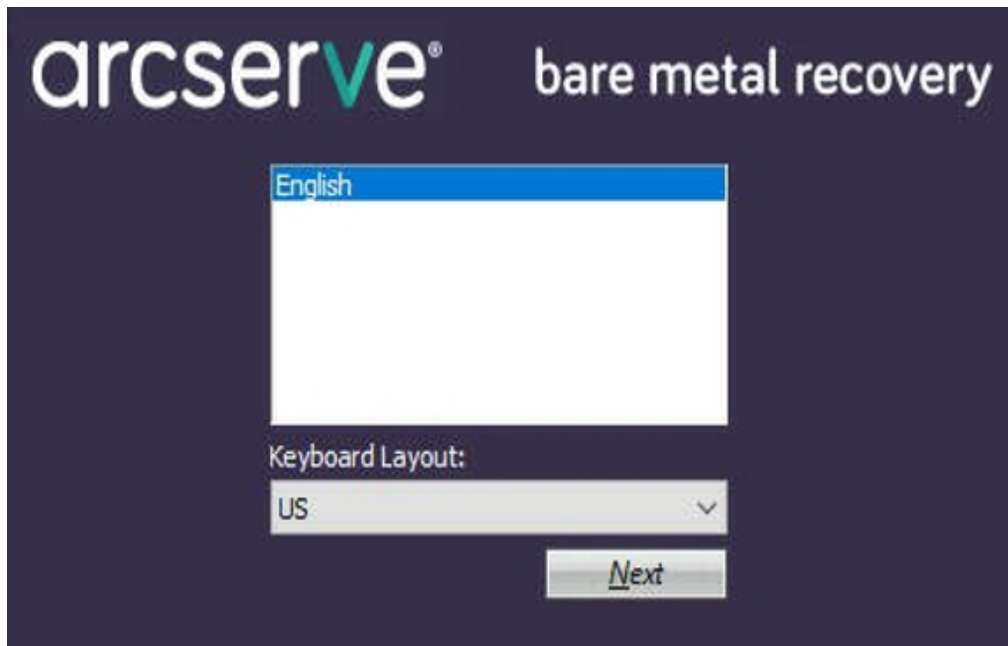
注：ISO イメージにはローカルドライバを含める必要があります。ローカルドライバを含めるには、**[ベアメタル復旧用のブートキットの作成]**ウィンドウで **[ローカルドライバを含む]**オプションを選択します。ブートキットの作成方法の詳細については、この[リンク](#)を参照してください。



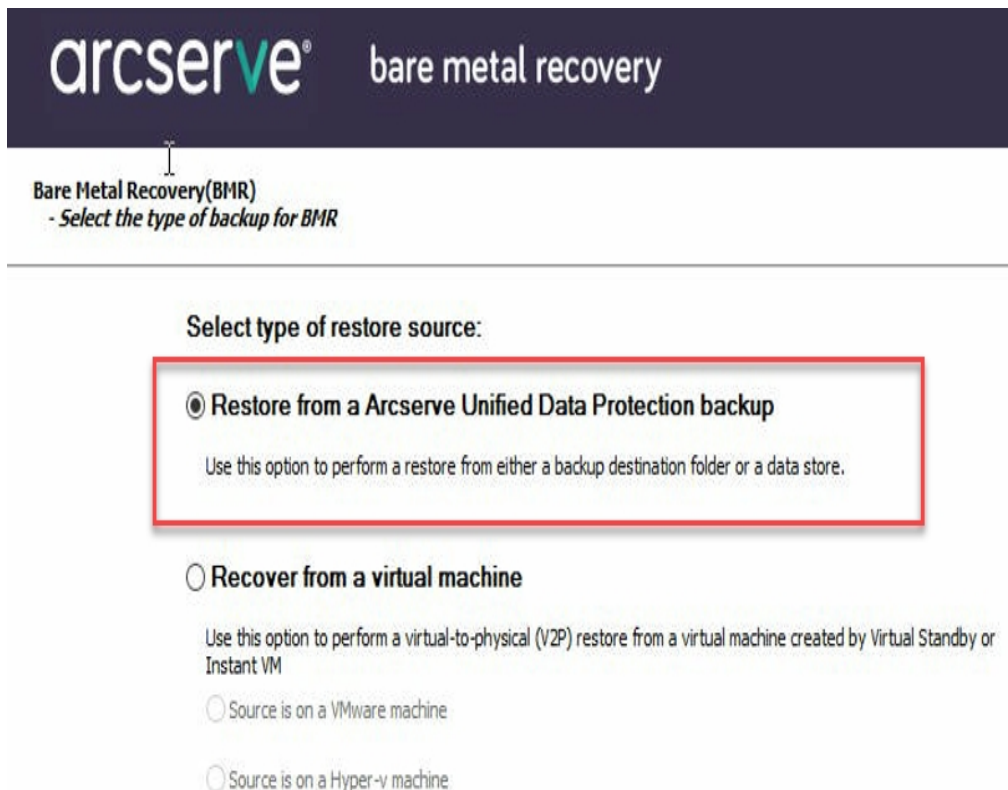
2. BMR ISO イメージまたは USB スティックを使用して Arcserve UDP アプライアンスを起動します。

Arcserve ベアメタル復旧のセットアップ画面が表示されます。

3. 必要な言語を選択して、**[次へ]**をクリックします。

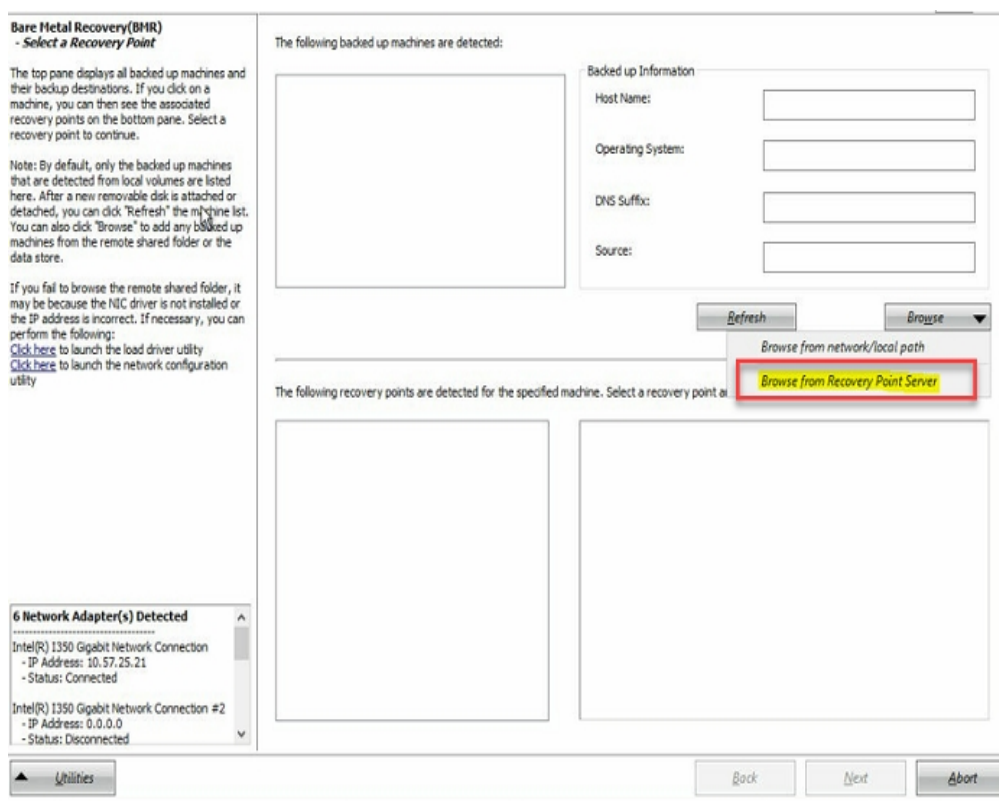


4. [Arcserve Unified Data Protection のバックアップからのリストア]オプションを選択し、[次へ]をクリックします。



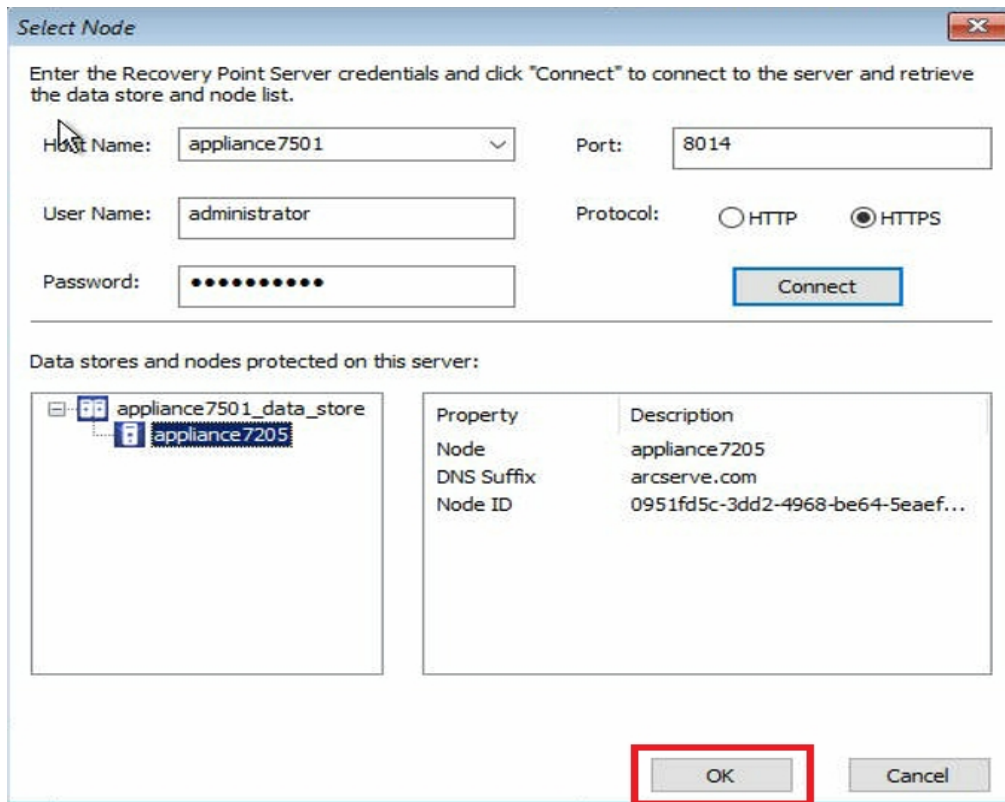
復旧ポイントの選択]ウィザードのウィンドウが表示されます。

5. [参照]をクリックして、[復旧ポイント サーバから参照]を選択します。



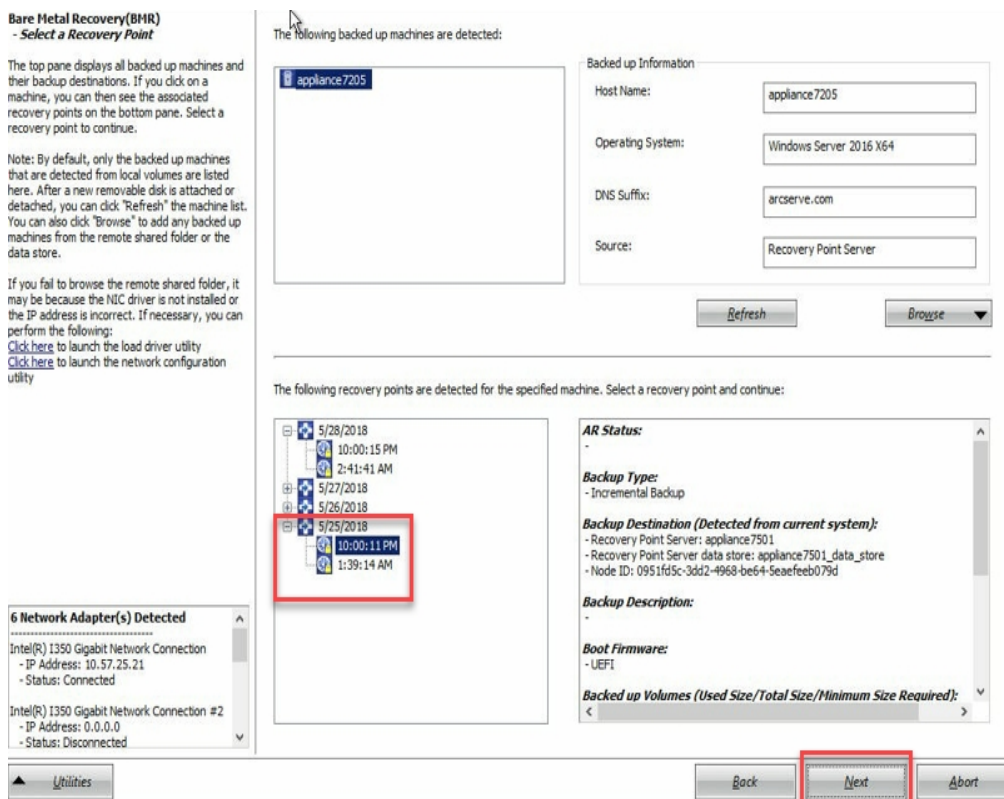
[ノードの選択] ウィンドウが表示されます。

6. 復旧ポイント サーバのホスト名、ユーザ名、パスワード、ポート、およびプロトコルを入力します。
7. [接続] をクリックします。
8. 接続が確立されたら、[OK] をクリックします。

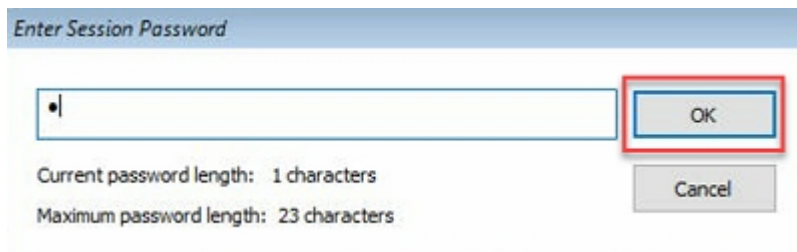


[ペアメタル復旧 (BMR) - 復旧ポイントの選択] ダイアログボックスが表示されます。

9. リストアする復旧ポイントを選択して、[次へ]をクリックします。

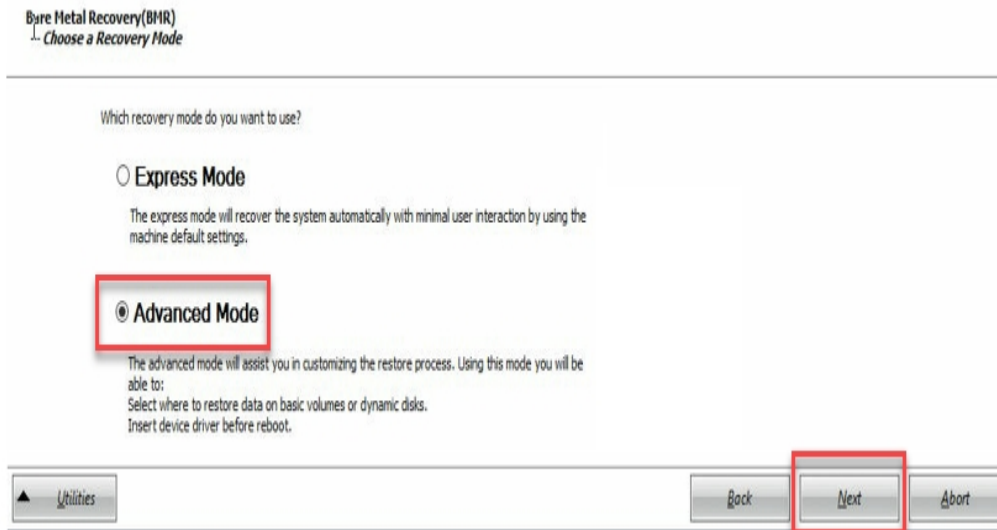


10. (オプション) 要求された場合はセッションパスワードを入力し、[OK]をクリックします。

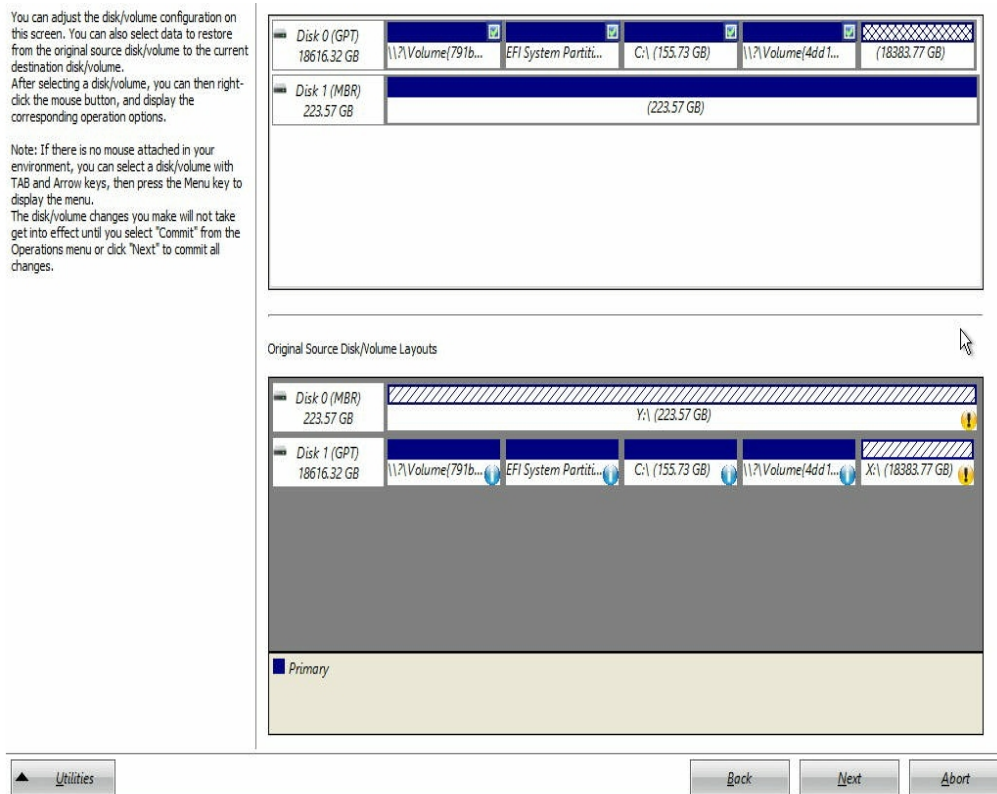


[ベアメタル復旧(BMR) - 復旧モードの選択]ダイアログボックスが表示されます。

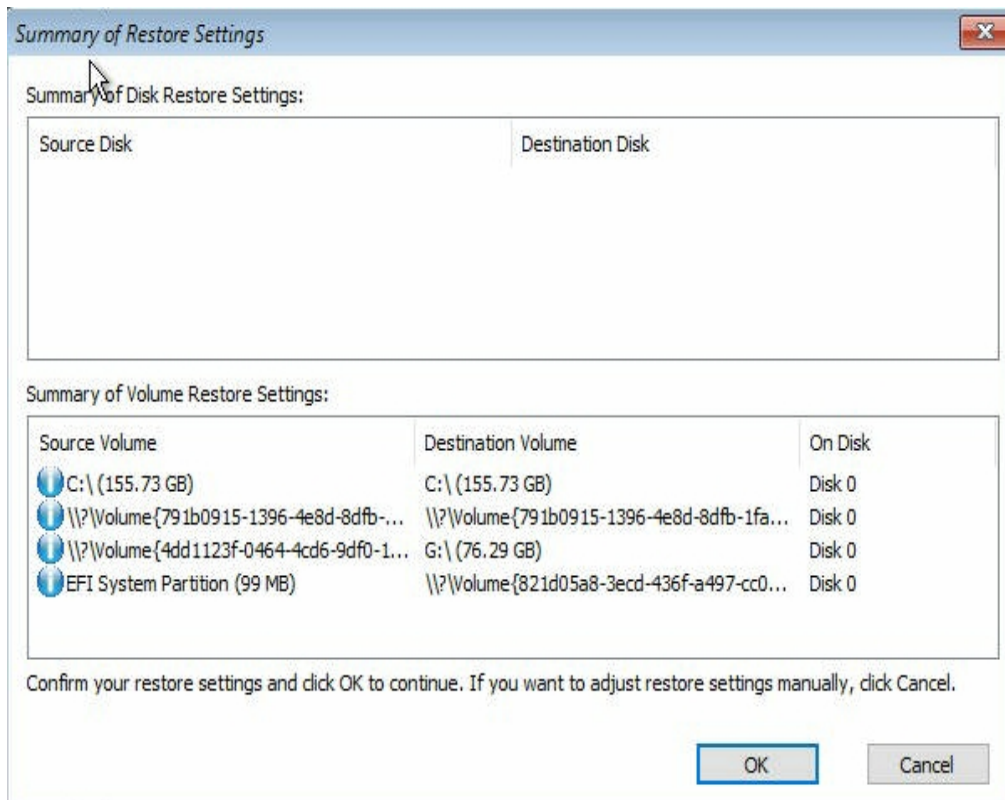
11. [拡張モード]を選択し、[次へ]をクリックします。



12. 「ベアメタル復旧 (BMR) - ディスクパーティションの調整」ダイアログボックスで [次へ] をクリックします。



13. 「ディスクリストア設定のサマリ」画面で、[OK] をクリックします。



14. **Bare Metal Recovery(BMR)- Start Recovery Process (ペアメタル復旧 (BMR) - 復旧プロセスの開始)]**ダイアログ ボックスで、**再起動後にエージェント サービスを自動的に開始しない**]オプションをオフにして、リストアの完了とマシンの再起動を待ちます。

Bare Metal Recovery (BMR)
- Start Restore Process

This page displays a summary of the disk/volume restore settings that you have made.

Note: After the BMR process is complete and server has been rebooted, you may not want to perform backup jobs from this server. If you are just testing the BMR functionality, we recommend that you select the "Do not start Agent service automatically after reboot" option. When you select this option, you can manually start the Agent service (and the Recovery Point Server service, if installed) after reboot if you want to perform backup jobs.

Enable Windows F8 boot option helps user perform further recovery or troubleshooting after BMR. For example, press F8 and boot into Active Directory Service Restore mode to perform Active Directory authoritative restore.

Summary of Restore Settings

Restore Item	Status	Progress	Throughput
Restore source volume 'C:\' to current destination disk 0	Restoring	1.8%	3115.69 MB/Minute
Restore source volume '\\?\Volume{791b0915-1396-4e8d-8dfb-1fa02793003f}\ ...	Not Started		
Restore source volume '\\?\Volume{4dd1123f-0464-4cd6-9df0-1ab9b95c8901}\ ...	Not Started		
Restore source volume 'EFI System Partition' to current destination disk 0	Not Started		

Automatically reboot your system after recovery.

Do not start Agent service automatically after reboot.

Boot the system to Advanced Boot Options (F8) Menu on the next boot for Windows 8 / Windows Server 2012 and later OS.

Elapsed Time: 00 : 00 : 33
Estimated Time Remaining: 00 : 52 : 55

[1.8%] [1632MB/90738MB] Restoring basic source volume 'C:\' to current destination disk 0

▲ Utilities Back Next Abort

BMR の処理が正常に完了しました。

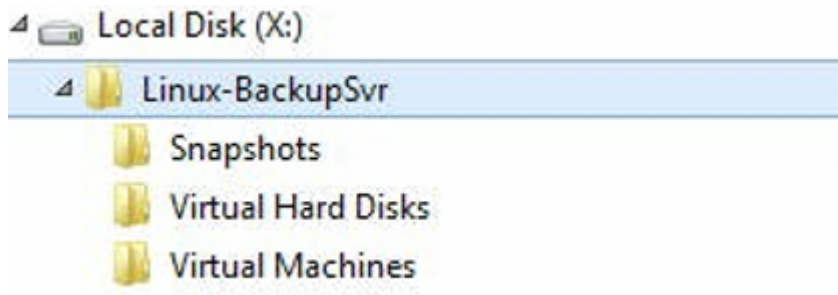
Linux 移行ツールに関する推奨事項

重要: Linux 移行ツールは Arcserve UDP v6.5 Update 4 でのみ利用可能です。

Linux 移行ツール (Linux_migration.ps1) は、Arcserve UDP v6.5 Update 4 から導入された新機能です。このツールを使用すると、Arcserve UDP アプライアンスの事前インストール済み Linux バックアップ サーバを CentOS 6.6 といった以前のバージョンの CentOS から CentOS 7.4 に移行できます。

以下の手順に従います。

1. 管理者の認証情報を使用して、Arcserve UDP アプライアンスにログインします。
2. アプライアンス内の Arcserve UDP コンソールの以前のバージョンを Arcserve UDP v6.5 Update 4 にアップグレードします。
3. この[リンク](#)から *Linux-BackupSvr.zip* をダウンロードして(このダウンロードの MD5 は *0A51C1020CB8EA569B9DCEAF7BF226E0* です)、ローカルドライブにファイルを抽出します。たとえば、これらのファイルをドライブ X に抽出する場合、パスは以下のように表示されます。



4. PowerShell コマンド ラインを開いて以下のコマンドを入力し、ディレクトリのパスを Linux_migration.ps1 ファイルが含まれるフォルダに変更します。

```
cd C:\Program Files\Arcserve\Unified Data Protection\Engine\bin\Appliance\
```

5. 以下のコマンドを実行して移行を実行します。

```
Linux_migration.ps1 -path X:\Linux-BackupSvr
```

注: X:\Linux-BackupSvr は、Linux-BackupSvr.zip のファイルがローカルドライブに抽出されるパスです。

コマンド ラインには、移行処理の進捗状況が表示されます。

移行処理が正常に完了すると、古い Linux バックアップ サーバの電源がオフになり、古い Linux バックアップ サーバの名前が *Linux-BackupSvr-CentOS<version number>-<hhmm>* に変更されます。新しい Linux バックアッ

プサーバ(CentOS 7.4) のインポートが完了し、その名前が Hyper-V マネージャで *Linux-BackupSvr* に正常に変更されます。

6. Arcserve UDP コンソールから Linux バックアップサーバを更新します。

Linux バックアップサーバを CentOS 7.4 に移行した後、Linux バックアッププラン、Linux ノード、および Linux ジョブといったすべての Linux バックアップサーバ設定は、Arcserve UDP アプライアンス コンソールで正常に移行されて設定されます。

アプライアンスイメージ設定ユーティリティツールを設定するための推奨事項

アプライアンスイメージ設定ユーティリティツールは、Arcserve UDP アプライアンスの利用可能なバージョンの目的のアプライアンスイメージで、現在のシステムの元のアプライアンスイメージを置換するのに役立ちます。

Arcserve UDP v6.5 Update 2 のアプライアンスイメージのダウンロード

Windows 2012 R2 の場合

こちらの [URL](#) から、アプライアンスイメージをダウンロードすることができます。

注：アプライアンスイメージダウンロードの md5 は 1E9FB62D395EF1812B1DBE9EDB8F2C6E です。

ユーティリティを実行したら、Arcserve UDP コンソールで利用可能な工場出荷時設定を使用して、ファクトリリセットを実施し、アプライアンスを Arcserve UDP アプライアンスの目的のリリースバージョンに戻します。アプライアンスイメージ設定ユーティリティは、Arcserve UDP アプライアンス v6.5 Update 1 以降のリリースで利用可能です。

注：置換に使用されるアプライアンスイメージは、Arcserve UDP アプライアンスにインストールされている元の Arcserve UDP バージョンより後のバージョンである必要があります。

元の Arcserve UDP のバージョンを確認するには、Arcserve UDP コンソールにログインし、**設定**]に移動して、バージョンの詳細の **ファクトリリセット**]を選択します。



UDP v6 Update 1 のファクトリリセット イメージを UDP v6.5 Update 1 のファクトリリセット イメージに置き換えるサンプルシナリオ

以下の例では、ファクトリリセット イメージを置き換える処理について説明します。別のバージョンでも同じ処理を実行できます。

アプライアンスイメージ設定ユーティリティを使用して Arcserve UDP アプライアンス v6 Update 1 から Arcserve UDP アプライアンス v6.5 Update 1 に戻す方法

アプライアンスにインストールされている Arcserve UDP リリースバージョンが Arcserve UDP v6 Update 1 の場合、アプライアンスを Arcserve UDP v6.5 Update 1 にアップグレードすることができます。

アップグレードするには、次の手順を実行します。

1. Arcserve UDP アプライアンス v6.5 Update 1 のアプライアンス イメージをダウンロードし、アプライアンス イメージ設定 ユーティリティを実行します。以下の手順を実行し、アプライアンス イメージ設定 ユーティリティを使用します。

- a. Arcserve UDP v6.5 Update 1 アプライアンス イメージをこちらの [URL](#) からダウンロードするか、[サポートに問い合わせ](#)せてダウンロードします。

注：アプライアンス イメージ ダウンロードの md5 は 9F568A4BDC6B42972C5177284591B835 です。

- b. Windows コマンド ラインを開いて、以下のコマンドを入力します。

```
C:\Program files\Arcserve\Unified Data
Protection\Management\bin\Appliance\SetImage.exe -
applianceimage <Fullpath of the appliance image just downloaded>
終了したアプライアンス イメージの確認手順が完了したら、以下のクエリが表示されます。
```

```
appliance.wim ファイルを置き換えてもよろしいでしょうか? <y|n>
```

- c. イメージを置き換えるには「y」または「yes」を入力し、実行を終了するには「n」または「no」を入力します。
- d. イメージの複製が完了すると、コマンド ラインには、以下のメッセージが表示されます。

アプライアンス イメージの置換が完了しました。

```
PPS C:\Program Files\Arcserve\Unified Data Protection\Management\bin\Appliance> .\SetImage.exe -applianceimage C:\temp\appliance.wim
Start to check appliance image, this may need about 30 minutes, please wait...
Mounting the old appliance image, please wait...
Unmounting the old appliance image, please wait...
Mounting the new appliance image, please wait...
Unmounting the new appliance image, please wait...
Check appliance images finished.
Are you sure you want to replace the appliance.wim file? <y|n>:y
Start to replace appliance image, please wait...
Replace appliance image completed.
```

2. アプライアンスの Update 1 バージョンに戻すには、以下の手順を実行します。

注：Arcserve UDP コンソールでのアプライアンス イメージの置換後、元の Arcserve UDP バージョンは目的のアプライアンス リリース バージョンに変更されます。

- a. Arcserve UDP コンソールから、**設定**]に移動し、**ファクトリリセット**]を選択します。



元の Arcserve UDP バージョンは、Arcserve UDP アプライアンス v6.5 Update 1 に変更されます。

注: アプライアンスイメージの置換後に、**元の Arcserve UDP バージョン**]に目的のアプライアンスリリースバージョンが表示されていない場合は、ページを再度読み込みます。

- b. **ファクトリリセットの実行**]をクリックすると、現在のバージョンのアプライアンスから、新しい Arcserve UDP アプライアンス v6.5 Update 1 バージョンに戻ります。

ファクトリリセットの詳細についてはこちらの[リンク](#)を参照してください。

Arcserve UDP アプライアンスに事前インストールされている Linux バックアップ サーバに関する推奨事項

Arcserve UDP アプライアンスに事前インストールされている Linux バックアップ サーバを v6.5 Update 2 にアップグレードする場合は、アップグレード後に、CentOS 6.6 x64 ファイアウォールの Linux にいくつかのポートを手動で追加する必要があります。

以下の手順に従います。

1. 以下のパスに移動します。

```
vi /etc/sysconfig/iptables
```

2. iptables ファイルには、太字で記載されている以下の行が含まれている必要があります。そうでない場合は、手動でそれらを追加する必要があります。

```
# Firewall configuration written by system-config-firewall
```

```
# Manual customization of this file is not recommended.
```

```
*filter
```

```
:INPUT ACCEPT [0:0]
```

```
:FORWARD ACCEPT [0:0]
```

```
:OUTPUT ACCEPT [0:0]
```

```
-A INPUT -p tcp -m tcp --dport 22 -j ACCEPT
```

```
-A INPUT -p tcp -m tcp --dport 67 -j ACCEPT
```

```
-A INPUT -p tcp -m tcp --dport 69 -j ACCEPT
```

```
-A INPUT -p tcp -m tcp --dport 8014 -j ACCEPT
```

```
-A INPUT -p tcp -m tcp --dport 8016 -j ACCEPT
```

```
-A INPUT -p tcp -m tcp --dport 8017 -j ACCEPT
```

```
-A INPUT -p tcp -m tcp --dport 8021 -j ACCEPT
```

```
-A INPUT -p tcp -m tcp --dport 8035 -j ACCEPT
```

```
-A INPUT -p tcp -m tcp --dport 8036 -j ACCEPT
```

```
-A INPUT -p tcp -m tcp --dport 50000 -j ACCEPT
```

```
-A INPUT -p tcp -m tcp --dport 50001 -j ACCEPT
```

```
-A INPUT -p tcp -m tcp --dport 50002 -j ACCEPT
```

```
-A INPUT -p tcp -m tcp --dport 50003 -j ACCEPT
```

```
-A INPUT -p tcp -m tcp --dport 50004 -j ACCEPT
-A INPUT -m state --state ESTABLISHED,RELATED -j ACCEPT
-A INPUT -p icmp -j ACCEPT
-A INPUT -i lo -j ACCEPT
-A INPUT -m state --state NEW -m tcp -p tcp --dport 22 -j ACCEPT
-A INPUT -j REJECT --reject-with icmp-host-prohibited
-A FORWARD -j REJECT --reject-with icmp-host-prohibited
COMMIT
```

3. iptables ファイルを保存します。
4. 以下のコマンドを使用して、iptables サービスを再起動します。
`/etc/init.d/iptables restart`

CentOS 6.6 x64 ファイアウォールに正常にポートが追加されました。

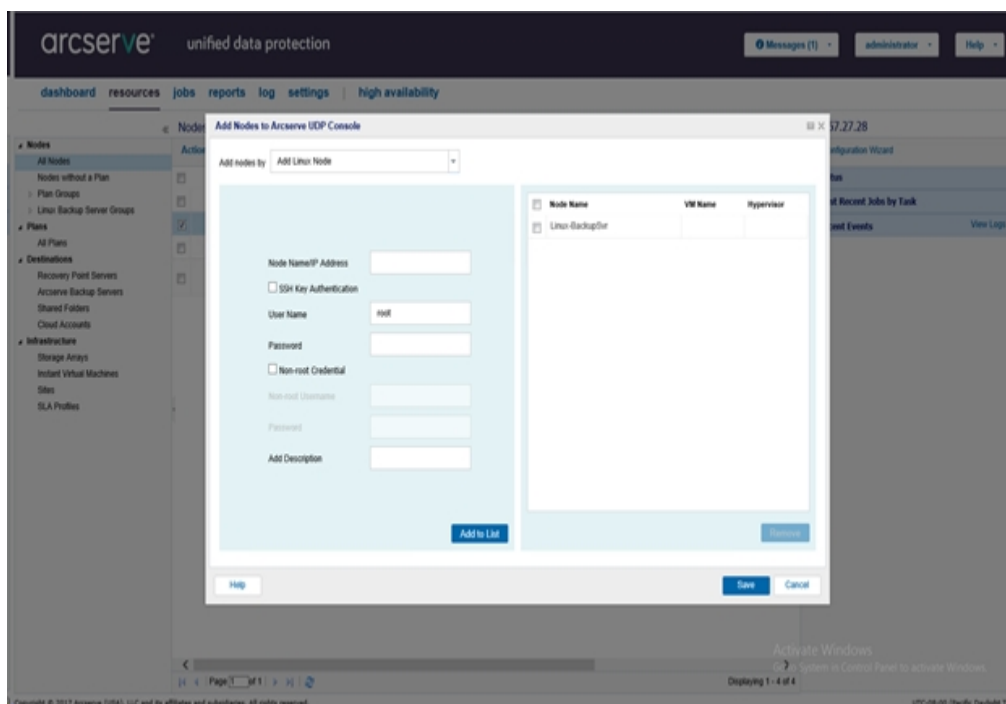
Arcserve UDP アプライアンスに Linux のバックアップ サーバ自体をバックアップさせるための推奨事項

Arcserve UDP アプライアンスで、Linux バックアップ サーバ自体をバックアップする場合は、次の手順を実行します。

1. Arcserve UDP コンソールから、[リソース]タブをクリックします。
2. 右側のペインの [すべてのノード] をクリックします。
3. 中央のペインから、[ノードの追加] をクリックします。

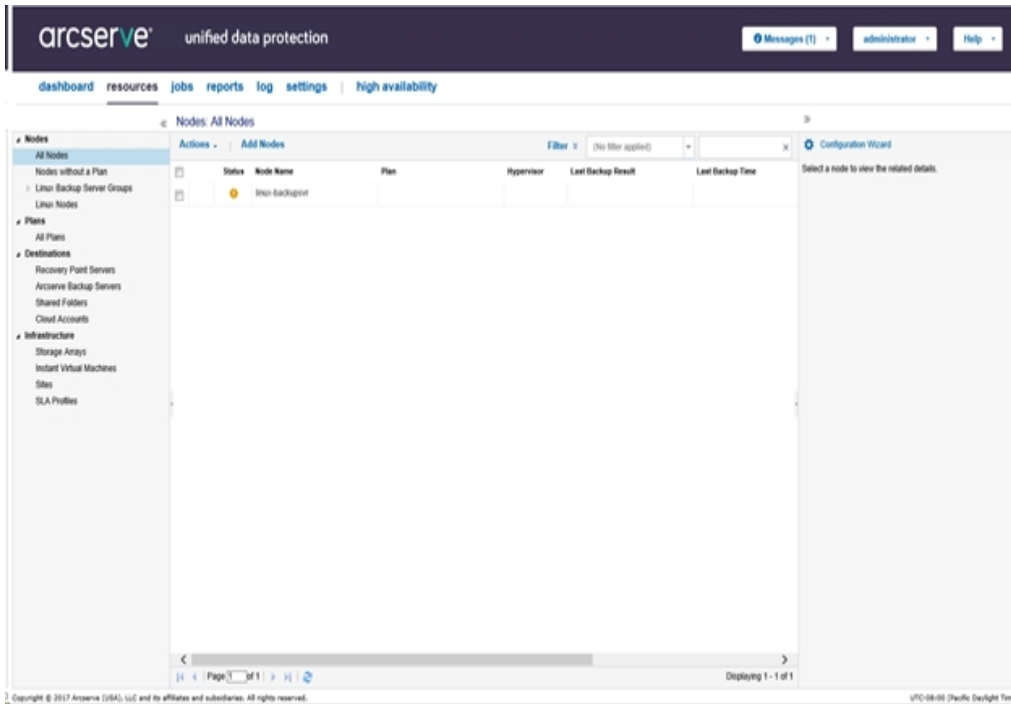
[Add Nodes to Arcserve UDP Console] ダイアログボックスが表示されます。

4. [ノードの追加] ドロップダウンリストから、[Linux ノードの追加] を選択します。
5. ノードの認証情報を入力し、[リストに追加] をクリックします。

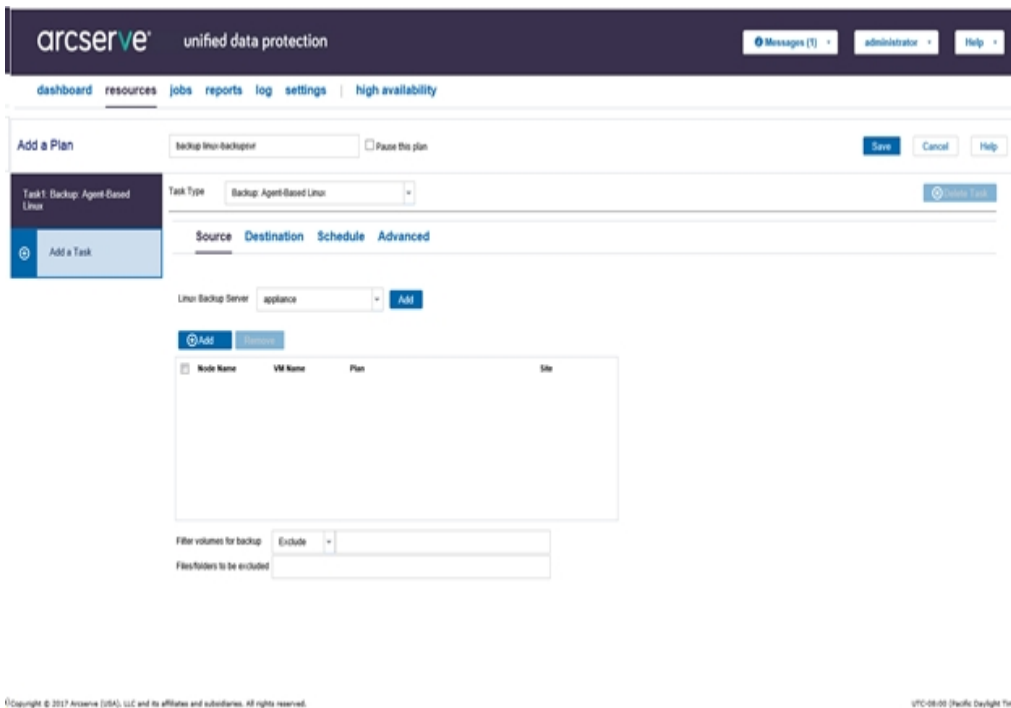


6. [保存] をクリックします。

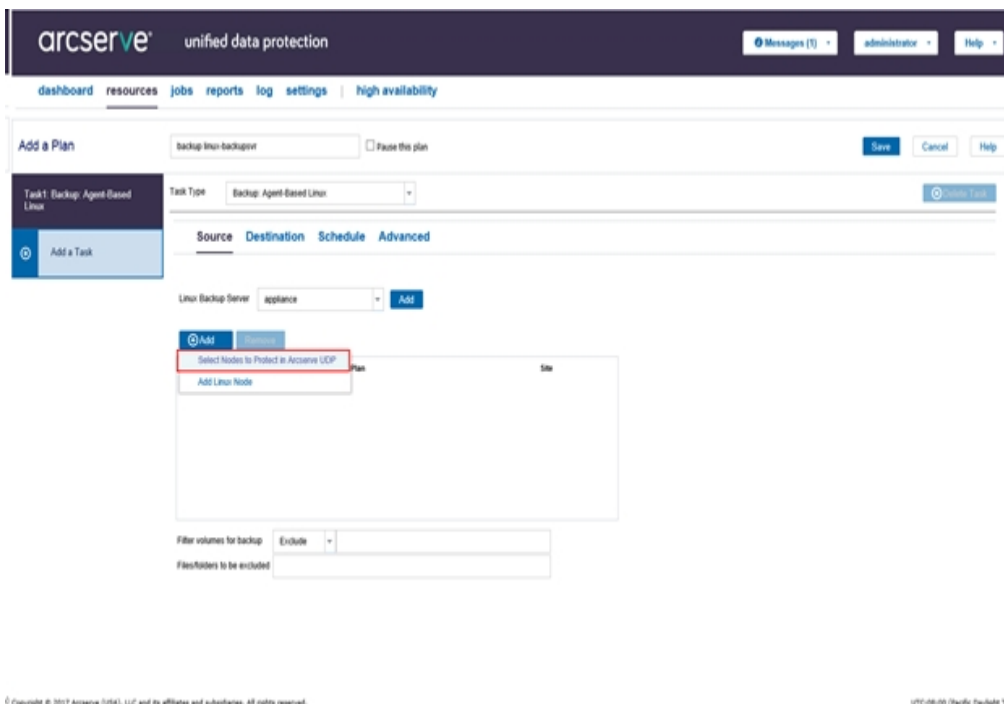
追加された Linux ノードは [すべてのノード] リストに表示されます。



7. [すべてのプラン]に移動し、エージェント ベース Linux プランを作成します。
[ソース]タブが表示されます。



8. [追加]ドロップダウン リストから、[Arcserve UDP で保護するノードの選択]を選択します。

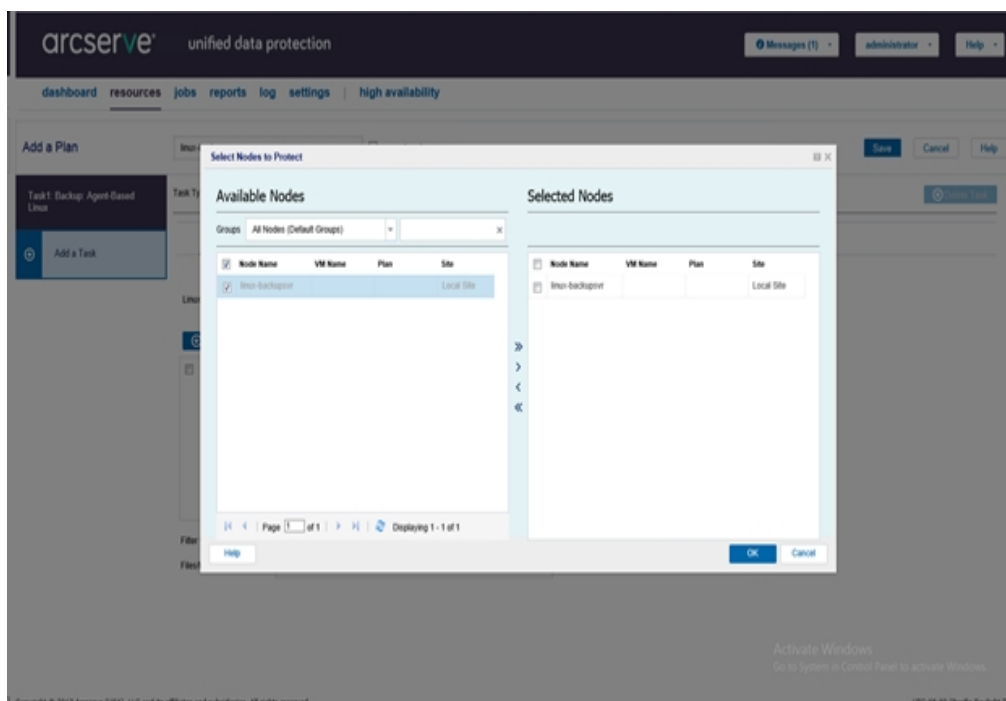


© Copyright © 2017 Arcserve (USA), LLC and its affiliates and subsidiaries. All rights reserved.

UTC-08:00 (Pacific Daylight Time)

保護するノードの選択 ダイアログ ボックスが表示されます。

- 追加された Linux ノードを保護して、**[OK]**をクリックします。

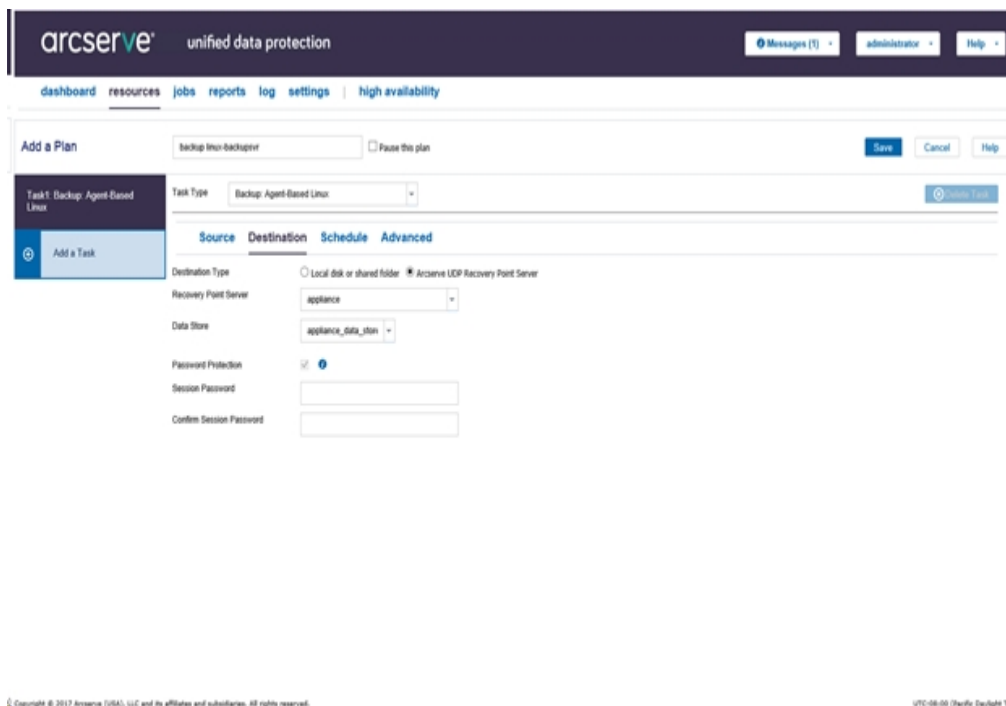


© Copyright © 2017 Arcserve (USA), LLC and its affiliates and subsidiaries. All rights reserved.

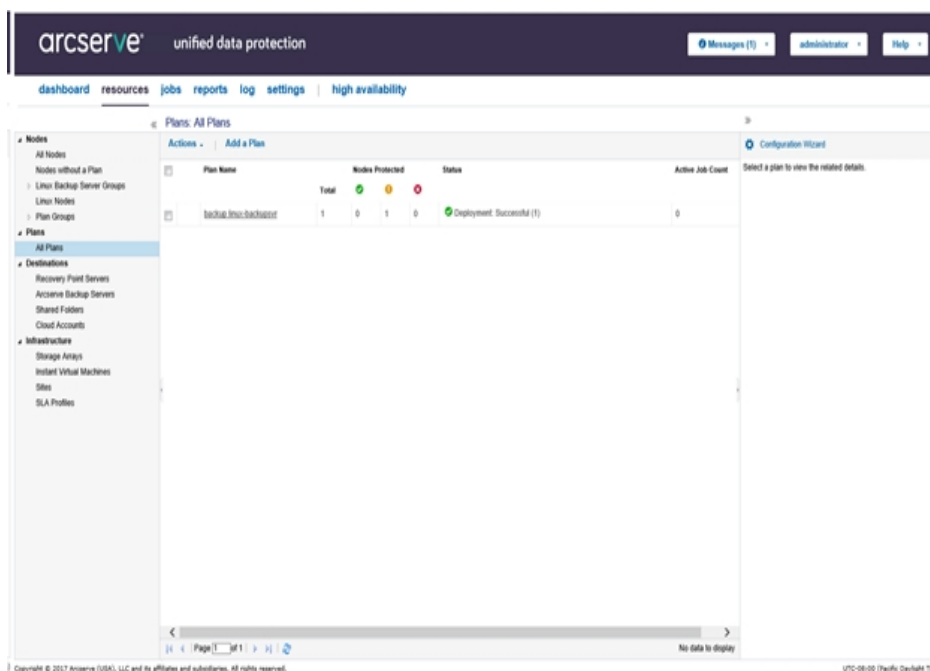
UTC-08:00 (Pacific Daylight Time)

[デスティネーション] タブが表示されます。

- 表示されるデフォルトのデスティネーションは、アプライアンス ウィザードを使用して作成されたデータストアです。必要に応じて、ノードをバックアップするローカル ディスクまたは共有フォルダを選択します。



11. プランに関連する設定を入力したら、[保存]をクリックします。



追加された Linux バックアップ サーバに対して正常にバックアップを実行することができます。

Arcserve UDP アプライアンスからアプライアンスへの移行の推奨事項

このトピックでは、既存の Arcserve UDP アプライアンスから別の新しい Arcserve UDP アプライアンスへの移行を実行するユーザ用に 2 つのソリューションを提供します。

たとえば、Arcserve UDP アプライアンス 8200 を Arcserve UDP アプライアンス 8400 に移行することができます。前提条件は次のとおりです。

- アプライアンス 8200 とアプライアンス 8400 の両方に接続できることを確認します。
- 新しいアプライアンスの容量は、元のアプライアンス上のすべてのデータを保持するのに十分なメモリがある必要があります。
- Arcserve UDP アプライアンス 8200 で、ジョブが実行されていないことを確認します。

コンソールの移行の詳細については、「[Arcserve UDP コンソールの移行に関する推奨事項](#)」トピックを参照してください。

任意のアプライアンスから新規アプライアンスに移行するには、以下に示す 2 つのソリューションがあります。

- [解決策 1](#)
- [解決策 2](#)

解決策 1

ベアメタル復旧 (BMR) ソリューション

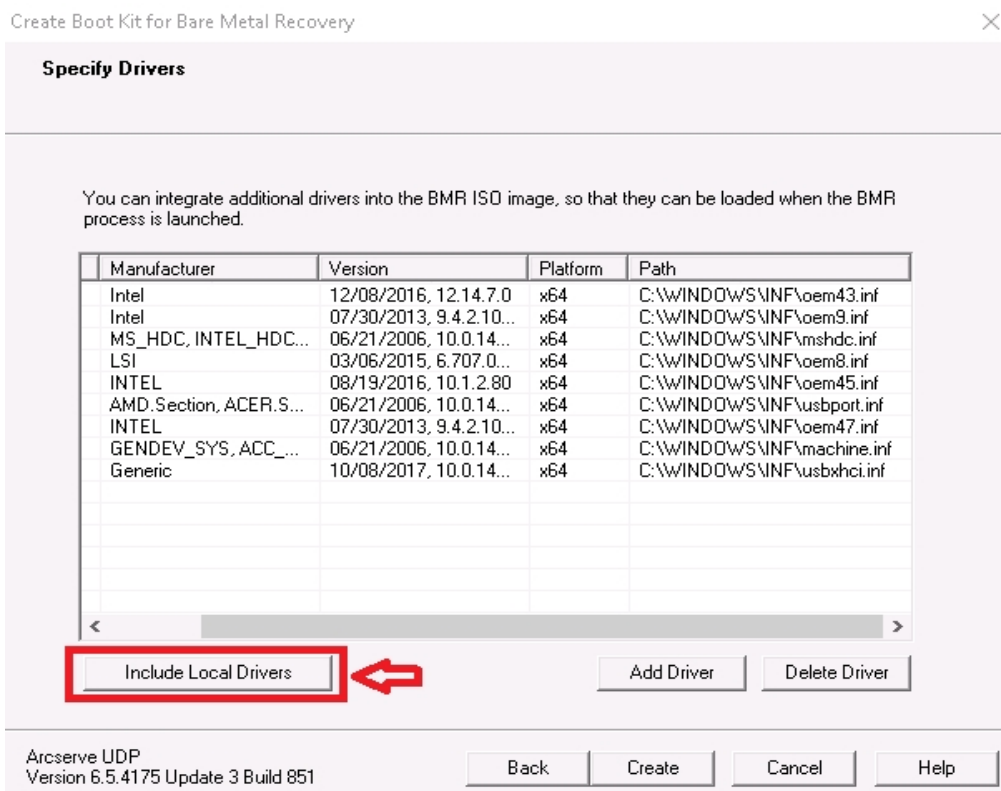
既存の UDP アプライアンスから別の新しい UDP アプライアンスに対して BMR を実行するには、以下の手順を実施します。

1. 新規 Arcserve UDP 8400 上にデータストアを作成し、このデータストアに Arcserve UDP アプライアンス 8200 をバックアップします。

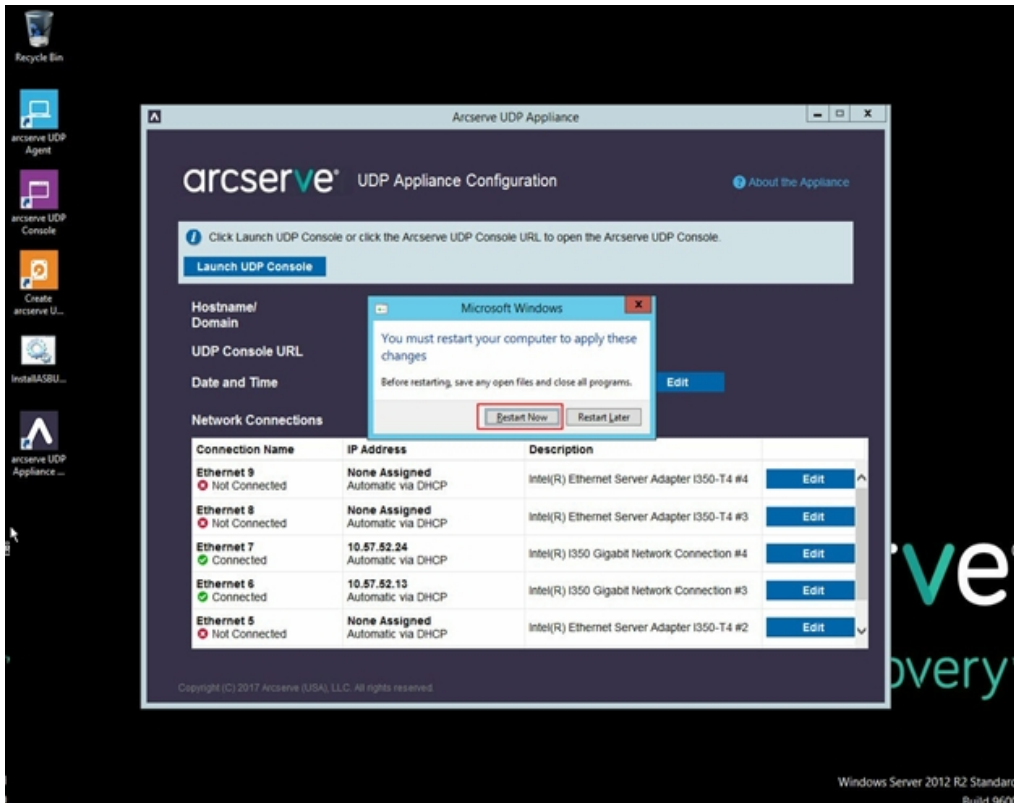
注：以下の警告は無視することができます。

Arcserve UDP 復旧ポイント サーバデータストアは、ボリューム X:、Y: で設定されています。このボリュームはバックアップされません。

2. バックアップ後、上記の手順で取得した復旧ポイントを使用してアプライアンス 8400 で BMR を実行し、手動でドライバ *megasas.inf* を選択します。



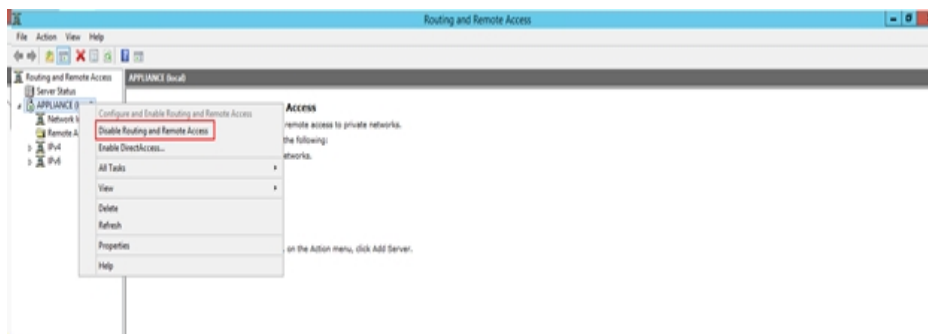
3. BMR の後、システムプロンプトに従ってアプライアンス 8400 を再起動します。



4. ここで、8400 アプライアンス上にネットワークスイッチが再構築されます。

以下の手順に従います。

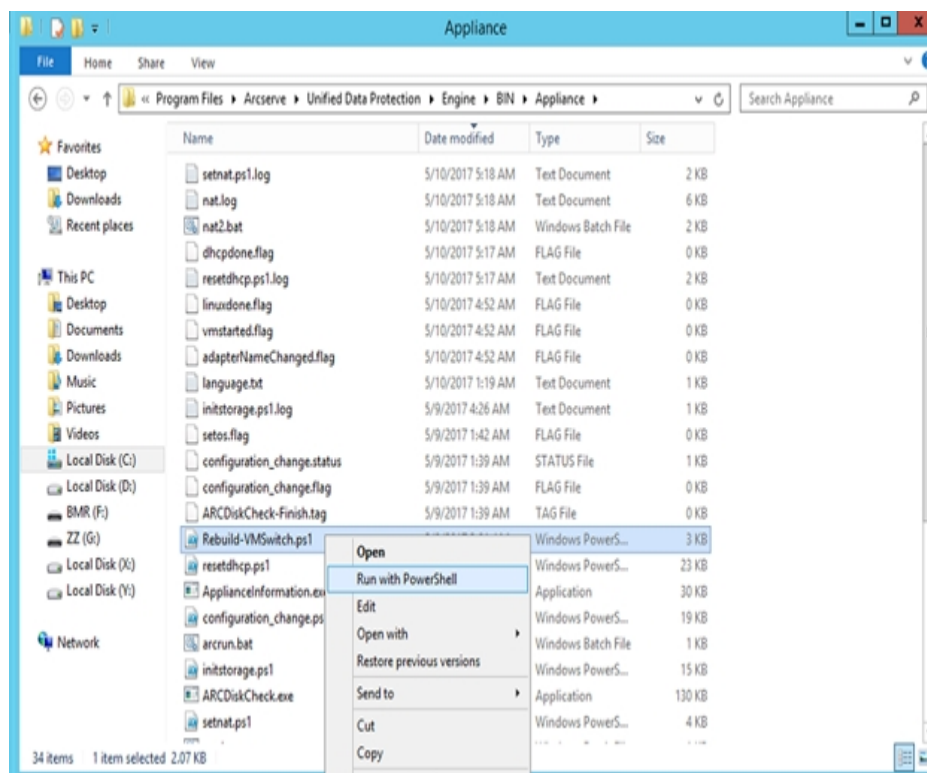
- a. [ルーティングとリモート アクセス]を開き、[ルーティングとリモート アクセスの無効化]をクリックします。



- b. PowerShell で、以下のコマンドを実行します。

`C:\Program Files\Arcserve\Unified Data`

Protection\Engine\BIN\Appliance\Rebuild-VMSwitch.ps1



5. ここで、以下の手順を実行し、8200 アプライアンス上のデータを 8400 アプライアンスにコピーし、データを 8400 にインポートします。

- コマンドラインで以下のコマンドを使用し、UDP アプライアンス 8200 上のすべての UDP サービスを停止します。

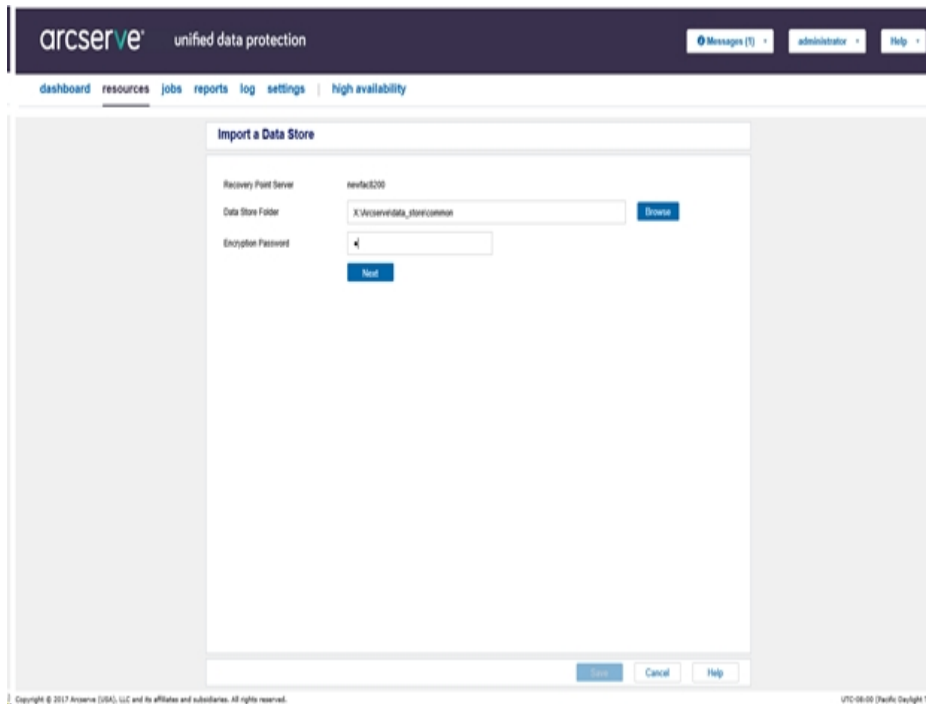
```
C:\Program Files\Arcserve\Unified Data Protection\Management\BIN> cmdutil.exe /stopall
```

- ディスク X および Y 上のすべてのデータを、UDP アプライアンス 8200 から 8400 に手動でコピーします。

```
Administrator: C:\Windows\System32\cmd.exe
Microsoft Windows [Version 6.3.9600]
(c) 2013 Microsoft Corporation. All rights reserved.

C:\Program Files\Arcserve\Unified Data Protection\Management\BIN>cmdutil.exe /st
opall
Start to kill process explorer.exe
Killing process explorer.exe
Process killed.
Start to kill process D2DUDgc.exe
Stopping service 'Arcserve UDP Agent Service'...
Service Stopped.
Stopping service 'Arcserve UDP RPS Data Store Service'...
Service Stopped.
Stopping service 'Arcserve UDP RPS Port Sharing Service'...
Service Stopped.
Stopping service 'Arcserve UDP Identity Service'...
Service Stopped.
Stopping service 'Arcserve UDP Management Service'...
Service Stopped.
Stopping service 'Arcserve UDP Management Port Sharing Service'...
Service Stopped.
Stopping service 'Arcserve UDP Agent Explorer Extension Service'...
Service Stopped.
Stopping service 'Arcserve UDP Update Service'...
Service Stopped.
Stopping Arcserve UDP agent monitor...
Arcserve UDP agent monitor stopped.
Start to kill Arcserve UDP processes
Killing process sync_utl_d.exe
Process killed.
Killing process AFD2DMonitor.exe
Process killed.
Killing process GDDServer.exe
Process killed.
Killing process GDDServer.exe
Process killed.
Killing process GDDServer.exe
Process killed.
Killing process AStartup.exe
Process killed.
Killing process explorer.exe
Process killed.
Stopping mounting driver...
Mounting driver stopped.
Start Windows Explorer.
```

- c. 8400 アプライアンスで、すべての UDP サービスを起動し、8200 アプライアンスからコピーしたデータをインポートします。



解決策 2

Arcserve UDP アプライアンス ソリューションの移行

重要: 既存のアプライアンスが Arcserve UDP コンソールと Arcserve UDP RPS の両方として動作している場合、この解決策を使用することができます。

前提条件:

- Arcserve UDP アプライアンス 8200 で、ジョブが実行されていないことを確認します。
- Arcserve UDP コンソールを UDP アプライアンス 8200 から 8400 に移行済みです。

注: Arcserve UDP コンソールをアプライアンス 8200 から 8400 に移行する方法の詳細については、「[Arcserve UDP コンソールの移行に関する推奨事項](#)」を参照してください。

以下の手順に従います。

1. コマンド ラインで以下のコマンドを使用し、Arcserve UDP アプライアンス 8200 上のすべての Arcserve UDP サービスを停止します。

```
C:\Program Files\Arcserve\Unified Data Protection\Management\BIN>  
cmdutil.exe /stopall
```

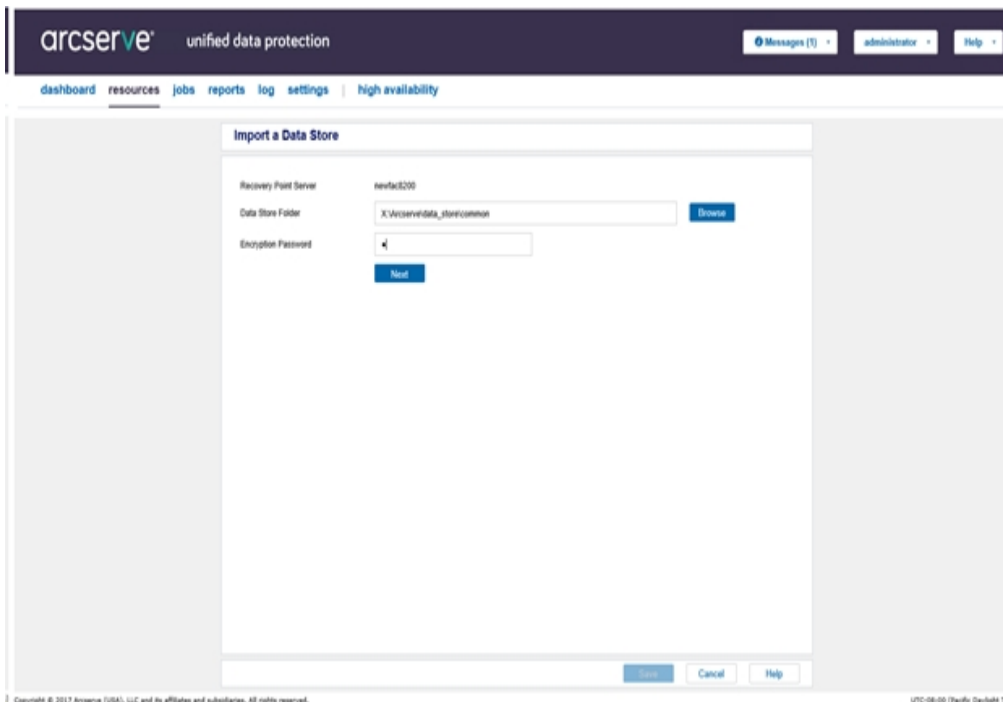
```
Administrator: C:\Windows\System32\cmd.exe
Microsoft Windows [Version 6.3.9600]
(c) 2013 Microsoft Corporation. All rights reserved.

C:\Program Files\Arcserve\Unified Data Protection\Management\BIN>cmdutil.exe /st
opall
Start to kill process explorer.exe
Killing process explorer.exe
Process killed.

Start to kill process D2DUDgc.exe
Stopping service 'Arcserve UDP Agent Service'...
Service Stopped.
Stopping service 'Arcserve UDP RPS Data Store Service'...
Service Stopped.
Stopping service 'Arcserve UDP RPS Port Sharing Service'...
Service Stopped.
Stopping service 'Arcserve UDP Identity Service'...
Service Stopped.
Stopping service 'Arcserve UDP Management Service'...
Service Stopped.
Stopping service 'Arcserve UDP Management Port Sharing Service'...
Service Stopped.
Stopping service 'Arcserve UDP Agent Explorer Extension Service'...
Service Stopped.
Stopping service 'Arcserve UDP Update Service'...
Service Stopped.
Stopping Arcserve UDP agent monitor...
Arcserve UDP agent monitor stopped.
Start to kill Arcserve UDP processes
Killing process sync_utl_d.exe
Process killed.
Killing process AFD2DMonitor.exe
Process killed.
Killing process GDDServer.exe
Process killed.
Killing process GDDServer.exe
Process killed.
Killing process GDDServer.exe
Process killed.
Killing process AStartup.exe
Process killed.
Killing process explorer.exe
Process killed.
Stopping mounting driver...
Mounting driver stopped.

Start Windows Explorer.
```

2. ディスク X および Y 上のすべてのデータを、Arcserve UDP アプライアンス 8200 から 8400 に手動でコピーします。
3. 8400 アプライアンスで、すべての Arcserve UDP サービスを起動し、8200 アプライアンスからコピーしたデータストアをインポートします。



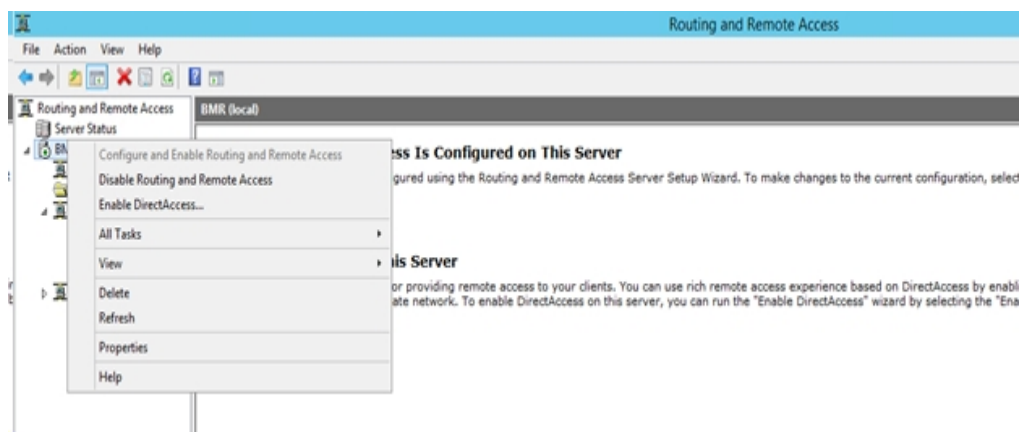
注: Arcserve UDP ログ ファイルは新しいアプライアンスには移行されません。
既存の Arcserve UDP アプライアンスが別の新しいアプライアンスに正常に移行されました。Arcserve UDP

ローカル アプライアンス Hyper-V に対する Arcserve UDP Linux インスタント VM ジョブの推奨事項

Arcserve UDP のアプライアンスを使用すると、ローカル アプライアンス Hyper-V 上で Linux インスタント VM ジョブを実行するようにネットワークを設定することができます。

以下の手順に従います。

1. Hyper-V マネージャを開きます。
2. 新しい外部仮想ネットワークスイッチを作成します。
3. [ルーティングとリモート アクセス]を開き、[ルーティングとリモート アクセスの無効化]をクリックします。



4. DOS コマンド ラインを使用して、PowerShell で以下のコマンドを実行し、手順 1 で新しく追加された仮想ネットワークスイッチ用に [ルーティングとリモート アクセス]を再設定します。

```
C:\Program Files\Arcserve\Unified Data
```

```
Protection\Engine\BIN\Appliance>powershell .\Rebuild-VMSwitch.ps1
```

注: Linux のバックアップ サーバ *Linux BackupSvr* は処理中に再起動します。

5. Linux インスタント VM ジョブをローカル Hyper-V に対して実行するには、新しく追加された仮想ネットワークスイッチを選択します。

Linux インスタント VM ジョブをローカル アプライアンス Hyper-V に対して正常に実行できるようになりました。

リモートで管理される RPS ヘレプリケート タスクを別のアプライアンスに追加するベスト プラクティス

Arcserve UDP アプライアンス v6.5 Update1 では、[リモートで管理される RPS ヘレプリケート] タスクを追加し、別のアプライアンス マシンのホスト名 / IP アドレスを復旧ポイント サーバ (RPS) として [リモート コンソール] フィールドに追加する場合、以下のエラーメッセージが Arcserve UDP コンソールに表示されます。

注: この問題は、Arcserve UDP v6.5 Update 3 以上のデフォルト バージョンを備える UDP アプライアンスでは修正されます。

エラーメッセージ: リモート コンソールを選択してください

The screenshot shows the Arcserve UDP console interface. At the top, there is a navigation bar with 'arcserve unified data protection', 'Messages (1)', 'administrator', and 'Help'. Below this is a menu with 'dashboard', 'resources', 'jobs', 'reports', 'log', 'settings', and 'high availability'. The main content area is titled 'Modify a Plan' and shows a task configuration for 'Task2: Replicate to a remotely-managed RPS'. The 'Task Type' is set to 'Replicate to a remotely-managed RPS'. The 'Source' tab is active, showing fields for 'Remote Console', 'Username', 'Password', 'Port', 'Protocol', 'Enable Proxy', 'Proxy Server', 'Port', 'Proxy server requires authentication', 'Username', and 'Password'. The 'Remote Console' field contains '10.10.255.255' and has a red error message icon next to it. A tooltip message says 'Please select a remote console.' The 'Connect' button is at the bottom of the form.

この問題は、ローカル コンソールとリモート コンソールで同じ GUID を使用することが原因で発生します。

リモートで管理される RPS タスクを別のアプライアンスでサポートするには、以下の手順を実行します。

1. 以下のレジストリパスからローカル アプライアンスの GUID を削除します。

`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Arcserve\Unified Data Protection\Management\Console\GUID`

- PowerShell で以下のコマンドを使用して、データベースから GUID を削除します。

```
$database = 'arcserveUDP'  
$server = 'localhost\arcserve_app'  
$sqlconn = New-Object System.Data.SqlClient.SqlConnection  
$sqlconn.ConnectionString = "Data Source=$server;Initial  
Catalog=$database;Integrated Security=SSPI;"  
$sqlconn.Open()  
$sqlcmd = New-Object System.Data.SqlClient.SqlCommand  
$sqlcmd.Connection = $sqlconn  
$sqlcmd.CommandText = "delete from as_edge_configuration where  
ParamKey='ConsoleUuid'"  
$sqlcmd.ExecuteNonQuery()  
$sqlconn.Close()
```

- ローカル アプライアンス マシン上の UDP 管理 サービスを再起動します。
- ローカル マシンの UDP コンソールから、以下の手順を実行します。
 - [ノード]ビューで [すべてのノード]を選択します。
 - 右クリックして、[更新]を選択します。
 - [OK]をクリックし、すべてのノードを更新します。
- [復旧ポイント サーバ]ビューですべての RPS ノードを選択し、右クリックして、[更新]を選択し、すべての RPS ノードを更新します。

2 つのアプライアンス マシン間で、[リモートで管理される RPS ヘレプリケート]が正常にサポートされます。

モニタが別のアプライアンスである仮想スタンバイ(VSB)タスクを実行するベスト プラクティス

Arcserve UDP アプライアンス v6.5 Update1 上で、VSB タスクを実行し、別のアプライアンスをモニタとして使用する場合、VSB タスクが失敗し、アクティビティログに以下のエラーメッセージが表示されます。

注: この問題は、Arcserve UDP v6.5 Update 3 以上のデフォルトバージョンを備える UDP アプライアンスでは修正されます。

エラーメッセージ: リモート サーバ[IP]、ポート = 4090 への接続に失敗しました。

Severity	Time	SiteName	Node Name	Generated From	Job ID	Job Type	Message
❌	7/18/2017 3:04:20 AM	Local Site	10.10.255.255	vsb2	3	Virtual Sta...	The Virtual Standby job failed.
ℹ️	7/18/2017 3:04:20 AM	Local Site	10.10.255.255	vsb2	3	Virtual Sta...	Synchronize source machine adapter information to Virtual Standby successfully.
ℹ️	7/18/2017 3:04:20 AM	Local Site	10.10.255.255	vsb2	3	Virtual Sta...	The Virtual Standby job copied data totaling 0 Bytes, the elapsed time was 0 Sec, and the average throughput was 0.00 MB/Min.
❌	7/18/2017 3:04:20 AM	Local Site	10.10.255.255	vsb2	3	Virtual Sta...	Failed to convert session S0000000001 to the host for VM [UDPVM_WIN-92KBNJ8J439].
❌	7/18/2017 3:04:20 AM	Local Site	10.10.255.255	vsb2	3	Virtual Sta...	An unexpected error has occurred when attempting to convert sessions for VM [UDPVM_WIN-92KBNJ8J439]. To remedy this problem, please submit a new backup to start the Virtual Standby job. If the problem persists, contact arcserve support.
❌	7/18/2017 3:04:20 AM	Local Site	10.10.255.255	vsb2	3	Virtual Sta...	Failed to connect to remote server [10.57], port = 4090.
❌	7/18/2017 3:02:40 AM	Local Site	10.10.255.255	vsb2	3	Virtual Sta...	Failed to connect to remote server [10.57], port = 4090.
ℹ️	7/18/2017 3:01:28 AM	Local Site	10.10.255.255	vsb2	3	Virtual Sta...	Try VDDK advanced transport mode (SAN or HotAdd).
ℹ️	7/18/2017 3:01:12 AM	Local Site	10.10.255.255	vsb2	3	Virtual Sta...	Upload meta data to VM [UDPVM_WIN-92KBNJ8J439].
ℹ️	7/18/2017 3:01:12 AM	Local Site	10.10.255.255	vsb2	3	Virtual Sta...	Begin to convert session S0000000001.
ℹ️	7/18/2017 3:01:12 AM	Local Site	10.10.255.255	vsb2	3	Virtual Sta...	Virtual Standby job will convert session S0000000001.
ℹ️	7/18/2017 3:01:04 AM	Local Site	10.10.255.255	vsb2	3	Virtual Sta...	VM was created. VM name is [UDPVM_WIN-92KBNJ8J439].
ℹ️	7/18/2017 3:00:49 AM	Local Site	10.10.255.255	vsb2	3	Virtual Sta...	The source machine is [10.57], the backup destination is [X:\Arcserve\data_store\common\WIN-92KBNJ8J439\91257b6-1310-4b17-8ca7-971de742d347] on Recovery Point Server [vsb2], and the data store name is [vsb2_data_store].
ℹ️	7/18/2017 3:00:48 AM	Local Site	10.10.255.255	vsb2	3	Virtual Sta...	The monitor server is [10.57] and is used as a proxy for data transfer.
ℹ️	7/18/2017 3:00:48 AM	Local Site	10.10.255.255	vsb2	3	Virtual Sta...	Start a Virtual Standby job with destination type VMware ESX Server, and the hypervisor host name is [10.57].
ℹ️	7/18/2017 3:00:48 AM	Local Site	10.10.255.255	vsb2	3	Virtual Sta...	Virtual Standby job started.

この問題は、モニタ アプライアンスと Arcserve UDP RPS アプライアンス マシンの両方に同じ GUID が存在することが原因で発生します。

VSB タスクをサポートするには、以下の手順を実行します。

1. コマンド ラインで以下のコマンドを使用し、Arcserve UDP RPS アプライアンス上のすべての UDP サービスを停止します。

```
C:\Program Files\Arcserve\Unified Data Protection\Management\BIN>
cmdutil.exe /stopall
```

2. 以下のレジストリパスを使用して、ローカルアプライアンスから GUID を削除します。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Arcserve\Unified Data  
Protection\Engine\GUID
```

3. コマンドラインで以下のコマンドを使用し、Arcserve UDP RPS アプライアンス上のすべての UDP サービスを起動します。

```
C:\Program Files\Arcserve\Unified Data Protection\Management\BIN>  
cmdutil.exe /startall
```

4. ローカルマシンの UDP コンソールから、以下の手順を実行します。
 - a. [プラン]ビューで [すべてのプラン]を選択します。
 - b. 右クリックし、[今すぐ展開]を選択します。
 - c. [OK]をクリックして、すべてのプランを展開します。

VSB タスクが正常にサポートされます。

第 14 章: 使用条件

この製品の一部には、サードパーティのソフトウェアプロバイダによって開発されたソフトウェアが含まれています。以下のセクションに、このサードパーティソフトウェアに関する情報を示します。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

putty	226
-----------------------------	-----

putty

この製品に含まれている「putty」コンポーネントの詳細を以下に示します。

コンポーネント名	putty
コンポーネントベンダ	Simon Tatham によって最初に開発されました。
コンポーネントバージョン	0.64
リーガルコメント	http://www.chiark.greenend.org.uk/~sgtatham/putty/licence.html
プロジェクト名	Appliance Rhodium
コンポーネントタイプ	オープンソース
ソースコードURL	http://the.earth.li/~sgtatham/putty/0.64/
必要なプラットフォーム	Windows 2012 R2
コンポーネントURL	http://the.earth.li/~sgtatham/putty/0.64/x86/
コンポーネントバージョン	http://the.earth.li/~sgtatham/putty/0.64/x86/

ジョン URL	
説明	アプライアンスマシン上で、putty.exeを使用してLinuxバックアップサーバと通信し、システムロケールとUDP Linux ロケールを変更します。
機能	アプライアンス
ライセンステキスト	<p>http://www.chiark.greenend.org.uk/~sgtatham/putty/licence.html</p> <p>PutTYの著作権はSimon Tathamが有しています(1997-2015)。</p> <p>一部の著作権は、Robert de Bath、Joris van Rantwijk、Delian Delchev、Andreas Schultz、Jeroen Massar、Wez Furlong、Nicolas Barry、Justin Bradford、Ben Harris、Malcolm Smith、Ahmad Khalifa、Markus Kuhn、Colin Watson、Christopher Staite、およびCORE SDI S.A.が有しています。</p> <p>このソフトウェアおよび関連する文書ファイル(以下「ソフトウェア」)を入手したすべての人は、このソフトウェアを制限なしに使用することが無償で許諾されています。これには、ソフトウェアの使用、複製、変更、結合、発行、配布、サブライセンスおよび販売についての制限なしの権利が含まれます。また、このソフトウェアを提供する相手に対してそのような行為を許可することも許諾されています。この許諾は次の条件を前提としています。</p> <p>上記の著作権に関する通知およびこの許諾通知は、ソフトウェアの複製物および実質的な部分のすべてに含めてください。</p> <p>本ソフトウェアは「現状のまま」で、明示であるか暗黙であるかを問わず、何らの保証もなく提供されます。ここでいう保証とは、商品性、特定の目的への適合性、および権利非侵害についての保証も含みますが、それに限定されるものではありません。Simon Tathamは、契約行為、不法行為、またはそれ以外であろうと、ソフトウェアに起因または関連し、あるいはソフトウェアの使用またはその他の扱いによって生じる一切の請求、損害、その他の義務について何らの責任も負わないものとします。</p>
著作権テキスト	<p>http://www.chiark.greenend.org.uk/~sgtatham/putty/licence.html</p> <p>PutTYの著作権はSimon Tathamが有しています(1997-2015)。</p> <p>一部の著作権は、Robert de Bath、Joris van Rantwijk、Delian Delchev、Andreas Schultz、Jeroen Massar、Wez Furlong、Nicolas Barry、Justin Bradford、Ben Harris、Malcolm Smith、Ahmad Khalifa、Markus Kuhn、Colin Watson、Christopher Staite、およびCORE SDI S.A.が有しています。</p> <p>このソフトウェアおよび関連する文書ファイル(以下「ソフトウェア」)を入手したすべての人は、このソフトウェアを制限なしに使用することが無償で許諾されています。これには、ソフトウェアの使用、複製、変更、結合、発行、配布、サブライセンスおよび販売についての制限なしの権利が含まれます。また、このソフトウェアを提供する相手に対してそのような行為を許可することも許諾されています。この許諾は次の条件を前提としています。</p> <p>上記の著作権に関する通知およびこの許諾通知は、ソフトウェアの複製物および実質的な部分のすべてに含めてください。</p> <p>本ソフトウェアは「現状のまま」で、明示であるか暗黙であるかを問わず、何らの保</p>

	<p>証もなく提供されます。ここでいう保証とは、商品性、特定の目的への適合性、および権利非侵害についての保証も含まれますが、それに限定されるものではありません。Simon Tatham は、契約行為、不法行為、またはそれ以外であろうと、ソフトウェアに起因または関連し、あるいはソフトウェアの使用またはその他の扱いによって生じる一切の請求、損害、その他の義務について何らの責任も負わないものとしします。</p>
使用目的	<p>アプライアンスマシン上で、putty.exe を使用して Linux バックアップサーバと通信し、システムロケールと UDP Linux ロケールを変更します。</p>
必要な変更	<p>x</p>